学生相談における女子学生の恋愛相談への支援のあり方に関する研究

2020 年

兵庫教育大学大学院

連合学校教育学研究科

学校教育実践学専攻

（鳴門教育大学）

井ノ崎　敦子

目　次

第１章　本研究の背景と目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第１節　大学と学生相談・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２節　学生相談における恋愛相談・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第３節　大学生の恋愛・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第４節　自我と自己・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第５節　自己の発達と病理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第６節　国内外の自己に関する心理学的研究・・・・・・・・・・・・・・・・10
第７節　自己心理学的観点から見た学生相談・・・・・・・・・・・・・・・・12
第８節　アイデンティティのための恋愛と自己のための恋愛の違い・・・・13
第９節　ジェンダーと恋愛・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第１０節　恋愛に関する心理学的研究についての文献研究・・・・・・・・・15
第１１節　学生相談における恋愛相談の支援目標・・・・・・・・・・・・・21
第１２節　本研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

第２章　女子学生の恋愛の特徴と学生相談における恋愛相談の実態・・・・・・・23
第１節　大学生の恋愛の発達と自己の発達との関連に関する研究・・・・・23
第２節　学生相談における恋愛相談に関する実態調査研究・・・・・・・・・35

第３章　性的虐待被害経験による男性恐怖を抱く女子学生との面接過程・・・・・45
第１節　問題と目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
第２節　事例の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
第３節　面接経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
第４節　考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
第５節　おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56

第４章　「自己のための恋愛」を繰り返す女子学生との面接過程・・・・・・・・57
第１節　問題と目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
第２節　事例の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
第３節　面接経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
第４節　考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
第５節　おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73

第５章　恋愛関係継続時の恋愛問題を抱える女子学生との面接過程・・・・・・・74
第１節　問題と目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
第２節　事例の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76
第３節　面接経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77
第４節　考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
第５節　おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86

第６章　本研究の総括と今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
　第１節　各章のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
　第２節　総合的考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89
　第３節　本研究の課題と今後の展望・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・92

引用参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・95

資料・付録

謝辞

第１章　本研究の背景と目的

第１節　大学と学生相談

第１項　大学教育の変化

従来の大学教育では，学生は学問を修めるために大学に入り，日々，学問を主体的に探究することが最も重要であるとされていた（濱中，2013）。そのため学生は，教員に修学上の指導を仰いだり，職員に修学上の手続きを依頼するなどに留め，それ以外の問題については，個々人で解決することが当然とされていた。つまり，一定の精神的安定性と成熟性をもっている学生が，勉学に励むところが大学であるという認識であった。さらには，学生は個々の問題意識に沿って主体的に学ぶ者であり，教員や職員は，そうした学びのプロセスを妨害せず，あくまでも学生の申し出がないかぎりは介入しないという姿勢が良しとされていた。

近年，「大学の大衆化」が進み，大学への進学を希望するほぼすべての者が大学に入学することができる，「全入時代」に突入している（鵜飼，2019）。少子化と大学の入学定員の拡大が進行することに伴い，大学・短期大学の志願者のほとんどが入学できる状態になってきており，形容する「大学全入」という言葉は，大学進学の需給関係の変化を象徴している。入学をめぐって激しい競争が行われる選抜性の強い大学が一部に存在する一方で，私立大学の 47 パーセント（平成 20 年度）は入学定員を充足できず，合格率が 90 パーセント以上という大学も 100 校以上存在する。このように，大学の入学者確保をめぐる状況が二極化しているが，総じて大学への入学が容易となってきている（中央教育審議会，2007）。そのため，最近は，学力，価値観，生活環境といった面において多種多様な学生が大学に入学している。学生の精神的安定性や成熟性，問題意識や修学意欲における個人差も大きく，教職員が積極的に介入しないと学生生活に適応困難となる学生も目立つようになってきている。つまり，従来の大学教育で通用していた支援の理念や手法が通用しなくなってきており，大学教育は変革を迫られている。

第２項　学生支援と学生相談

こうした変革要請を受けて，国は，全入時代に合わせた学生支援方針を打ち出している。文部省（現文部科学省）が 2000 年に発行した「大学における学生生活の充実方策について」という学生支援指針を示す報告書を受けて，独立行政法人日本学生支援機構が 2007 年に発行した「大学における学生相談体制の充実方策について -『総合的な学生支援』と『専門的な学生相談』の『連携・協働』- 」では，学生支援の３階層モデルを提示している（図１）。第１層は「日常的学生支援」である。これは，教職員が学習指導や窓口業務などの日常的にインフォーマルな形で行なう支援を指す。続く第２層は「制度化された学生支援」である。これは，クラス担任や何でも相談窓口などの役割や機能を担った教職員による支援を指す。最後の第３層は「専門的学生支援」である。これは，より困難な課題が生じた際に学生相談や保健室などによって行なわれる専門的な支援を指す。そして，すべての教職員と専門家の連携と協働によって学生支援が達成されることが学生に最も有益な支援となることを強調している。特に，専門的学生支援機関である学生相談は，理解や支援の困

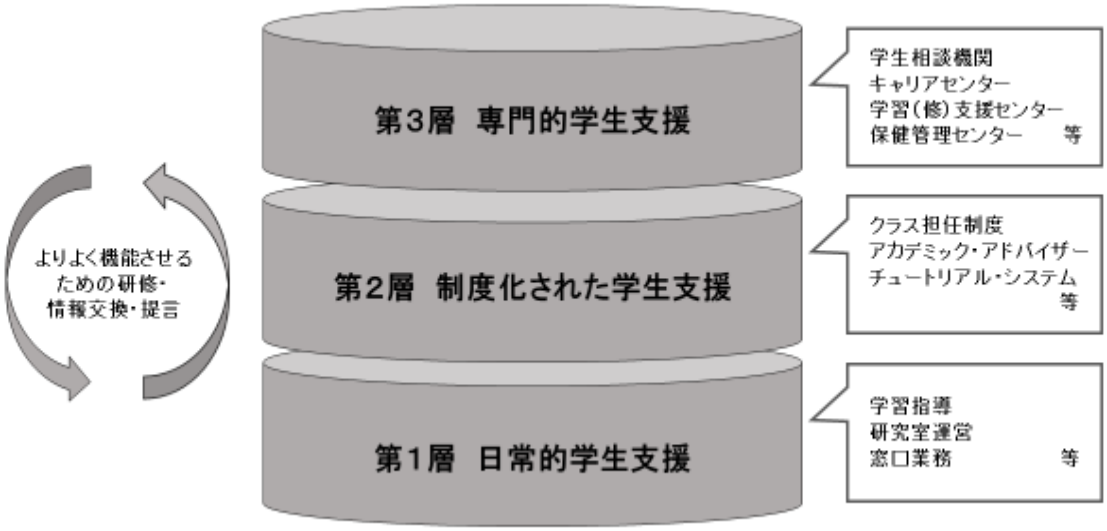


図１　学生支援の３階層モデル（日本学生支援機構（2007）を筆者が一部改変し作成）

難な学生への支援が求められる機関であり，学生が学生生活に適応するための重要な砦となる可能性が高い。そのため，この３階層モデルによる学生支援を有効なものとするために，学生相談の役割への期待は大きいと考えられる。

第３項　学生生活サイクルと学生相談

前項で述べたように，学生相談の役割への期待が高まる中，鶴田（2001）は「学生生活サイクル」モデルを提唱した。学生生活サイクルとは，学生相談事例や大学生全体を理解するために大学生の学年移行に伴う心理的課題の変化を示したモデルである。学生は，学年の移行とともにさまざまな課題に直面し，それらを克服したり，克服に伴う葛藤を抱えたりすることを繰り返しながら心理的に成長していく（鶴田，2010）。

学生生活サイクルでは，学部生期が入学期（入学後１年間），中間期（一般的には，２～３年次），卒業期（卒業前１年間）という時期に分かれており，その３つの時期に大学院の期間である大学院学生期が加えられている。そして，それぞれの時期ごとに学生が直面しやすい悩みと課題，および学生相談カウンセラーとしての対応が示されている。

鶴田（2010）に基づき，各時期の特徴と対応のポイントを順に説明する。また，各時期の特徴を表１に示す。

表１　学生生活サイクルの特徴（鶴田，2010 を参考に筆者が作成）

	入学期 入学後１年間	中間期 ２～３年次	卒業期 卒業前１年間	大学院学生期 大学院の期間
学生の課題	・学生生活への移行 ・今までの生活からの分離 ・新しい生活の開始	・学生生活の展開 ・自分らしさの探求 ・中だるみ ・現実生活と内面の統合	・学生生活の終了 ・社会生活への移行 ・青年期後期の節目 ・現実生活の課題を通した内面の整理	・研究者・技術者としての自己形成
学生の心理学的特徴	・自由度の高い中での自己決定 ・学生の側からの学生生活へのオリエンテーション ・高揚と落ち込み	・あいまいな中での深まり ・親密な横関係	・もうひとつの卒業論文 ・将来への準備	・職業人への移行 ・自信と不安
来談学生の主題	・環境移行に伴う課題 ・入学以前から抱えている未解決な課題	・無気力 ・生きがい ・対人関係をめぐる問題	・卒業を前に未解決な課題に取り組む ・卒業前の混乱	・研究生活への違和感 ・能力への疑問 ・研究室での対人関係 ・指導教員との関係

（１）入学期

①入学期の特徴

入学期は，入学後１年間を指す。入学期において，学生は，高校時まで慣れ親しんできた生活から離れ，大学での新たな生活に移行する。この入学期では，生活上の変化が大きく，急激に自分一人で決めなければならない事項が増加する。そこで学生は，入学に伴う課題と，入学以前から抱えていた未達成な課題とに直面する。

修学面では，学生相談機関において，入学直後の修学上の問題（履修方法など），修学への集中困難などの相談がある。大学のカリキュラムに慣れること，自分の関心領域を選ぶなどが課題となる。

進路面では，学生相談機関において，不本意入学や進路変更希望，入学後の目標喪失などの相談があり，大学や学部に所属感をもつこと，学科や専攻を選ぶことが課題となる。

対人面では，学生相談機関において，新しい人間関係を構築する困難さ，クラスやサークルなどの小集団に入る困難さなどの相談があり，新しい対人関係を開始することが課題となる。

このように,入学期においては,新しい環境で生活を展開させ始めることが課題となり,新しい生活に適応できない場合には,過去に馴染んだ習慣や対人関係に執着しやすくなる。

②　入学期の学生に対する学生相談における対応

入学期の学生は，移行に伴う問題や入学以前から抱えている未解決な問題の解決を求めて学生相談を利用することが多い。そのため，入学期の学生に対応する際，以下の２点を留意することが求められる。

１つは，学生の入学したことを肯定する力を支えることである。入学期の学生生活は，入学した大学や学部への満足度によって左右される。入学にまつわる感情や考えが，大学への所属感や適応に影響を与え，学生生活の基盤を形成する。

２つ目は，学生の新しい生活を開始する力を支えることである。入学直後においては，学生生活の開始が課題であり，修学，進路，対人関係などにおける新たな挑戦と，新たな生活リズムに慣れることが学生にとって重要である。

（２）中間期

①中間期の特徴

中間期は，一般的には２年次から３年次の期間を指す。中間期は，大学への初期適応の段階を終え，生活上の変化が比較的ゆるやかになる期間である。学生生活を展開させて自分らしさを探求することが課題となる時期であり，また，大学卒業後の生き方の選択をすべき時期が接近する時期である。中間期の学生は，時間をかけて自分自身を見つめることができることもあり，その中で，大学入学直後の表面的な適応が一時的に壊れるような体験をする時期でもある。

修学面では，学生相談機関において，無気力，意欲減退などの相談があり，学生が自分自身の関心の的を見出すことが課題となる。

進路面では，学生相談機関において，進路変更や将来の進路についての相談があり，職業選択への準備や研究室の選択が課題となる。

対人面では，学生相談機関において，学内外の同年代者との関係性，リーダーシップの取り方などについての相談があり，対人関係の深まりと拡がりが課題となる。

②中間期の学生に対する学生相談における対応

中間期の学生は，無気力，生きがいの喪失，または対人関係の問題の解決を求めて学生相談を利用することが多い。そこで，中間期の学生に対応する際，次の２点を留意する必要がある。

１つは，学生の学生生活を管理する力を支えることである。中間期は，学生生活の送り方の個人差が大きい時期であるため，日常生活の過ごし方を話題にしたときに，個々の学生の状態を理解することが重要である。

２つ目は，学生の学生生活を展開する力を支えることである。中間期は，学生が自分らしい学生生活を展開させることが求められる時期であり，修学，進路，対人関係にどのように取り組んでいるかに注目することが重要である。

（３）卒業期

①卒業期の課題

卒業期は，卒業前の１年間を指す。この時期は，学生生活を終え，卒業後の生活への準備をする時期である。近年では，大学院に進学する学生も多いことから，必ずしも卒業前１年間が学生生活の最後の時期とならないが，大学院に進学するにせよ，１つの大きな節目となる時期である。卒業期の学生は，卒業を前に未解決の問題や卒業前の混乱の解決を求めて学生相談を利用することが多い。

修学面では，学生相談機関において，研究課題に関する相談があり，卒業研究への集中，研究の完成が課題となる。

進路面では，学生相談機関において，進路選択の迷いや不安などの相談があり，卒業後の進路決定が課題となる。

対人面では，学生相談機関において，研究室での人間関係などの相談があり，卒業による別れなどが課題となる。

②卒業期の学生に対する学生相談における対応

卒業期の学生に対応する際には，次の２点に留意する必要がある。

１つは，学生の進路を決める力を支えることである。卒業期には，現実的に進路決定を行なうことが課題となる。そのため，内面と現実との統合が課題となる。進路の選択と決定には，これまでの生活を総括し，将来への準備をする作業を支えることが重要である。

２つ目は，学生の学生生活を総括する力を支えることである。卒業という人生の節目を迎えるにあたり，未解決であった課題を整理し，総括する作業を支えることが重要である。

（４）大学院学生期

①大学院学生期の特徴

大学院学生期は，大学院の期間を指す。大学院学生期は，学生が学生生活を終える時期であり，職業人としての自分自身を形成する時期でもある。前期（修士）課程では，研究生活の開始と修士論文の完成，研究室での人間関係，進路選択などが課題となりやすく，後期（博士）課程では，博士論文の完成と進路選択が課題となりやすい。

修学面では，学生相談機関において，研究生活への不安や違和感，他大学からの入学者の適応などの相談があり，研究活動への集中，研究の完成などが課題となる。

進路面では，学生相談機関において，進路選択や将来への不安などの相談があり，研究室への適応，修了後の進路決定が課題となる。

対人面では，学生相談機関において，研究室での人間関係などの相談があり，特に研究室における教員や他学生との関係性が課題となる。研究室は，閉じられた固定メンバーで構成されることが多く，ハラスメントの問題が生じやすいのも大学院学生期の特徴である。

②大学院学生期の学生に対する学生相談における対応

大学院学生期の学生は，研究生活への違和感，研究能力への疑問，研究室での対人関係の問題，指導教員との関係の問題の解決を求めて学生相談を利用することが多い。

大学院学生期の学生に対応する際，次の 2 点を留意する必要がある。

１つは，学生が研究生活に馴染む力を支えることである。学生が研究室に馴染み，研究テーマを決めて，研究方法を習得すること，また，研究テーマを自分自身のものとして主体的に探究する力をつけることができるように支援をすることが重要である。

２つ目は，学生が社会に着地する力を支えることである。大学院学生期は，学生時代最後の時期であり，社会に着地することや就職することが重要である。そのため，学生が社会に適切に着地するために必要な，学問的能力とともに，コミュニケーション力も含めた総合的な能力を獲得できるように支援することが重要である。

第２節　学生相談における恋愛相談

学生相談とは，学生の修学や学生生活への適応を目的とする心理的支援である（鈴木，2010）。齋藤（2010）は，学生相談の理念として，「[前提] 大学という教育機関であり，かつコミュニティでもあるという場の特徴と各大学ごとの個別性を念頭におき，[目的] 学生個人個人に焦点を当てて，学内外への適応や心理的成長を促し，大学の教育目標にかなう形で，[機能] クリニック的な心理臨床，厚生補導的な個別性に応じた働きかけ，そして教育・発達援助的な働きかけを，対象者と環境を的確にアセスメントしたうえで行なうものである」とまとめている。この学生相談における個別相談が扱う相談内容には，進路に関する相談，修学に関する相談，心理・性格に関する相談，対人関係に関する相談，障害や病理をもつ学生の相談，危機対応，生活上のトラブルの相談などがある。このうち，対人関係に関する相談の中には恋愛に関わるものがあり，たとえば恋愛中の喧嘩，失恋の悩み，DV やストーカー的な行為が含まれることがある。そして，一過性のこともあるが，強い抑うつ状態や精神的混乱が生じることもある（岩田，2010）。これらは性的関心や性的関係が伴うことがあるので，気持ちを強く揺さぶられ経験になると考えられる（岩田，2010）。なお，本研究では，恋愛とは，二者間での性的関係を想定した親密性を意味し，恋愛関係とは，そうした親密性を有する二者関係を指すことにする。

第３節　大学生の恋愛

多くの学生は青年であり，青年にとって恋愛は重要な関心テーマの一つである（相羽，2011）。大野（2010）は，青年の恋愛は，「アイデンティティのための恋愛」であると指摘している。アイデンティティとは，Erikson(1959)が提唱した漸成発達理論において青年期の発達主題として提示されたものである。Erikson(1959)は，アイデンティティの感覚を「内的な不変性と連続性を維持する各個人の能力，すなわち自我機能が他者に対する自己の意味の不変性と連続性に合致する経験から生まれた自信」であると説明している。青年期においては，アイデンティティを統合することが求められるのではなく，アイデンティティの統合に向けて覚悟を決めてスタートラインに立つことが求められる（大野，2010）。さらに Erikson(1950)は，青年期の恋愛のほとんどが，自分の拡散した自我像を他人に投射して，それが明確化されていく中でアイデンティティを定義づけようとする努力であると指摘している。この指摘を受けて，大野（2010）は，アイデンティティの統合過程において，アイデンティティを他者からの評価によって定義づけようとする，または補強しよ

うとする恋愛的行動を「アイデンティティのための恋愛」と呼んだ。この「アイデンティティのための恋愛」には，①相手からの賛美，賞賛を求めたい，②相手からの評価が気になる，③相手の挙動に目が離せなくなる，④しばらくすると，呑み込まれる不安を感じる，⑤交際が長続きしない，という５つの特徴を有する。自分のアイデンティティに自信がもてないため，相手からの賞賛をよりどころとしがちであり，賞賛し続けてもらうことで心理的基盤が保たれる傾向が見られる。さらには，相手からの評価が悪くなると，相手を失うだけでなく，自信も失い，大きな不安と心理的混乱を抱えることになるので，相手からの評価も気になる。また，アイデンティティに自信がもてないことから，相手と自分自身との心理的境界があいまいになり，相手が自分の心の中に必要以上に入り込んできたり，相手に取り込まれ自分が次第になくなっていくように感じ，息苦しささえ感じるようになる。そして，このような恋愛をする青年にとって最も関心があるのは，相手ではなく自分自身であり，相手に映した自分の姿である。自分に関心をもってもらうことに集中するため，相手を愛する余裕がなく，関係が破綻しやすいと考えられるのである。

このように，青年の恋愛は自我機能の発達を補強する，または強化し，アイデンティティの統合に寄与することが指摘されている。

第４節　自我と自己

Erikson(1959)は，アイデンティティの形成は，自我の機能の一部であると述べている。自我とは，個人が経験を組織づけ合理的な計画を立てる中枢である（Erikson,1959）。

これに対し，自己心理学を創始した Kohut は，自我が機能するためには，自己がまとまっている必要があることを指摘した。(Kohut,1977)。自己は，自我のような心の機能ではなく，その内部にある構造であり（Kohut, 1977; Siegel, 1996），自己が安定することによって，自我の機能性が高まると指摘した。

Kohut(1977)は，人が自分自身をどのように体験しているかという「自己体験」の観点から精神分析を再構築し，それを「自己心理学」と名付けた（安村，2016）。Sigmund Freud は精神分析理論を構築し，自立性をもった自我を中心とした，自我，エス，超自我という 3 つの機能からなる心の構造論を発展させ（小此木，1977），この構造論がその後の自我心理学の出発点となった。Erikson も自我心理学者の一人である。一方，Kohut は，「機能としての自我」ではなく，主観的な体験の座としての「自己」に注目した（安村，2016）。Kohut の「自己」は，主観的な自己体験の全体性を意味している（安村，2016）。そして，自分自身を統合された全体的な自己として認識し，生き生きと存在している自己として十全に体験できている状態を，「凝集的な自己」と呼んだ（Kohut,1977）。

さらに，Kohut(1977)は，凝集的な自己ではない自己の状態を，断片化した自己，すなわち自己の障害と名付けた。そして，自己の障害をもつ者は，自我を問題にする段階に進むことができないと指摘している（Kohut, 1977）。つまり，自我が機能するのは，他者を自分とは違う独自の存在として認識し，扱うことができる自己を獲得した後であると主張した。従って，自己の障害をもつ青年が恋愛をする場合，自我機能を問題とする恋愛に進むことができず，自己の凝集性を求める恋愛に留まることが予想される。

次の節では Kohut の自己の発達について説明する。

第５節　自己の発達と病理

第１項　自己の発達

Kohut（1977）は，人が精神的に健康で適応的な生活をするためには，自己の適切な発達が求められると主張した。Kohut（1977）は，幼少期といった人生早期において人は「自分は全能である」という自己の誇大性を体験していると考えた。自己心理学では，これを誇大自己と呼ぶ。その後，人は，自分が思うように成し遂げることができなかったり，思いどおりに事が進まないことを経験する中で，自分が全能ではないことに気づき，無力感に圧倒されそうになる危機を迎えることになる。この危機を脱するために，人は情緒的に全面的に依存している養育者を全能視し，自分自身がその理想的な親の一部のように体験することで，自己の誇大性を維持しようとする。自己心理学では，この役割を担う養育者に求められる機能を自己対象と呼ぶ。自己対象とは，養育者そのものを指すのではなく，養育者に求められる機能を意味する。つまり，真の対象は，自己から心理的に分離している別個の存在であるが，自己対象は，対象の個人的特性に関して体験されるものではなく，自己の一部として体験される（Siegel, 1996）。対象が自己対象として機能しているときには，その個人には手足やその他の身体部分であるかのように，存在して当たり前のものとして受け取られる。そして，対象が自己対象として機能することに失敗したときにのみ，対象への不満や違和感をもつことにより意識できるようになる。

第２項　自己対象の種類

Kohut（1977）によれば，自己対象にはいくつかの種類がある。そのうちの代表的なものとして，鏡映自己対象，理想化自己対象，及び双子自己対象の 3 つの自己対象がある。鏡映自己対象とは，顕示的な自己愛を受け入れて肯定的に反応する機能を意味する（Siegel, 1996）。つまり，自己がいかに魅力的で価値のある存在であるかを実感させてくれる機能が鏡映自己対象である。２つ目の理想化自己対象とは，完全性，安全性，および全体性の感覚を自己にもたらす機能を意味する。つまり，自己の理想的な憧れの対象として存在する機能が理想化自己対象である。３つ目の双子自己対象とは，自己対象として機能している他者を自分自身と同じ人間であると感じる機能を意味する。

これらの鏡映自己対象，理想化自己対象，双子自己対象は，それぞれ独立しているのではなく，互いに関連しあっている（Kohut, 1977）。また，現代自己心理学においては，本論文で紹介した自己対象以外にも様々な自己対象が存在しているとされている（Wolf, 1988; Lichtenberg et al., 2010）。

第３項　自己対象欲求の成熟

自己心理学では，前項で示した自己対象を求める気持ちを自己対象欲求と呼んでいる(Kohut, 1977)。この自己対象欲求は自己の発達に伴って発達すると自己心理学では考えられている。

人生早期においては，自分自身の期待どおりに完全に満たされることを求める。その後，自己が発達するにつれ，次第に，期待どおりに満たされなくとも，ほどほどに満たされれば満足できるような欲求となる。自己心理学では前者を太古的自己対象欲求，後者を成熟

した自己対象欲求と呼んでいる（Kohut, 1984）。

前項で示したように，自己対象には，数々の種類が存在するが，本人の誇大性を保証する鏡映自己対象と，本人の理想化を請け負う理想化自己対象は特に重要な自己対象と考えられているため，これらの自己対象を求める自己対象欲求も重要であると考えられている（Wolf, 1988）。鏡映自己対象を求める欲求である鏡映自己対象欲求とは，自己対象として機能する他者に対し，自分は唯一無二の大切な存在であるという生得的な感覚への承認を求める気持ちを指す。また理想化自己対象欲求を求める理想化自己対象欲求とは，自己対象として機能する者に描く，落ち着いていて万能な存在というイメージに，自分自身を重ね合わせることを求める気持ちを指す。

ただし，自己対象欲求は自動的に発達するわけではない。自己対象欲求が発達するには，誇大性を維持したいという欲求，すなわち太古的自己対象欲求が自己対象として機能する養育者によって共感的に応じられることと，現実の接触によって少しずつ誇大性の錯覚から抜け出すことが必要である。幼児は完全な欲求の満足を求める。それに対して子どもにとって自己対象として機能することが求められている養育者は，幼児のそうした欲求を受けとめつつも，完全に満足させるのではなく，万能感を失っても自分はやっていけるという安心感をもつことができるように関わることが求められるのである。その過程を経て，凝集的な自己となり，自我の機能性が高まることで，鏡映自己対象が自我に統合されるほど，現実志向的な野心となる（Siegel, 1996）。現実志向的な野心をもつようになると，自信の感覚を伴う，健康的な，活動と成功の楽しみを体験するようになる。

また，理想化自己対象は，同じ過程を経て，凝集的自己となると自我に統合され，現実志向的な理想となる（Siegel, 1996）。現実志向的な野心をもつようになると，現実的な目標を設定し，その目標に向かって努力し続けることができるようになる。自己心理学では，こうした過程を経て人は次第に自己を成熟させ，凝集的な自己を形成し，精神的な健康さと適応を獲得できると考える。支持的な自己対象をもつ結果，自己の統一性が持続できる（Wolf, 1988）。幼児は，この共感的に理解される体験を積み重ねることで，少しずつ，自己対象欲求の不完全な充足に耐えることができるようになるとともに，自己が不完全で限界をもつことを受け入れることができるほどの自己の凝集性を獲得するようになる(Kohut,1984)。

反対に，幼児が自己対象として機能する他者から，自身の不全感を軽視されたり非難されたりして，十分に共感的に理解してもらえないと，自己の凝集性は獲得されない。その結果，幼児期を過ぎて年齢を重ねた後も，自己対象欲求の完全な充足に固執しつづけることになる。しかし，その後の成長過程において，太古的自己対象欲求が満たされないことで生じる不全感を共感的に理解されると，自己対象欲求は成熟する。つまり，自己対象欲求は，生涯にわたり，共感的に理解されることで成熟する可能性をもつのである。

以上，紹介した鏡映自己対象欲求と理想化自己対象欲求以外に，発達的にはその後で重要になる双子自己対象欲求が存在する。双子自己対象欲求とは，自己対象として機能する者と自分自身とが同じ人間同士であると感じることを求める気持ちを指す。

自己の発達の程度や，状況によって，重要となる自己対象欲求の種類が変わる（Kohut, 1984）。自己が発達するためには，その人にとって重要な自己対象欲求の充足が必要であ

る（Kohut, 1984）。

第４項　自己の病理

自己の発達過程において，自己対象である養育者が子どもの誇大性や理想化の欲求に共感的に応じることができなかったり，子どもが現実との接触で錯覚を脱することができなければ，自己は未熟な段階にとどまったまま，自己を全能視することに執着した凝集性のない不安定な自己のままとなる（Kohut, 1977）。そうすると，その自己を維持するために，自己対象に誇大自己の映し返しを求めたり，全能的な自己対象を求めて，激しい失望と怒りを繰り返すことになる。自己心理学では，前者を未熟な鏡映自己対象欲求，後者を未熟な理想化自己対象欲求と呼び,外傷体験により自己は発達が停止すると言われている。外傷体験には，自己対象として機能する対象が存在しないことや，自己が自己対象として機能すべき対象から利用されることなどがある。例えば，母親が子どもに完璧な存在であるように求めることにより，子どもが誇大な自己のままでとどまることがある。この誇大自己の状態は，子どもにとって恥ずべきものであるため，心の中で分裂排除され，否認する。また，子どもが独自にもつ欲求は無意識に抑圧され，現実的に満たされることがないため，子どもは低い自己評価を抱えることになる。これが自己の断片化した状態である。こうした子どもに必要なことは，新しい自己対象体験によって，外傷によって停止した自己の発達を再開させることである。

統一され，一貫して連続性がある「私は私である」という体験を組織化しようする傾向を喪失すること，すなわち自分であることの感覚の喪失は，もっとも深刻なパニックや恐怖の原因となる（Wolf, 1988）。そのため，自己の安定性を奪われることは，自我機能が低下するよりも深刻な精神的問題を引き起こすと考えられる。前述したように, Kohut(1984)は, 凝集的な自己ではない自己の状態を, 断片化した自己, すなわち自己の障害と呼んだ。

なお，Goldberg（1980）によれば，自己の病理は,「傷ついた自己」と「崩壊した自己」という２つの水準に分類することができる（Goldberg, 1980; Siegel, 1996）。「傷ついた自己」は自己が傷ついているものの，自己の核心部分が崩壊していない。しかし,「崩壊した自己」は，自己の核心部分が崩壊している状態であり,「傷ついた自己」よりも深刻な病理を示すと説明している。「傷ついた自己」の水準では，環境への適応が大きく阻害されることはないが,「崩壊した自己」の水準では，環境への顕著な適応不全を呈することを特徴とする。

第６節　国内外の自己に関する心理学的研究

ここで，国内外における自己の発達や病理に関する研究を概観する。

国外では，Banai ら（2005）が，鏡映自己対象欲求，理想化自己対象欲求，及び双子自己対象欲求を測定する尺度（SONI）を開発し，自己対象欲求を回避することが回避型アタッチメントや情緒的不適応と関連があることを見出している。また，Lopez ら(2013)は，SONI を用いてアタッチメントとの関連を検討した結果，鏡映自己対象欲求が高いほど，不安定型アタッチメントを示しやすいことを見出している。さらに Nehrig ら（2019）は，SONI を用いて，アタッチメントと子ども時代の養育環境不全との関連を検討し，自己対

象欲求が高いほど，不安定型や回避型のアタッチメントを強く示すこと，また，子ども時代の心理的虐待とネグレクト経験が多いほど，自己対象欲求が高いことを見出している。

国内では，上地・宮下（2005）が Kohut の自己心理学に基づいて，自己愛と関連した心理的緊張や刺激を処理して心理的安定を保つ力の弱さを「自己愛的脆弱性」と概念化している。その上で，承認・賞賛への過敏さ，潜在的特権意識，自己顕示抑制，自己緩和不全，目的感の希薄さという 5 つの因子からなる自己愛的脆弱性尺度を作成し，信頼性と妥当性を確認した。その自己愛的脆弱性尺度を用いた研究が存在し，上地・宮下（2009）は，自己愛的脆弱性尺度の短縮版を作成し，自己不一致と関連があること，また自己不一致とともに直接及び間接的に対人恐怖傾向を強めることを確認した。また，神谷・岡本（2012）は，自己愛的脆弱性尺度短縮版を用いて，自己愛的脆弱性が強いほど，心理的発達が未熟であることを確認している。さらに，神谷・岡本（2014）は，自己愛的脆弱性を 4 群に分けて,それぞれの親との自己対象体験の質的な違いを検討し,自己愛的脆弱性が弱い者は,幼少期と児童期に親との間で多様な自己対象体験を得ていること，自己愛的脆弱性が強い群は，幼児期や児童期の自己対象体験が不十分であることを確認している。

また，原田（2005）は，自己心理学の観点から，自己構造の安定性に関する尺度を開発し，親との自己対象体験が青年期における自己構造に与える影響について検討し，十分に共感的で応答的な養育者との自己対象体験が，自己構造の安定性を生み出すことを確認している。さらに原田（2006）は，自己心理学に基づく自己対象体験による自己の発達の観点から，青年期における自己形成・自己確立を“親から離れた関係性の中で自分の価値観が作られ，その価値観が再び親と近づく形で再構成されていく過程”と定義し，養育者をはじめとする様々な対象との自己対象体験が自己形成と自己確立を支えている程度やそれらの相互作用を半構造化面接による調査によって検証している。その結果，養育者やそれ以外の間での自己支持的な自己対象体験に支えられることによって，自己が安定し，自己確立・自己形成の過程が進むことを見出している。

これらの仮説検証的研究結果から，人生早期における自己対象体験が自己の発達を左右することが推察される。このことは臨床場面でも立証されてきている。例えば,富樫（2000）が，自己喪失と自己断片化を伴う境界例の 10 代男性との面接過程の分析を通して，断片化した自己を修復するために融合自己対象関係を強く求めているクライエントに，その欲求への共感を示す介入として交換日記を実施したところ，クライエントが融合自己対象関係を体験することができて，行動化をやめることができるほど，自己の凝集性が得られたことを確認している。また，吉井（2005）は，30 代女性との面接過程の分析を通して，共感的応答をする治療者との間で，クライエントが適切な自己対象体験を得ることが，クライエントの心理的問題の解決につながることを見出した。さらに，富樫（2009）は，万能幻想空想を示す 30 代男性との面接過程の分析を通じて，セラピストが運命を共有する間主観的な場においてクライエントが万能幻想空想を手放す決心をして行動に移すように展開することを示した。

こうした国内外の研究結果からも，適切な自己対象体験を得ることが自己の発達を促進させること，反対に，自己対象体験が不十分であるか，不適切であれば，自己の発達が阻害され，結果的に自己の病理を生み出すことが示唆されている。

第７節　自己心理学的観点から見た学生相談

第１項　共感的応答の治療的効果

第５節において，自己の発達再開には，適切な自己対象体験を得ることが必要であることを説明した。自己心理学では，適切な自己対象体験は，他者による共感的応答を体験することで獲得することができると考えている（Kohut, 1977）。共感的応答とは，単に甘やかしたり，全面的に承認することではなく，共感的応答をする者が，自身の主観を通して，その対象となる者の内的世界を，その対象となる者の視点から理解し，それを伝達することを意味する（Kohut, 1984）。共感的応答を受けた者は，自分自身の欲求や感情を異常なこととして否定するのではなく，どのような欲求も感情も自分自身であることを認めることができるようになる。つまり，共感的応答は，自己に安定と凝集性をもたらし，そのままの自分をかけがえのない存在として大切に思う気持ちをもたらす。

このような自己心理学的観点から見ると，学生相談に来談し，継続的な支援を要する学生の中には，自己対象体験の不足や不適切さによって，自己の発達が停止し，自分をかけがえのない存在として大切に思えなくなったり，自分は何者かすらわからなくなったりしている学生が存在すると考えられる。このように自己の発達が停止した学生が，自己の発達を再開させて，精神的健康を獲得し，学生生活に適応するためには，共感的応答を体験することが何よりも大切である。従って，学生相談のカウンセラーは，来談学生に対して，共感的応答を行なうことが重要である。

第２項　自己対象転移

自己の病理を示すクライエントに対し，太古的自己対象欲求への共感的応答を行うと，クライエントは，過去に阻害された発達欲求を生き生きとよみがえらせる（Siegel, 1996）。これを Kohut は自己対象転移と呼んだ（Kohut,1984）。自己対象転移には，太古的自己対象欲求の再動員によって生じる部分と，現在の年齢に相応の自己対象欲求から生じている部分と，カウンセリング状況の中で動員された自己対象欲求から生じている部分とが含まれる（Wolf, 1988）。そして，クライエントは，自己対象転移の中で幼児期に妨害された自己の欲求を再活性化させる（Kohut, 1984; Wolf, 1988）。しかし，それは，早期の幼児的な関係の単なる反復ではなく，妨害されていた発達したいという欲求が生き生きと蘇ったことを示す新しい体験であり，この体験により自己の修復が可能となる（Siegel, 1996）。太古的自己対象欲求の充足を契機に生じた自己対象転移の過程において，引き続きカウンセラーが共感的応答を継続すると，クライエントの自己対象欲求が適切に満たされることで成熟しうる。こうした自己対象欲求の成熟に伴い，自己の凝集性が高まることが，クライエントの精神的健康と適応につながる（Kohut, 1977）。

第３項　代償的構造

自己は，自己対象体験の不足や不適切さにさらされたとしても，心理的な生き残りを探求する。自己対象体験の不足や不適切さにより，重要な自己対象欲求が満たせない場合，自己は心理的生き残りを賭けて別の自己対象に向かう。その新たな自己対象が健康的な存在として，自己高揚感を適切な方法で鏡映する（鏡映自己対象），重要な理想化の形成を許

容する（理想化自己対象），さらには人間性をめぐる共通感覚に共鳴する（双子自己対象）ことによって，自己の自己対象欲求が満たされるならば，その新たな自己対象に方向転換して，自己の欠損を克服することができる(Siegel, 1996)。Kohut はこの新たな自己対象となる対象との間で展開する内在化を代償的構造と呼び，代償的構造の安定化も重要な治療方策であると主張した（Kohut, 1984）。また，自己心理学では，自己対象欲求の成熟だけではなく,代償的構造がつくられることも凝集的な自己の獲得に貢献すると主張している。従って，自己対象欲求の成熟が不十分な領域があったとしても，代償的構造によりその不十分さを補うことができれば，凝集的な自己を獲得し，日常生活に適応することができると考えられている。

学生相談を利用する学生は，来談前までは学生生活に適応していることが多いが，それは，自己対象欲求が適切に満たされた体験をもっているとともに，自己対象欲求が満たされない部分を代償的構造で補うことができていたからでもあると考えられる。学生相談は，学生が大学に在籍している間だけ利用できる相談機関であり，学生生活において学生が最優先すべきは，修学適応である。学生相談では，これらの制限を踏まえて学生を支援する必要があるため，自己が十分な凝集性を備えるまで支援することを現実的な目標とすることは妥当ではないと考えられる。そこで，学生相談では，学生の自己対象欲求の成熟を促進させるとともに，学生がすでに備えている代償的構造の安定を崩さないようにして，学生の自己の発達と安定を促すことが重要である。

第４項　学生相談における支援目標

自己心理学者の Goldberg（1980）によると，カウンセリングにおいて，クライエントにとって適切な治療法は技法よりも目標によって決定される。そして，治療目標は治療開始時の自己の状態によって決定されると主張している(Goldberg, 1980)。彼は，自己の病理性のレベルにより治療目標を変える必要性を強調し，病理性が比較的深刻でなく，自己の核心部分は崩れず部分的損傷が見られる「傷ついた自己」の場合は，基本的には最低限の凝集性は備えているため，自己の修復が目標となると主張した。

学生相談に来談する学生の場合，大学に進学してきたという点で，その程度にまでは自己の凝集性を備えていると考えられる。従って，彼らは Goldberg の言う，傷ついた自己をもつ者であると考えられる。そうしたことから,学生相談でのカウンセリングにおいて，学生の自己の修復を目標に設定することが妥当であると推察される。

一方,第１節で触れたように,学生相談は学生支援の一端を担う専門的支援機関である。そのため，学生支援の目標である，学生の修学適応促進にも貢献することが求められる。

以上のことから，学生相談におけるカウンセリングにおいては，修学適応を念頭に置いた自己の修復を支援目標とすることが肝要であると思われる。

第８節　アイデンティティのための恋愛と自己のための恋愛の違い

第３節で述べたように，青年の恋愛の多くは，アイデンティティのための恋愛であり，不変で連続している自我を他者にも同じように認められることを求める恋愛である。アイデンティティのための恋愛をする青年は,凝集的な自己をもち,自己が安定していること,

そして，自分自身と他者を独立した別々の個人として認識していることを前提とする。その上で，自我の普遍性や連続性に関する自分自身の認識と他者による認識との一致を恋愛に求めるのである。一方，凝集性のない自己をもつ青年にとっては，自己自体が誇大的で不安定であるため，自分自身の誇大性の保障を交際相手に求めるか，あるいは，恋愛対象を理想化して，自分自身をその一部と体験することを求める恋愛となりやすいと考えられる。凝集的な自己ではない青年は，自分自身と交際相手との心理的境界があいまいになり，自分自身と交際相手とが一体に感じやすく，そうした状態に固執する恋愛になりやすいと考えられる。

アイデンティティのための恋愛を享受する青年であれば，恋愛に悩みを抱えたときに，自分自身で解決するか，友人や先輩，あるいは養育者や年長の大人など，信頼できる他者に相談して解決を試みるのが一般的であると考えられる。アイデンティティのための恋愛問題であれば，そうした一般的な他者でも想像しやすく回答しやすい問題レベルに留まるため，あえて学生相談のような専門機関を利用するまでもないと考えられる。

しかし，自己のための恋愛をする青年が恋愛の悩みを抱えたときには，自分自身と交際相手との心理的未分化という未熟性を抱えていることから，問題が複雑で深刻化しやすくなること，また，現存する恋愛問題の背景に根源的な心理的課題を抱えている可能性も高いことから，単なる助言程度で解決することが困難であり，周囲の一般他者の力を借りても解決できない可能性が高い。そのような場合に学生相談などの専門機関を利用すると思われる。従って，学生が恋愛問題の解決を求めて学生相談を利用する場合，学生相談従事者は，単純な恋愛問題として捉えることなく対応することが求められると思われる。

そこで本研究では，一般的な青年の恋愛問題の様相と，学生相談を利用する学生の様相を比較検討した上で，恋愛問題を解決するために学生相談を利用した女子学生の事例から，彼女らの恋愛問題を解決するための効果的な関わり方とその意味について検討する。

前述したように，自己の障害をもつ青年は，自我機能の問題の段階まで進むことができず，自己の凝集性を求める恋愛をすることが予想される。そして，このような恋愛をする青年は，それまでの成長過程，特に幼少期において，太古的自己対象欲求が満たされないことによる不全感を共感してもらう体験が不十分であったために，自己対象欲求の発達が滞り，太古的自己対象欲求を抱えたままの状態にあると考えられる。このように，自己の障害があるために，自己の凝集性の獲得を求める恋愛を，本稿では「自己のための恋愛」と呼ぶことにする。

あらためて，自己心理学の観点から，「アイデンティティのための恋愛」と「自己のための恋愛」の違いを整理しておく。表２にも，この「アイデンティティのための恋愛」と「自己のための恋愛」との違いを示した。

「アイデンティティのための恋愛」は，凝集的な自己を獲得できている者が示す恋愛であり，交際相手を自分自身とは別個の存在として認識した上で，交際相手に対して太古的ではない自己対象機能を求める恋愛である。それに対し，「自己のための恋愛」は，自己の凝集性が不十分なため，交際相手を自分自身と別個の存在と認識できず，交際相手に対して太古的自己対象として機能することを求める恋愛である。

なお，「アイデンティティの恋愛」における失敗は，アイデンティティの拡散の危機につ

ながるおそれがある。それに対し「自己のための恋愛」における失敗は，自己の断片化の危機につながりやすいと考えられる。

これらのことから，「自己のための恋愛」は，「アイデンティティのための恋愛」よりも発達的に未熟な恋愛と捉えることができる。ただし，「自己のための恋愛」をする青年は，太古的自己対象欲求が満たされないことによる不全感を共感される体験を得られるならば，自己の凝集性を高めて，「アイデンティティのための恋愛」を享受できるようになると考えられる。

表２　アイデンティティのための恋愛と自己のための恋愛の特徴

	アイデンティティのための恋愛	自己のための恋愛
自己の状態	凝集性を獲得している	凝集性が低い
交際相手との関係性	交際相手を自分自身と別個の存在として認識できている	交際相手を自分自身と別個の存在として認識できていない
自己対象欲求の成熟度	成熟した自己対象欲求	太古的な自己対象欲求

第９節　ジェンダーと恋愛

恋愛が人格的成長に与える影響は，ジェンダーによって違いがあることが指摘されている。ジェンダーとは，社会的に求められる性役割のことを意味し，男性，女性だけにとどまらず，多様なジェンダーが存在する。それらのジェンダーの間に差があることが予想されるが，これまでは男性と女性の間の差があることが指摘されている。

それらの指摘に共通していることとして，男性に比べて女性は，関係性の発達と人格発達と連関していると論じている。男性は，ある程度アイデンティティを確立した後に関係性の発達に移るが，女性は，アイデンティティの発達と関係性の発達を並行して行い，関係の中にアイデンティティを見つける傾向があると指摘されている。たとえば杉村（2001）は，青年女子は青年男子と比較すると，関係性の発達が人格発達に影響すると指摘している。また大野（2010）も，男子学生は交際相手の女性に相談することなく就職先を決めてしまうのに対し，女子学生は，交際相手の進路に合わせて自分自身の進路を決める傾向があることから，女性はアイデンティティの主題よりも恋愛を優先させたり，同時並行させるケースが多いことを指摘している。そのような指摘に基づき，恋愛について考えると，青年女子のほうが青年男子よりも，恋愛問題によって何らかの心理的危機に陥る危険性が高いことが予測される。従って，恋愛問題の解決を学生相談で求める学生も男子学生よりも女子学生が多いことが推察される。

第１０節　恋愛に関する心理学的研究についての文献研究

第８節と第９節において，大学生の恋愛に関する論考を展開させた。そこで，次に，大学生の恋愛の特徴についてどのような実証的研究がされてきたかについて触れておきたい。

そのために，本節では，これまでに行われてきた大学生の恋愛に関する国内外の心理学的研究を概観することを目的に行った文献研究結果を紹介する。

髙坂（2016b）によれば，恋愛に関する実証的な心理学的研究は，欧米では 1970 年代頃から，日本では 1980 年代から始まっている。そこで，2018 年 5 月から 7 月に，大学生の恋愛に関する国内外の心理学研究の検索を行なった。国外の論文については，アメリカ心理学会が製作している心理学分野データベース PsycINFO で romantic relationship と university student の 2 つのキーワードにより検索して検出された，英語で執筆された査読付き論文を収集した。国内の論文については，高坂(2016a)を参考に，国立情報学研究所が運営する学術情報データベース CiNii で，(1)心理学系の学会誌に掲載された査読付き論文，(2)タイトルまたはキーワードに「恋愛」「性愛」「異性」「恋人」のいずれかと「大学生」または「青年」が含まれている論文という 2 つの基準を満たす論文を収集した。なお，ここでは，特定の他者との間での恋愛にまつわる研究に絞っており，例えば対人魅力に関する論文など，恋愛対象として意識される不特定多数の他者に対する態度に関する研究については含めていない。検索の結果，国外の研究は 45 本，国内の研究は 21 本が収集された。研究種別に見ると，調査研究が 65 本（国外 43 本，国内 21 本），事例研究と文献研究がそれぞれ，国外 1 本のみであった。

一方，Levinger, G.（1980）は，対人関係の関与度の変容過程に関するモデルとして，ABCDE モデルを提唱している。ABCDE モデルでは，対人関係は，A（Acquaintance；知己になる段階），B（Building；関係構築の段階），C（Continuation；持続の段階），D（Deterioration；崩壊の段階），E（Ending；終焉の段階）の段階をたどるとする。そこで，ABCDE モデルに従い，恋愛関係段階に応じて，恋愛関係成立前，恋愛関係成立時，恋愛関係継続時，恋愛関係崩壊時，恋愛関係崩壊後の 5 つに分類し，それぞれの時期にどのような研究が存在するかについて次項より概観する（表 3）。

第 1 項　恋愛関係進展度別の論文数

国外では，恋愛関係成立前の論文がなく，恋愛関係継続時に偏っており，40 本（88.9%）となっていた。国内でも，恋愛関係継続時の研究が最も多く，15 本（71.4%）であった。しかし，恋愛関係成立前に関する研究は 3 本存在し，全体の 14.2%となっていた。また，国外，国内ともに，恋愛関係成立時の研究は存在しなかった。

国外の論文は国内の論文の約 2 倍存在しており，圧倒的に国外の論文が多かった。関係進展度別に見ると，国外，国内ともに最も論文数が多かったのは，恋愛関係継続時であったが，国外では全体の約 9 割がその時期の論文であるのに対し，国内では約 7 割に留まり，国外では皆無であった恋愛関係成立前の研究が約 1 割存在していた。

これらの結果から，国外の恋愛に関する心理学的研究は国内に比べると積極的に行なわれているように見えるが，それは，恋愛を研究テーマとして重要と捉えている現れであること，また，国内の青年は，国外の青年に比べて，恋愛関係を形成する段階以前に達成すべき発達課題の解決が必要であるということも影響していると考えられた。

表３　恋愛関係進展度別の論文数

関係進展度	研究テーマ	国外	国内
恋愛関係成立前	恋愛の特徴	0	1
	アタッチメント	0	0
	恋愛と精神的問題	0	0
	デートＤＶ	0	0
	ネット関連	0	0
	発達障害	0	0
	アイデンティティ	0	2
恋愛関係成立時		0	0
恋愛関係継続時	恋愛の特徴	9	9
	アタッチメント	8	0
	恋愛と精神的問題	8	3
	デートＤＶ	8	1
	ネット関連	3	0
	発達障害	3	0
	アイデンティティ	1	2
恋愛関係崩壊時	恋愛の特徴	2	1
恋愛関係崩壊後	恋愛と精神的問題	2	1
	アイデンティティ	0	1
恋愛全体	恋愛の特徴	1	0
合計		45	21

第２項　各恋愛関係進展度における研究テーマの特徴

論文の中で取り上げられていた恋愛に関連する心理学的要因名に基づき，テーマによる分類を試みたところ，すべての論文を次の６つに分類することができた。恋愛にみられる様々な特徴を解明している研究群を「恋愛の特徴」，アタッチメントとの関連を検討している研究群を「アタッチメント」，恋愛関係と精神的問題との関連を検討している研究群を「恋愛と精神的問題」，恋人間の暴力であるデート DV の特徴や原因の解明を行なっている研究群を「デート DV」，恋愛関係におけるインターネット活用状況を解明している研究群を「ネット関連」，恋愛関係とアイデンティティの状態との関連を解明している研究群を「アイデンティティ」とした。

国外の文献では，恋愛関係継続時の「恋愛の特徴」に関する文献が最も多く，９本であった（20.0%）。次いで多かったのが，恋愛関係継続時の「アタッチメント」，「恋愛と精神的問題」及び「デート DV」である（いずれも８本，17.8%）。一方，国内の文献では，国外と同様に，恋愛関係継続時の「恋愛の特徴」に関する文献が最も多く，９本であった

（42.8%）。次いで多かったのが，恋愛関係継続時の「恋愛と精神的問題」で３本であった（14.3%）。

研究テーマごとに見ると，国外も国内も最も多かったのが，恋愛関係継続時の恋愛の特徴を解明する研究であったが，国外では，「恋愛と精神的問題」の関連や，「デート DV」など，恋愛関係の関係性を多面的に扱う傾向が見られたのに対し，国内では，恋愛の特徴解明が約４割を占め，残りは他の関係進展度に分散しており，研究テーマの多様性はあまり見られなかった。

国内に比べると，国外における研究の蓄積が多いので，恋愛関係の関係性を多面的に扱っている傾向が見られると考えられる。また，国内における研究で恋愛関係成立前の研究が多かったのは，そもそも恋愛という概念が輸入されたものであるため（井ノ崎，2019），恋愛が生活の一部になりにくい文化であることによる影響もあると考えられる。

第３項　事例研究における恋愛問題

第１項で示したように，国内における大学生の恋愛問題を扱う事例研究は見つけられなかった。しかし，恋愛が青年にとって重要な関心テーマであることを考えると，別の主訴の解決を目指すカウンセリングにおいて，恋愛問題解決支援も行われていると予想される。そこで，カウンセリングの中で主要な問題としてではないが，青年期の恋愛問題も扱っている事例研究の有無を確認するために，「心理臨床学研究」「学生相談研究」及び「精神分析研究」の 2000 年から 2017 年刊行分に掲載されている事例研究において，面接の中でセラピスト（以下，Th とする）がクライエント（以下，Cl とする）の恋愛問題を支援している場面の記載がある事例研究論文を収集した。収集の結果，「心理臨床学研究」から 20 本，「学生相談研究」から 11 本，「精神分析研究」から８本が収集された。なお，恋愛問題を扱っているとする条件として，①Cl は青年期にあたる，10 代後半から 20 代までとする，②面接の中で Cl が自らの恋愛の悩みに関する発言をするだけでなく，Th が Cl の語った恋愛での悩みに対して解決のために何らかの支援を行っている記載があること，とした。

また，本研究においても，先の研究と同様に，特定の他者との間での恋愛にまつわる研究に絞り，論文を収集した。

収集した論文それぞれについて，Th と Cl のジェンダー，Cl のジェンダー以外の属性（年齢と職業），Cl の主訴，親子関係に見られる特徴，及び Th による介入の記載がある恋愛問題，それに対する Th の介入の様子と Cl の反応，その後の Cl の恋愛の展開について整理した。

（１）Th と Cl のジェンダーの組み合わせ別の論文数

Th と Cl のジェンダーの組み合わせを，男性 - 男性，男性 - 女性，女性 - 男性，及び女性 - 女性の４つに分類してそれぞれの論文数を調べた。その結果，順に３本，９本，６本，21 本となり，圧倒的に女性 Th と女性 Cl の組み合わせの事例研究が多いことがわかった。

（２）恋愛関係進展度別の論文数

第１項と同じように，恋愛関係進展度別の論文数を調べた（表４）。その結果，「恋愛関

係成立前」が 11 本,「恋愛関係成立時」が 1 本,「恋愛関係継続時」が 17 本,「恋愛関係崩壊時」が 4 本,「恋愛関係崩壊後」が 5 本，そして「恋愛全体」が 1 本となった。なお，本研究における恋愛問題の中には，Cl が Th に恋愛感情を抱くという転移性恋愛も含んでいるが，それらを「恋愛関係成立前」に分類した。

先ほど示した Th と Cl のジェンダーの組み合わせ別の論文数とかけあわせた結果，最も論文数が多かったのは，女性 Th と女性 Cl との組み合わせにおいて，「恋愛関係継続時」の問題を扱っている研究であり，12 本（30.8%）となった。

表 4　関係進展度別の事例研究論文数

関係進展度	ThとClの組み合わせ	論文数
恋愛関係成立前	男性－男性	2
	男性－女性	3
	女性－男性	2
	女性－女性	4
計		11
恋愛関係成立時	男性－男性	0
	男性－女性	1
	女性－男性	0
	女性－女性	0
計		1
恋愛関係継続時	男性－男性	1
	男性－女性	3
	女性－男性	1
	女性－女性	12
計		17
恋愛関係崩壊時	男性－男性	0
	男性－女性	1
	女性－男性	3
	女性－女性	0
計		4
恋愛関係崩壊後	男性－男性	0
	男性－女性	1
	女性－男性	0
	女性－女性	4
計		5
恋愛全体	男性－男性	0
	男性－女性	0
	女性－男性	0
	女性－女性	1
計		1
合計		39

（３）母子関係のタイプ別論文数

第５節にて，主な養育者は自己対象として機能することが求められる代表的な対象の 1 つであることに触れた。乳幼児期に，主な養育者（多くは母親）との間で形成する心の絆はアタッチメントと呼ばれ，その後の対人関係を形成される認知的枠組みとして子どもの心の中に組み込まれる（内田，2018)。従って，対人関係の１つである恋愛関係の持ち方にも，幼少期から続く本人の養育者，特に母親との関係性が影響することが予想される。そこで，本研究で収集された事例研究において，それぞれの Cl が母親とどのような関係を体験しているかについて調べた。

事例の中での記述をもとに，母親の養育態度を次の４つに分類した。母親が情緒的応答に消極的な場合を「ネグレクト」（例えば，笠井，2002)，母親が積極的な心理的虐待を与えて積極的に不適切な情緒的応答をしており，Cl が母親によって支配されていると感じている場合を「支配的」（例えば，布柴，2012)，それら２つが合わさったものを「混合型」（山下，2011)，そして母子関係が不明なものを「不明」（例えば，和合，2011）とした。これら４つの分類それぞれの論文数を集計した結果，「ネグレクト」が 20 本，「支配的」が 12 本，「混合型」が１本，「不明」が５本となり，ほとんどの事例（33 本，84.6%）が，母親による適切な情緒的応答を十分に得られていない可能性の高い事例であると推察された。

なお，１本のみであるが，母子関係の情緒的応答の問題が見られない事例も存在していた。

（４）恋愛問題への介入と展開

恋愛問題に対して，共感的姿勢による傾聴を繰り返す方法（例えば，山中，2014）や，傾聴をした上で解釈を与える方法（例えば，青木，2004)，や助言を与える方法（例えば，水谷，2007）などの介入がされていたが，全事例研究のうち，記載がないため恋愛の展開が不明な 9 本以外では，不適切な恋愛関係を終了させる（例えば，羽間，2002)，恋愛関係を順調に展開させる（太田，2009）など，すべて Cl が適切な恋愛関係を構築するといった効果が見られていた。

以上のことから，恋愛問題以外の主訴で来談した学生が，相談の中で恋愛問題を相談する事例の研究が数多く存在し，また，恋愛問題の背景として，主な養育者である母親との関係不全体験があることが多いことがわかった。これらの結果から，恋愛の阻害要因として，Kohut が言う，養育者との間における自己対象体験の不全があることが示唆された。

また，カウンセラーが，共感的応答とそれに伴う助言といった介入をしている事例が多いことも明らかになった。共感的応答は，適切な自己対象関係構築に不可欠な反応である。従って，カウンセラーが恋愛問題を抱える学生に対して共感的応答をすることによって，学生は，適切な自己対象体験を得ることができ，その結果，恋愛問題を解決できていると推察される。

第４項　アイデンティティと恋愛との関連に関する研究

第９節で，さまざまな研究者がアイデンティティの発達と恋愛の発達の関連性を指摘していることを挙げた。そこで，ここまでに紹介した国内外の研究のうち，アイデンティテ

ィと恋愛との関連を検討した研究を検索したところ，国外では 1 本，国内では 5 本存在していた。

国外では，Lascano, D. I. V. ら（2014）が，大学生 198 名に対し，縦断的な調査を実施した結果,アイデンティティの発達が親密性に肯定的な影響を及ぼすことを見出している。国内では，髙坂（2010）が，交際相手をもつ大学生 212 名を対象に，恋愛関係の影響項目と同一性地位判別尺度を用いて調査を実施した結果，アイデンティティの地位と恋愛関係の質との関連を検討し，モラトリアム段階にあるものが，達成段階や早期完了段階にある者よりも恋愛関係の質が低いことを見出している。また，髙坂（2011）は，大学生 1350 名を対象に，恋愛状況に関する質問項目と多次元自我同一性尺度を用いて調査を実施した結果，現在交際相手のいる者が，現在交際相手のいない者に比べてアイデンティティが発達していることを見出した。さらに，髙坂（2013a）は，恋人を欲しいと思わない者のうち，恋愛を拒否したり,自信のない者ほど自我の発達が未熟であることを見出している。また，髙坂（2013b）は，交際相手をもつ大学生 126 名を対象に，恋愛関係の影響項目と多次元自我同一性尺度を用いて調査を実施した結果，アイデンティティの確立の程度が恋愛関係に影響を与えないことを見出した。さらに，髙坂（2014）は，交際相手をもつ大学生 485 名を対象に，恋愛状況に関する質問項目と多次元自我同一性尺度を用いて縦断的な調査を実施した結果，恋愛関係崩壊後でもアイデンティティの安定性が維持されていることを見出している。

以上，多くはないが，国内外の研究において，恋愛の発達とアイデンティティの発達との間に関連があることが実証されている。

なお，今回の検索においては，恋愛と自己との関連を検討した研究は存在しなかった。従って，恋愛の発達と自己の発達の間で関連があるのかを実証的に検討することが望まれる。

第１１節　学生相談における恋愛相談の支援目標

第 7 節で説明したように，学生相談を利用する学生の自己は「傷ついた自己」のレベルにあることが多いと推察される。さらに恋愛問題を抱える学生の場合，恋愛の発達においても阻害されているため,「自己のための恋愛」レベルに留まっていることが予想される。そこで，恋愛問題の解決を求めて来談した学生に対して，カウンセラーは，学生相談の目標である，修学適応を念頭に置いた自己の発達再開による自己の修復と，恋愛の発達を促すことが求められる。この自己の修復と恋愛の発達が，彼らの精神的健康と学生生活への適応に繋がると考えられるためである。

第１２節　本研究の目的

本研究では，一般的な大学生の恋愛の発達と自己の発達との関連を自己心理学的観点から検討することを第 1 の目的とした。そして，学生相談における恋愛相談の実態について明らかにすることを第 2 の目的とした。また，第 9 節で述べたように，女子学生のほうが男子学生よりも,関係性の発達と自己の発達との関連性が高いことから,本博士論文では，女子学生の恋愛問題の特徴を明らかにするとととともに，恋愛問題を解決するための効果的

な関わり方とその意義について検討することを第３の目的とした。

まず第１の目的である大学生の恋愛の発達と自己の発達との関連を検討するために，第２章第１節において,大学生を対象とした調査研究結果を示す。そして第２の目的である，学生相談での恋愛相談への支援の実態の把握のために，第２章第２節において，大学の学生相談機関で相談業務に従事する者を対象とした学生相談における恋愛相談の実態について把握するための調査研究結果を示す。さらに，第３の目的である，学生相談における女子学生の恋愛問題解決の効果的な関わり方とその意義について検討するために，第３章から第５章にかけて異なる恋愛進展度での恋愛問題を抱える３つの女子学生の事例を取り上げて，女子学生の恋愛問題の解決に求められる，学生相談カウンセラーの対応のあり方について検討する。これらの事例研究において，恋愛の発達レベルを見立てるとともに，自己の状態に合わせて学生相談のカウンセラーがどのように支援をするべきかについて検討する。そして，終章においては本研究の総合的考察を行う。

第２章　女子学生の恋愛の特徴と学生相談における恋愛相談の実態

第１節　大学生における恋愛の発達と自己の発達との関連に関する研究

第１項　問題と目的

本研究の目的は，大学生における恋愛の発達と自己の発達との関連を調査することである。

（1）大学生の恋愛

青年期にある大学生にとって恋愛は重要な関心事の１つであり（相羽，2011），恋愛に関心をもつ場合,恋愛における成否は青年の充実感や精神的安定を左右しうると推察される。西平（1981）は，世間では恋愛の危機を乗り越えるための技巧の習得を勧める言及が多く見られるが,恋愛の危機において一時的で表面的な技巧で乗り越えようとするのではなく，自分自身にとって誠実な動き方を問うことが重要であると主張している。そして,恋愛は，恋の側面と愛の側面の両方から成る両義性を特徴として，全人格的結合の要求に根ざすすべての感情と行動を指し,人は恋愛を通してアイデンティティを確立すると主張している。恋愛を哲学的に論考している精神分析家 Fromm も，恋愛の技術は，人格的成熟が求められる全人格的技術であると指摘している（Fromm, 1956）。

大野（1999）によると，青年の恋愛は，基本的に「アイデンティティのための恋愛」であるが，人格的発達が進み，青年期のアイデンティティの主題を解決すると,「愛」に変化する。「アイデンティティのための恋愛」とは，親密性が成熟していない状態で，かつアイデンティティの統合過程において，アイデンティティを他者からの評価によって定義づける，または補強しようとする恋愛的行動を意味する（大野，2010）。そして，第１章で触れたように,「アイデンティティのための恋愛」の特徴として，①相手からの賛美，賞賛を求める，②相手からの評価を気にする，③相手の挙動に目が離せなくなる，④交際してしばらくすると，呑み込まれる不安を感じる，⑤交際が長続きしない，の５つを挙げている。

その一方，大野（2010）は,「愛」を人の幸福に関心をもち，相手を幸せにしようとする気持ちと定義し，愛の本質的特徴として，相手に条件を求めないという「無条件性」と相手の喜びを自分のことのように嬉しく感じるという「相互性」を挙げている。

また，髙坂（2011）は，西平（1981）の恋愛論に基づき,「恋愛様相モデル」を構築している。「恋愛様相モデル」では，恋の特徴として，相対性，所有性，埋没性という３つの特徴を設定し，愛の特徴として，絶対性，開放性，飛躍性という３つの特徴を設定している。そして，これらの恋と愛の特徴が，相対性と絶対性，所有性と開放性，埋没性と飛躍性という対を構成し，現在の恋愛関係は，この３つの次元上を動くパラメーターを結んだ三角形で表されるとしている（髙坂，2016b）。

１つめの次元の極の１つである「相対性」とは，交際相手を他の恋愛対象者と比較したり，自分の条件や理想に合っているかで評価する傾向を指す。その対極にある「絶対性」とは，他者との比較を超えて，交際相手の欠点や短所も含めて，交際相手の存在そのものを受容し，認めることを意味する。２つ目の次元の１つ目の極である「所有性」とは，交際相手を物理的・時間的・心理的に占有し，交際相手の心理的エネルギーを自分に向けた

ままにさせようとする傾向を意味する。その対極にある「開放性」とは，相手の幸せや成長のために，自分の精神的エネルギーを与えることを指す。３つ目の次元の１つ目の極である「埋没性」とは，生活や意識の中心が交際相手や交際相手との関係になり，交際相手や交際相手との関係以外の事柄に対する関心や意欲が低下する傾向を指す。その対極の「飛躍性」とは，交際相手や交際相手との関係を基盤として，それら以外の事柄により一層興味や関心が増し，挑戦や努力をすることを指す。髙坂・小塩（2015）は，恋愛様相とアイデンティティとの関連を検討し，自我発達が進んでいるほど，恋よりも愛の要素が強い恋愛関係を示すことを確認した。

以上のように，様々な研究者が，恋愛の発達と人格的成長との関連を指摘しているが，その際，人格的成長の指標として，アイデンティティを挙げている。第１章で触れたように，Erikson（1959）は，アイデンティティの形成は，自我の機能の一部であると述べている。自我とは，個人が経験を組織づけ合理的な計画を立てる中枢である（Erikson, 1959）。これに対し，自己心理学を創始した Kohut は，自我が機能するためには，自己がまとまっている必要があることを指摘した。（Kohut, 1977）。自己は，自我のような心の機能ではなく，その内部にある構造であり（Kohut, 1977; Siegel, 1996），自己が安定することによって，自我の機能性が高まると指摘した。Kohut は自己の発達こそが人格的成長の指標であると考えている（Kohut, 1977，1984）。

（２）自己心理学における自己の発達

自己心理学とは，Kohut（1977）が提唱した精神分析学的理論の１つである。自己心理学では，人間の心の健康にとって重要なものは自己感の安定性であると考える（Kohut, 1977）。自己感とは，自分自身が唯一無二の尊い存在であるという実感を指す。自己心理学では，この自己感の安定性は，自己対象という，自己を喚起して維持する心の拠り所機能が十分に働くことで得られると考えられている。そしてこの体験は自己対象体験と呼ばれる。自己心理学では，自己対象は一生必要な機能であると考えられている。

自己対象として機能する代表的な対象は，親密な関係にある他者である。幼少期であれば主となる養育者であり，発達するにつれ対象の範囲は拡大し，青年期に入ると，友人や交際相手も自己対象として機能することが期待されるようになる。対象が拡大しても，主な養育者が自己対象として機能することを求める気持ちは一生続く。

この自己対象として求める機能は，自己の発達とともに変化すると考えられている。幼少期における自己は，自己対象として機能する対象から完全に満たされることを求める。しかし自己が発達すると，自己対象として機能する対象から完全に満たされることを求めなくなる。最終的には，自己対象として機能する対象がほどほどに支えてくれるレベルで機能することに落ち着くとされる。

自己の発達を促すのは，その時々の自己対象に求める欲求が満たされること，つまり適切な自己対象体験を得ることが重要である。従って，主な養育者との間で適切な自己対象体験を得ることが，自己の発達と安定化にもつながる。

（3）自己と恋愛

自己心理学によれば，自己が発達し安定するほど，他者との間での自己対象関係も成熟する。恋愛関係は，交際相手との自己対象関係と言える。従って，自己が発達し安定すれば，恋愛関係も成熟することが予想される。

加えて，養育者との間で適切な自己対象体験を獲得すると，自己が発達して安定し，それによって恋愛関係を発達させると考えられる。また，交際相手との間で適切な自己対象体験を得ることができれば，自己が発達し，安定すると考えられる。

しかし，前述のとおり，恋愛の発達と自我発達との関連に関する研究はいくつか存在するが，自己の発達との関連について論じたものは筆者が知る限り存在しない。

（4）ジェンダーによる違い

第１章第９節において紹介したように，杉村（2001）は，青年女子は青年男子と比較すると，関係性の発達が人格発達に影響すると指摘している。大野（2010）も，男子学生は交際相手の女性に相談することなく就職先を決めてしまうのに対し，女子学生は，交際相手の進路に合わせて自分自身の進路を決める傾向があることから，女性はアイデンティティの主題よりも恋愛を優先させたり，同時並行させるケースが多いことを指摘している。これらのことから，自己の発達と恋愛の発達との関連は，男性よりも女性のほうが強いことが予想される。

（5）本研究の目的

そこで，本研究では，大学生の恋愛の発達と自己の発達との関連を検討することを目的とした。

主な養育者との間で適切な自己対象体験を経験している者ほど自己が発達して安定しているのではないか，そして，自己が発達し安定することによって，恋愛が発達しやすいのではないか，反対に恋愛の発達が自己の安定化を促進するのではないか，さらに，男性に比べて女性のほうが自己の発達と恋愛の発達との関連が強いのではないかといった４点の仮説を設定して検討した。

第２項　方法

（1）研究対象者

東海・近畿・中国地方の大学に在籍する大学生 352 名（19 歳から 24 歳）を対象とした。

回答に不備のなかった 300 名（85.2%）を最終的な分析対象とした。平均年齢は 19.29 歳，標準偏差は 1.08 であった。

（2）実施時期と実施方法

2019 年４月から５月にかけて，授業の一部の時間を使用して実施した。授業時間の一部の時間を確保するか，研究室に訪問した上で，集団で調査を実施した。質問紙の表紙に，回答は自由意思によって回答を選択できること，回答しなくても全く不利益を被らないこと，また，結果を個人が特定されない形で公表することを記し，回答をもって同意を得た

ものとした。

（３）質問紙の内容（資料２）

①個人属性

年齢，学年，及び性別についての回答を求めた。

②心理尺度

１）自己構造の安定性尺度

自己の発達と安定の程度を測定するために,「自己構造の安定性に関する質問紙」を用いた。この尺度は原田（2005）が自己心理学理論に基づいて開発した，33 項目からなる尺度であり，信頼性と妥当性が高いことが確認されている。「対象への依存」「自己拡散感」「自己誇大感」「対象からの孤立」の４因子からなる。「対象への依存」とは，自己構造の不安定さによる太古的な自己対象体験の希求を意味する。質問項目には,「傷ついたときには人恋しくなる」,「本当の自分を誰かに知っておいてもらわないと落ち着かない」などがある。「自己拡散感」とは，自己の凝集性が失われていることにより感じる，自己の拡散状態を指す。質問項目には,「自分のことよりも他人のことが気になる」,「自分がどう感じているかよくわからないときがある」などがある。「自己誇大感」とは，誇大自己が鏡映されず太古的なまま残存しており，鏡映されないことへの自己愛憤怒的側面を含むことによって生じる感覚を指す。質問項目には,「ちょっとでも馬鹿にされた気がすると決して我慢できない」,「世の中にはくだらない人が多すぎる」などがある。「対象からの孤立」は，自己対象関係が現実の対人場面において構成されず，自己の活力が枯渇した状態を指す。質問項目には,「私の周りには極めて特別な人物が多い（逆転項目)」,「私の周りにいる人は常に私の欲求を満たしてくれる（逆転項目)」，などがある。それぞれの項目について「全く当てはまらない」から「たいへん当てはまる」までの７件法で回答を求めた。

２）恋愛様相尺度

恋愛の発達の程度を測定するために,「恋愛様相尺度」を用いた。この尺度は髙坂・小塩（2015）が開発した 14 項目からなる尺度であり，信頼性と妥当性が高いことが確認されている。各項目は恋の特徴と愛の特徴を対によって作られている。「相対性 - 絶対性」,「所有性 - 開放性」，及び「埋没性 - 飛躍性」の３次元の下位尺度の構成とした。

「相対性-絶対性」の質問項目には,「恋人と他の異性／同性（恋愛対象）を比較すると，他の異性／同性（恋愛対象）の方が良く見え，がっかりすることがある（相対性）－恋人の良いところは，他の異性／同性（恋愛対象）と比較するまでもなく，十分にわかっている（絶対性)」などがある。

「所有性-開放性」の質問項目には,「恋人には，何をしているときでも，私のことを気にかけてくれるよう求めている（所有性）－恋人が，私に気兼ねなく，やるべきことに専念できるように支えている（開放性)」などがある。

「埋没性-飛躍性」の質問項目には,「恋人と過ごす時間を減らしたくないので，新しいことには取り組まないようにしている（埋没性）－恋人との関係を拠り所として，新しい

ことにも積極的に取り組もうとしている（飛躍性）」などがある。

それぞれの次元において，「絶対性」「開放性」及び「飛躍性」に近づくほど，恋愛が発達していると考える。例えば，「恋人と過ごす時間を減らしたくないので，新しいことには取り組まないようにしている（埋没性）－恋人との関係を拠り所として，新しいことにも積極的に取り組もうとしている（飛躍性）」などが質問項目である。それぞれの項目について「どちらかといえば」から「かなり」までの３件法の対で回答を求めた。

３）養育者からの被受容感尺度

養育者から受容されていると感じている程度を測定するために，杉山・坂本（2006）により作成され，信頼性と妥当性が高いことを確認された被受容感尺度を，対象者として主な養育者に絞った形に改訂して使用した。「私は受け容れられている」，「私は信頼されている」などの８項目からなり，それぞれの項目について「全く当てはまらない」から「よく当てはまる」までの５件法で回答を求めた。なお，主な養育者の選択肢として，母親，父親，祖母，祖父，その他の５つを設定した。

上記に示したように尺度を改訂したことから，2019 年１月に大学院生 63 名を対象に予備調査を行った。その結果，信頼性の高い尺度であることが確認された（α＝.89）。

４）恋愛の悩みと相談に関する質問項目

大学生が恋愛についてどのような悩みをもつか，また，悩みをもった時にどのような相談を求めるのかを把握するために，恋愛の悩みと相談に関する質問項目を設定した。

ⅰ）恋愛の悩みの有無と内容

恋愛の悩みの有無についての回答を求めたのち，悩みをもつ者を対象に，悩みの種類についての回答を求めた。インターネットサイトの掲示板に書き込まれている恋愛相談を参考にして，「恋愛対象への恐怖」，「恋愛成就困難」，「恋愛継続困難」，「その他」の４つの選択肢を恋愛の悩みとして設定した。これらの選択肢に複数回答可で選択することを求めた。

ⅱ）恋愛相談経験の有無，相談相手，及び要望

恋愛の悩みをもつ者を対象に，相談経験の有無を確認し，相談経験があると回答した者を対象に，相談相手として，「同性の友人」，「異性の友人」，「家族」，「先輩・後輩」，「先生」，「専門家（カウンセラーや医師など）」，「その他」の選択肢から複数回答可で回答を求めた。さらに，相談する際の要望として想定される７つの選択項目（「気持ちを受けとめて，理解してほしい」，「アドバイスがほしい」，「解決のために一緒に行動してほしい」，「つらさを慰めてほしい」，「経験談を聞かせてほしい」，「専門的な立場からの意見を聞きたい」，「その他」）を設定し，複数回答可で回答を求めた。

第３項　結果

（１）回答者のジェンダー

有効回答者のうち，男性は 96 名，女性は 203 名，その他は１名であった。

（２）尺度構成

既存尺度に関して，先行研究に従い得点化した。各尺度得点の平均と標準偏差は表５のとおりである。

「自己構造の安定性に関する質問紙」においては，原田(2005)に基づき，「対象への依存」「自己拡散感」「自己誇大感」「対象からの孤立」の４つの下位尺度の構成とした。

各下位尺度の信頼性を信頼性係数によって確認したところ，「対象への依存」，「自己拡散感」及び「自己誇大感」の信頼性が高いことが確認できたが（「対象への依存」：α＝.84，「自己拡散感」：α＝.83，「自己誇大感」：α＝.73），「対象からの孤立」の信頼性がそれほど高くなかった（「対象からの孤立：α＝.66）。そのため，以後，「対象からの孤立」に関しての考察は慎重に行なうこととした。

「恋愛様相尺度」においては，高坂（2015）に基づき，「相対性 - 絶対性」，「所有性 - 開放性」，及び「埋没性 - 飛躍性」の３次元の下位尺度の構成とした。

各下位尺度全体の信頼性を信頼性係数によって確認したところ，「相対性 - 絶対性」と「所有性 - 開放性」の信頼性が高いことが確認されたが（「相対性 - 絶対性」：α=.80，「所有性 - 開放性」：α＝.77），「埋没性 - 飛躍性」の信頼性はそれほど高くないことが確認された（「埋没性 - 飛躍性」：α＝.62）。そのため，「埋没性 - 飛躍性」に関する考察は慎重に行なうこととした。

表５　各尺度の平均と標準偏差

		男性	女性	*t*値
被受容感		32.52 (6.66)	34.34 (6.22)	−2.32*
自己構造	対象依存	44.01 (12.39)	48.32 (9.54)	−3.30***
	自己拡散	50.48 (12.92)	49.93 (10.18)	
	自己誇大	20.04 (6.23)	19.25 (5.13)	
	対象孤立	16.77 (4.56)	15.73 (3.39)	2.06*
恋愛様相	相対性−絶対性	22.54 (4.44)	20.44 (5.36)	2.68**
	所有性−開放性	22.11 (4.57)	21.32 (4.58)	
	埋没性−飛躍性	17.67 (3.38)	17.73 (3.40)	

上段：平均値　下段：標準偏差　　*p<.05，**p<.01，***p<.001

（３）被受容感，自己構造，及び恋愛様相のジェンダー差

被受容感，自己構造，及び恋愛様相のジェンダー差を確認するために，男性と女性の間で *t* 検定を実施した（表５）。被受容感と自己構造の「対象への依存」では，女性のほうが男性よりも高いことが確認できた（$t(297)=-2.32$, $p<.05$;　$t(297)=-3.30$, $p<.001$）。また，

自己構造の「対象からの孤立」と恋愛様相の「相対性-絶対性」では，男性のほうが女性よりも高いことが確認できた（$t(297)=2.06$, $p<.05$; $t(201)=2.68$, $p<.01$）。

（４）被受容感，自己構造の安定性，及び恋愛様相間の関連

有効回答者 300 名のうち，恋愛経験をもつ 203 名（男子 61 名，女子 142 名，全体の 67.7%）を対象に，男女別で，被受容感，自己構造の安定性，及び恋愛様相間の関連を調べるために，相関係数を算出した。結果は表６のとおりである。

被受容感と自己構造との間では，男女とも，「自己拡散感」，「対象からの孤立」との間で負の相関が見られた（自己拡散感：$r=-.36$, $p<.01$；対象からの孤立：$r=-.43$, $p<.01$）。

恋愛様相の中の「相対性 - 絶対性」と自己構造との間では，男性において，「対象からの孤立」との間でのみで有意な負の相関が見られた（$r=-.31$, $p<.05$）。一方，女性においては，「対象への依存」と「自己誇大感」との間で有意な負の相関が見られ，ジェンダー差が見られた（対象への依存：$r=-.25$, $p<.01$；自己誇大感：$r=-.20$, $p<.05$）。

また，「所有性 - 開放性」と自己構造との間では，男性において，「自己誇大感」と「対象からの孤立」の間で有意な負の相関が見られた（自己誇大感：$r=-.31$, $p<.05$；対象からの孤立：$r=-.31$, $p<.05$）。一方，女性においては，「対象への依存」と「自己誇大感」で有意な負の相関が見られ，こちらもジェンダー差が見られた（対象への依存：$r=-.30$, $p<.01$；自己誇大感：$r=-.20$, $p<.05$）。

さらに「埋没性 - 飛躍性」と自己構造との間では，男性において，「自己拡散感」と「対象からの孤立」で有意な負の相関が見られた（自己拡散感：$r=-.25$, $p<.05$；対象からの孤立：$r=-.41$, $p<.01$）。一方，女性においては，「自己拡散感」以外で有意な負の相関が見られ，こちらもジェンダー差が見られた（対象からの依存：$r=-.17$, $p<.05$；自己誇大感：$r=-.25$, $p<.01$；対象からの孤立：$r=-.26$, $p<.05$）。

従って，被受容感や恋愛様相と自己構造の安定性との関連においては，ジェンダー差が見られることがわかった。

表６　被受容感，恋愛様相と自己構造との相関

	対象依存		自己拡散		自己誇大		対象孤立	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
被受容感	-.09	-.08	-.36**	-.27**	-.13	-.09	-.43**	-.17*
恋愛様相 相対性-絶対性	-.03	-.25**	-.01	-.13	0	-.20*	-.33**	-.06
所有性-開放性	-.22	-.30**	-.21	-.14	-.31*	-.20*	-.31*	-.08
埋没性-飛躍性	-.03	-.17*	-.25*	-.14	-.14	-.25**	-.41**	-.26*

*$p<.05$, **$p<.01$

（５）被受容感，自己構造の安定性，及び恋愛様相の間の影響関係

恋愛経験をもつ者を対象に，被受容感を説明変数とし，自己構造の安定性や恋愛様相を目的変数とした共分散構造分析によるパス解析を通じて，被受容感から自己構造への影響関係と，自己構造と恋愛様相との間の影響関係を検討するためのパスを用いたモデルを検

討した。共分散構造分析では，研究者が想定した構成概念を用いて自由にモデルを作ることができる（志堂寺，2008）。本研究では図２に示したモデルを作成した。モデルの適合度を調べた結果，$\chi^2(2)=34$，$p<.35$，GFI＝.997，AGFI＝.953，RMSEA=.018 であり，適合度が高いことが確認された。

先に検討した各尺度得点間の相関関係においてジェンダー差が見られたことから，このモデルをジェンダー別に当てはめた。男性でのモデルが図３，女性でのモデルが図４となる。それぞれ，有意なパス係数のみ表示している。

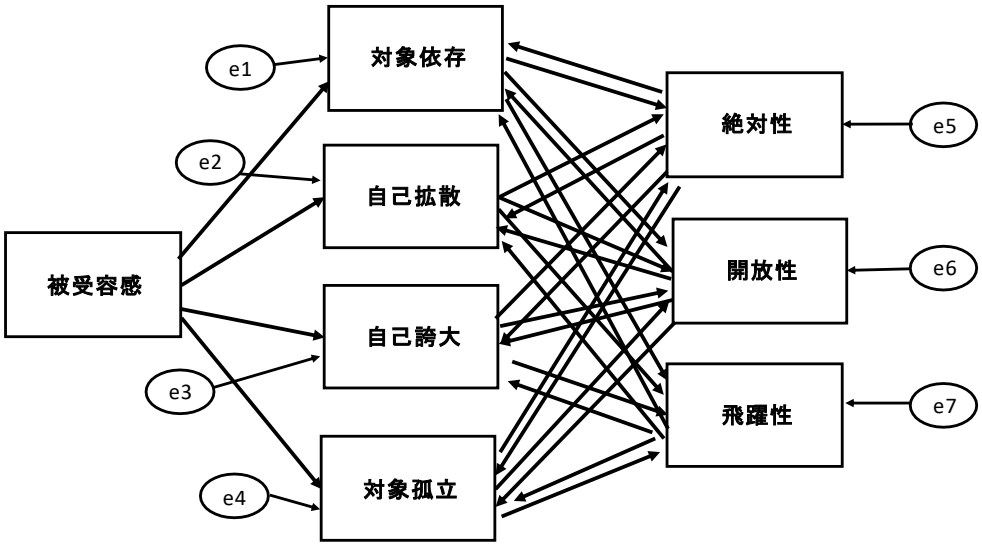


図２　被受容感，自己構造，及び恋愛様相のパスダイアグラム

①男性における影響関係

男性においては，被受容感から「対象からの孤立」への負のパスが見られるのみであった。つまり，男性においては，主な養育者から受容されていないと感じるほど，現存する他者との間で自己対象関係を構築しにくいことが示唆された。また，恋愛の発達と自己の発達には関連が見られなかった。

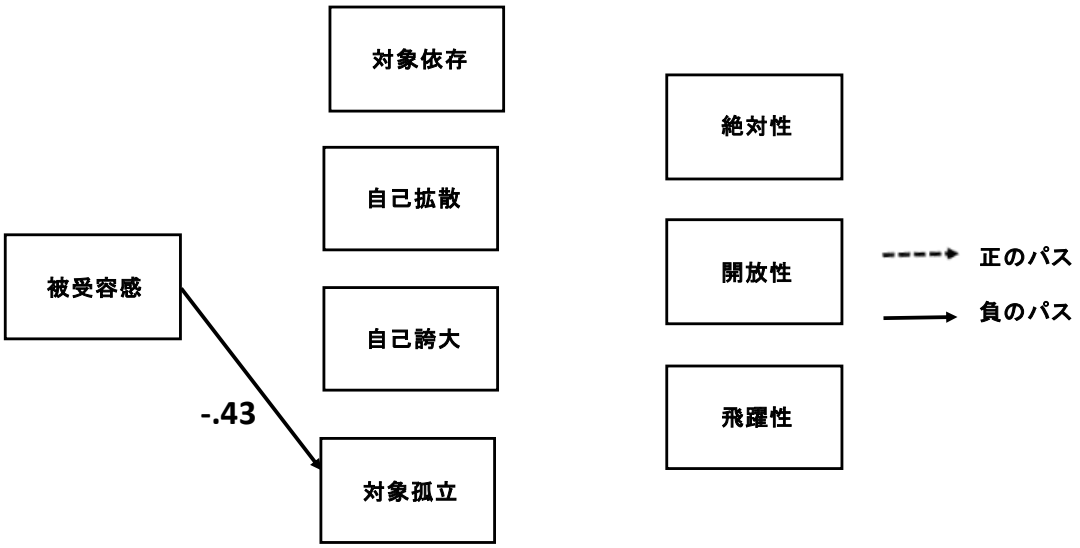
②女性における影響関係

女性においては，被受容感から「自己拡散感」へ負のパスが見られた。また，「対象への依存」から絶対性へ負のパスと「飛躍性」へ正のパスが見られた。また，「自己誇大感」から「絶対性」への負のパス，「開放性」への正のパスが見られた。「開放性」から「自己誇大感」へは負のパスが見られた。

今回使用した尺度で測定している自己構造は，主に親との鏡映自己対象体験に焦点が当たっており，鏡映自己対象体験の欠如や不足により不安定となる自己の一部分である（原

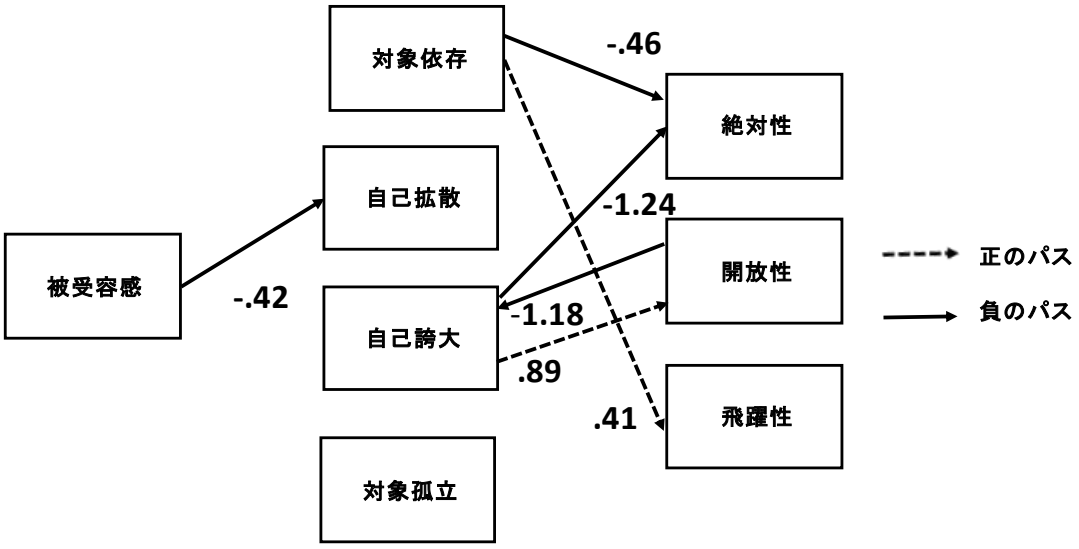
田，2005)。原田（2005）によれば，自己構造のうち「自己拡散感」は，両親からの拒絶による影響を受けている。また,「自己誇大感」は，母親の拒絶と父親の支配による影響を受けている。さらに「対象からの孤立」は母親からの拒絶,「対象への依存」は母親の支配による影響を受けている。親の拒絶と支配はいずれも不健全な関わりであるが，拒絶は存在の否定であるため，存在を認めていることを前提とする支配よりも不健全さは深刻であると考えられる。従って，上記４つを不安定さの大きな順に並べると,「自己拡散感」,「自己誇大感」,「対象からの孤立」,「対象への依存」となると推察される。

これらのことから，女性は，主な養育者との間での鏡映自己対象体験が欠如することは，自己の凝集性が大きく失われて深刻な自己の不安定さを生み出すと考えられる。また,「自己拡散感」よりも自己の不安定さが小さい「対象への依存」と「自己誇大感」は養育者との間での鏡映自己対象体験との関連はないものの，恋愛様相との間で複雑な影響関係をもつと考えられる。太古的な鏡映自己対象欲求が高いほど，交際相手を代替可能な存在として認識する反面，交際相手を安全基地にしてそこから自由に行動する傾向が見られる。また，幼児的な万能感が高いほど相手を代替可能な存在として認識する一方，交際相手のためにエネルギーを費やし，費やした結果，万能感を薄める傾向が見られる。



＊　図をわかりやすくするために，誤差変数の表示を削除しています。

図３　被受容感，自己構造，及び恋愛様相のパスダイアグラム（男性）



＊　図をわかりやすくするために，誤差変数の表示を削除しています。

図４　被受容感，自己構造，及び恋愛様相のパスダイアグラム（女性）

（６）交際経験の有無による自己構造及び被受容感の比較

交際経験のある者とない者との間における自己構造や被受容感の差を確認するために，*t* 検定を実施したところ（表７），自己構造では，「自己拡散感」と「対象からの孤立」が，恋愛経験のある者のほうが，恋愛経験のない者よりも低いことが確認できた(自己拡散感：$t(298)=-3.22$ $p<.001$；対象からの孤立：$t(298)=-4.46$ $p<.001$)。被受容感は，恋愛経験のある者のほうが，恋愛経験のない者よりも高いことが確認できた（$t(298)=2.39$ $p<.05$)。

表７　交際経験有無別の平均値と *SD* および *t* 検定の結果

		交際経験あり		交際経験なし		
		M	*SD*	*M*	*SD*	*t*値
被受容感		34.34	6.02	32.45	7.02	2.39 *
自己構造	対象依存	47.21	10.94	46.33	10.14	0.66
	自己拡散	48.81	10.71	53.22	11.70	−3.11 ***
	自己誇大	19.36	5.72	19.88	5.03	−0.76
	対象孤立	15.41	3.91	17.63	4.18	−4.46 ***

* $p<.05$, *** $p<.001$

（７）恋愛の悩みと相談の状況

①恋愛の悩みの有無と内容

恋愛の悩みをもつ者は，199 名（66.3%）であった。そのうち，悩みの内容が「恋愛対象への恐怖」である者が 57 名（28.6%），「恋愛成就困難」である者が 106 名（53.3%），「恋愛継続困難」である者が 100 名（50.3%），「その他」が 20 名（10.1%）であった。

②恋愛相談の状況

恋愛の悩みをもつ者のうち，相談経験者は 171 名（85.9%）であった。相談の相手が「同性の友人」であった者が 160 名（93.6%），「異性の友人」が 101 名（59.1%），「家族」が 36 名（21.1%），「先輩・後輩」が 38 名（22.2%），先生が 13 名（7.6%），専門家が 0 名，その他が５名（2.9%）であった。

相談において相手に求めることでは，「気持ちの受けとめと理解」が 128 名（74.9%），「アドバイス」が 133 名（77.8%），「一緒に解決行動」が 27 名（15.8%），「つらさの慰め」が 55 名（32.2%），「経験談」が 92 名（53.8%），「専門的立場からの意見」が６名（3.5%），「その他」が７名（4.1%）となった。

第４項　考察

（１）被受容感，自己構造，及び恋愛様相のジェンダー差

女性のほうが，男性よりも養育者から受容されていると感じたり，太古的な自己対象欲求をもつ傾向が示された。一方，男性のほうが，自己の活力が枯渇しており，交際相手を唯一無二の存在と認識しやすかった。

女性は，自身を養育者とは別個の存在として認識しない中で情緒的つながりを感じていることが予想される。そのため，自己の活力は維持されるとともに，交際相手を自己対象として機能することを期待しすぎることはないと考えられる。

一方，男性は，養育者とのつながりが薄いと感じており，自己の活力が枯渇しやすいことから，自己対象として機能することの期待が交際相手に集中しやすいと推察される。これは，男性のほうが女性よりも交際相手をより精神的な支えにしていることを見出した伊福・徳田（2006）や水野（2002）とも一致する見解である。

（２）被受容感，自己構造の安定性，及び恋愛様相の間の影響関係

被受容感，自己構造の安定性，及び恋愛様相の間のパス解析の結果から，主な養育者との間で適切な自己対象体験を経験している者ほど，自己が発達し，自己が安定しやすいことが見出された。また，男性に比べると，女性のほうが，恋愛の発達と自己の発達との関連が強いことが見出された。これらの結果は，仮説をおおよそ支持した結果となっていた。ただし，本研究の結果からは，「絶対性」は成熟した恋愛の指標になりうるが，「開放性」「飛躍性」は，成熟した恋愛の指標として捉えるには不十分であることが示唆された。あるいは，本研究で調査対象者となった女子学生において，自己構造と恋愛様相との関連パターンが異なる者が入り混じっていたことから，仮説とは異なる結果が見られたとも考えられる。今後，さらなる検討が求められる。

本研究においては，学生生活への適応度に問題のない学生を多く対象にしていたため，自己対象体験，自己の発達，及び恋愛の発達の間での影響関係が仮説どおりに明確な形で見られなかった可能性がある。そこで，適切な自己対象体験を得ることが不足していたと思われる学生を対象とした事例研究などを通して，自己対象体験，自己の発達，及び恋愛の発達の間での影響関係をさらに検討することが求められる。

また，今回の調査では，ジェンダー別の標本数の偏りが大きかったことから，偏りの少ない場合に同様の結果が示されるか確認する必要がある。また，青年期になると，自己対象体験は，主な養育者以外の他者，例えば教師や友人など拡がりができるので，そうした自己対象体験の総合によって自己の安定が支えられていることが考えられるため，そうした対象からの被受容感なども検討する必要があると考えられる。

さらには，セクシュアリティの違いによっても関連の仕方が異なる可能性もある。その点も今後の検討課題である。

（３）恋愛経験の有無による自己構造と被受容感の違い

恋愛経験の有無による自己構造と被受容感の違いの t 検定結果で示されたように，恋愛経験のある者は，ない者に比べると，養育者から受容されていると感じ，自己が安定していることがわかった。恋愛は，互いが深く認め合う関係性であり，そこでは自己対象関係の成立による自己対象欲求の充足が行なわれていると考えられる。本研究の結果から，養育者から受容されているという実感をもつことが恋愛関係を成立させる前提として必要であると推察される。また，本研究の結果から，恋愛関係が継続しているかどうかに関わらず，一度でも恋愛関係を構築したことのある者は，自己が安定しやすいと考えられる。なお，髙坂（2014）もアイデンティティとの関連において同様の傾向を見出している。

また，自己構造の中で「自己拡散感」と「対象からの孤立」では交際経験の有無で差が見られた一方,「対象への依存」と「自己誇大感」では差が見られなかったが，これは前者２つに比べて，原初的な要素である後者２つの安定度が，交際経験と関連があることを示唆していると考えられるが，これらの点についてはさらなる検討が求められる。

（４）恋愛の悩みと相談の状況

恋愛の悩みをもつ者が全体の約７割を占め,多くの学生が恋愛の悩みを抱えていること，学生にとって恋愛関係の構築と継続が簡単なことではないことが推察される。また，悩みを抱えた場合，ほとんどの者が他者に相談することで解決しようとしており，その相手として，友人を選択することが多いことが伺えた。また，相談相手には，気持ちの理解とアドバイスを求める者が多く，似たような立場で信頼できる他者に共感と助言を求めることが恋愛問題の解決に有効であると考えていることが示唆された。自己心理学的観点から考えると，共感や助言は，自分の存在価値を認めて欲しいという鏡映自己対象欲求の充足であったり，判断力や行動力があると評価している他者から心理的に支えられたいという理想化自己対象欲求が満たされる体験につながっていることから，相談相手に共感や助言を求めることは，自己対象体験欲求の現れであると推察される。

本研究における調査では，専門家を相談相手に挙げた者は皆無であったが，先生を挙げ

ている者が数名存在した。友人に相談しても解決できない，あるいは友人には相談しづらい恋愛問題を抱えている場合には，専門家への支援を求めることも考えられる。その場合においても，彼らが共感や助言を求めることで恋愛問題が解決するといった自己対象体験を得ることが重要であり，そのことが，恋愛の発達と自己の発達を促すことにつながることが期待される。

また，友人関係を構築することすら難しい学生が存在することも予想される。その場合，恋愛に関して悩んだ際は，自分自身の中で抱え込むことで，友人に相談できる学生に比べて，自己が不安定になったり，精神的なバランスを崩すリスクが高くなることが予想される。そこで，今後は，友人関係の状況と併せた分析が期待される。

第２節　学生相談における恋愛相談に関する実態調査研究

第１項　問題と目的

第１節にて，多くの女子学生は，多くの男子学生と比べると，恋愛の発達と自己の発達の連動性が高いことが見出されたことから，青年，特に青年女子にとっては，恋愛は人格的成長に影響を与えるものになることが示唆された。また，第１節の研究では，恋愛の悩みの相談相手として，教員は挙げられたものの，カウンセラーなどの専門家を訪れた経験のある者は皆無であった。第１章でも紹介したように，学生相談で扱う対人関係の問題の中に恋愛問題が含まれると指摘されている（岩田，2010）。しかし，その実態は公表されていない。そこで，本研究は学生相談における恋愛相談の実態を把握することを目的として行なうこととした。学生相談において恋愛相談は存在するのか，また，存在するとすれば，どのような相談内容であるのか，また支援の傾向はどんなものか，さらには，学生相談従事者が恋愛相談をどのように見ているのかを把握することを目的とした。

第２項　方法

（１）対象者

対象者は，2019 年 3 月時点で文部科学省ホームページに掲載されていた全国の大学 786 校の学生相談機関で学生相談に従事する教職員である。調査は郵送法で行った。95 校 108 名から回答を得た（回収率 12.1%）。

（２）質問紙

質問紙は，①回答者の属性（性別，年代，職種，大学種別，学生数），②恋愛相談経験の有無，③性別ごとの恋愛相談件数，④井ノ崎・葛西（2019）で作成した恋愛関係進展度ごとの恋愛相談件数，⑤具体的な恋愛相談事例内容（最大 3 件自由記述），及び⑥恋愛相談に関する意見及び感想の自由記述の 6 点で構成された。なお，恋愛関係進展度とは，Levinger, G.（1980）が対人関係の関与度の変容過程に関するモデルとして提唱した ABCDE モデルを参考にして作成されたものである。ABCDE モデルでは，対人関係は，A（Acquaintance；知己になる段階），B（Building；関係構築の段階），C（Continuation；持続の段階），D（Deterioration；崩壊の段階），E（Ending；終焉の段階）の段階をたどるとする。そこで本研究では，この ABCDE モデルに従い，恋愛関係進展度を，①恋愛関

係成立前，②恋愛関係成立時，③恋愛関係継続時，④恋愛関係崩壊時，⑤恋愛関係崩壊後の 5 つに分類した。

（３）倫理的配慮

本研究は筆者所属の大学病院研究倫理審査委員会の承認を得て実施された。なお，調査時において，調査への参加は自由であること，データは個人が特定されることのない形で処理され公表されることを書面で説明し，それらの条件に同意を得た場合には，質問紙内の同意欄にチェックをしてもらった。

第３項　結果

（１）属性の内訳

回答者のうち，属性における欠損値がない 101 名の内訳は次のとおりであった。女性が男性よりも多く（女性 74 名，男性 27 名），40 代が最も多かった（38 名，37.6%）。また，常勤及び非常勤をあわせるとカウンセラーが最も多かった（73 名，72.3%）。加えて大学種別では私立大学が最も多く（64 名，63.4%），学生数は 1000～5000 名規模が最も多かった（36 名，35.6%）。

（２）恋愛相談経験

恋愛相談経験の有無を尋ねたところ，属性の欠損値のない 101 名のうち，79 名（78.2%）と約 8 割の者が恋愛相談を経験しており，恋愛相談を経験している者がそうでない者よりも有意に多かった（χ^2=32.17, df=1, p<.001）。

（３）性別ごとの恋愛相談件数

恋愛相談を主訴として来談した学生では，女性が男性よりも圧倒的に多かった（女性 175 名，男性 58 名）。

一方，恋愛問題以外の主訴で来談したが相談の中で恋愛相談も行なった学生では，恋愛問題を主訴として来談した学生と同じように，女性のほうが男性よりも多かった（女性 161 名，男性 124 名）。

（４）各恋愛関係進展度の事例

本博士論文では，女子学生を対象としている。そこで，本研究では，女子学生の恋愛相談事例に対象を絞り，分析を行った。まず，複数のデータを 1 つの表にまとめて全体を見渡すためにケース・マトリックス（岩壁，2010）を作成した。ケース・マトリックスとは，異なる事例を領域ごとに比較するための表であり（岩壁，2010），質的研究法の 1 つである。大量のデータを全体的に見渡し，複数の事例に共通するパターンを抜き出すために役立つ（岩壁，2010）。このケース・マトリックスを用いて，恋愛関係進展度と恋愛相談内容に関して分類を行った。結果を「資料・付録」内に掲載した表 10 から表 15 に示した。恋愛関係進展度においては，恋愛継続時が 31 件と最も多く，全体の 38.8%を占めた。

一方，恋愛相談内容については，恋愛を楽しんでいる「肯定的」内容（以下，「肯定」と

する)，恋愛を肯定的にも否定的にも捉えていない「中立的」内容（以下,「中立」とする)，恋愛で問題を抱えている「否定的」内容（以下,「否定」とする）の 3 群に分類した。

①恋愛関係成立前

恋愛関係成立前の恋愛相談件数は 13 件であった。「肯定」が 2 件,「中立」が 2 件,「否定」が 9 件であった。「肯定」には，好意をもつ異性の話題をするといったものであった。「中立」には，予想外の他者からの告白への戸惑い，恋愛感情が理解できないことによる不眠の訴えが挙げられていた。「否定」では，好意をもつ他者との心理的距離の取り方への戸惑い，つきまとい被害に関する相談，好意をもつ他者からの拒否にまつわる気分の落ち込みなどが挙げられてきた。この段階では，否定的な相談内容が最も多いものの，肯定的な相談内容も見られた。

②恋愛関係成立時

恋愛関係成立時の恋愛相談件数は 2 件であった。否定的な相談内容しか存在しなかった。

精神的不調を呈する交際相手との関わり方についての相談と，不登校歴と精神科通院服薬歴のある双極性Ⅱ型の診断を受けている学生の交際開始による対人関係の変化の相談が挙げられていた。全体の事例数が他の恋愛関係進展度より少ないのが特徴的であった。

③恋愛関係継続時

恋愛関係継続時の恋愛相談件数は 31 件であった。肯定的な内容はなく,「中立」が 6 件,「否定」が 24 件であった。「中立」には，交際相手とのつき合い方や，交際相手にどの程度気持ちを伝え，サポートしてもらうかといった距離の取り方の試行錯誤などの相談などが挙げられていた。「否定」では，遠距離恋愛の交際相手への過剰な気遣い，交際相手との接触の少なさへの不満，交際相手や母親など期待する他者が思い通りにならないと不満が高まり攻撃することがあるなどの相談が挙げられていた。

④恋愛関係崩壊時

恋愛関係崩壊時の恋愛相談件数は 12 件であった。恋愛関係継続時と同様，肯定的な内容はなく,「中立」が 1 件,「否定」が 11 件であった。「中立」では，別れる際の対応についての相談が挙げられていた。「否定」では，交際相手との関係が崩壊し，なかなか気持ちの整理がつかないとの相談，一方的にふられたことで深く傷ついたという相談，恋愛関係崩壊時に交際相手から暴言を吐かれる等で，気持ちの整理がつかないなどの相談が挙げられた。

⑤恋愛関係崩壊後

恋愛関係崩壊後の恋愛相談件数は 16 件であった。恋愛関係継続時及び崩壊時と同様，肯定的な内容はなく,「中立」が 2 件,「否定」が 14 件であった。「中立」では，インターネットで知りあった男性への想いやソーシャル･ネットワーク･サービスでのやりとりや，過去の恋愛関係について整理を求める相談などが挙げられていた。「否定」では，別れた交

際相手の姿を見ると苦しいとの相談，交際解消後に交際相手とトラブルになり，脅迫を受けて困っているとの相談，交際関係解消直後に食べられない，眠れない，からだがだるいという訴えがあり，繰り返し多量服薬もしていたことなどが挙げられていた。

⑥その他

恋愛関係進展度を特定できない恋愛相談件数は6件であった。肯定的な内容はなく,「中立」が2件,「否定」が4件であった。「中立」では，好意をもった他者に嫌われることが怖くて好意を伝えることができない，男性を好きになるという状況が理解できず不眠に悩んでいるとの相談が挙げられていた。「否定」では，交際申し出を断ったところ軽い脅迫を受けたとの相談，過去の性的被害により恋愛関係が深まることに抵抗があるという内容が挙げられていた。

（5）各恋愛関係進展度の否定的相談内容

どの恋愛関係進展度においても，否定的相談内容が肯定的及び中立的内容よりも多く挙げられていた。学生相談において，肯定的内容や中立的内容は，専門的支援が必ずしも必要がないレベルの相談であると推察される。しかし否定的内容の場合は，表面的な助言で解決できず，複雑な要因や背景を分析しながら支援をしないと解決に至らない可能性が高い。そのため，否定的な内容の恋愛相談では，専門的支援の必要性が高いと考えられる。

そこで，それらの内容の特徴を詳しく把握するために，鈴木（2010）を参考に，カテゴリー表を作成した。カテゴリーの妥当性を確認するために，学生相談に従事している臨床心理士と公認心理師両方の資格をもつカウンセラー2名に，カテゴリーの定義を記したカテゴリー表を渡して,各相談内容がどのカテゴリーに分類されるか判定してもらった結果,90.6%と高い一致率が得られた。なお，不一致項目については，上記の評価者らに説明をして理解を得ることができたので，筆者の分類したカテゴリーを採用した。カテゴリー分類の結果を表8に示した。

①恋愛関係成立前

恋愛関係成立にまつわる不安や葛藤を示す「恋愛関係成立問題」,他者から好意を寄せられることにまつわる不安や抵抗感を示す「被接近問題」,及び修学や生活全般への悪影響を示す「学生生活への支障」の3つのカテゴリーが生成された。そして,「恋愛関係成立問題」には7事例,「被接近問題」には1事例,「学生生活への支障」には1事例が振り分けられた。

②恋愛関係成立時

交際相手との関わり方にまつわる不満や葛藤を示す「交際相手との関わり方困難」と「学生生活への支障」のカテゴリーが生成された。

③恋愛関係継続時

交際相手からの愛情表現の少なさへの不満と不安を示す「交際相手からの愛情表現不足」,

表８　恋愛関係進展度別カテゴリー表

恋愛関係進展度	カテゴリー		例	数
	カテゴリー名	定義		
関係成立前	恋愛関係成立問題	恋愛関係成立にまつわる不満や葛藤	・LGBTである女友達が好きになり，でもうまくいかない。	7
	被接近問題	他者から好意を寄せられることにまつわる不安や抵抗感	・男子学生からつきまとわれてメール等の対応に困っている。	1
	学生生活への支障	修学や生活全般への悪影響	・恋愛が講義の妨げになっている。	1
関係成立時	交際相手との関わり方困難	交際相手との関わり方にまつわる不満や葛藤	・お付き合いしている男性が精神的に不調となり，関わり方を相談したい。	1
	学生生活への支障	修学や生活全般への悪影響	・ゼミで2人の男性と友人になり，そのうちの1人と付き合うことになり，そのことをもう1人に報告したら，その人からも手紙で告白された。他に仲の良いゼミ生はなく，この2人とうまくいかなくなると友人がいなくなる（不登校歴，通院服薬歴あり。双極性Ⅱ型の診断あり）。	1
関係継続時	交際相手からの愛情表現不足	交際相手からの愛情表現の少なさへの不満と不安	・付き合い始めた彼から「忙しくてあまり会えない」と言われ，メールの返信も遅かったり，来なかったりする。彼にはどう接すればいいか。	4
	交際相手からの支配	交際相手からの束縛や侮蔑的行為を受けることによる恐怖や心理的負担	・CIに交際歴があると知った恋人が「汚い！」と責めてくるようになったと相談。”汚い女を受け入れてやっているんだから，言うことを聞け”という。	10
	交際相手への接近恐怖	交際相手への自己開示への恐怖感がある	・親密な異性，対人関係全般で本音を出せない，甘えられないといった依存の課題に関する相談。	4
	交際相手への過剰適応と依存	交際相手に過度に適応もしくは依存し，独立性が保てない状態	・遠距離恋愛の彼氏との関係性で気を遣いすぎている。	3
	学生生活への支障	修学や生活全般への悪影響	・恋愛関係がうまくいかないことから，学業に集中することが困難であるという訴え。	3

崩壊時	交際相手の執着	交際相手が離別を受け入れずにストーカー行為や脅迫行為を行うこと	・別れたはずの男子学生から「会いたい」という連絡が執拗に入り，断ると「名誉毀損だ」と言われた。	4
	交際相手への執着	交際相手との離別を受け入れられないこと	・彼氏との関係が崩壊し，なかなか気持ちの整理がつかない。	5
	強迫的な恋愛関係構築反復	強迫的に交際相手を変えて恋愛関係構築を繰り返すこと	・失恋をして，その傷つきを話す。そのうち，自分の求める人でないと気づき，自分に合わなかったと納得できる。そしてまた，新たに恋愛するという一連の流れを繰り返す。	1
	寂しさを埋めるための恋愛関係構築	寂しさを埋めることを目的に恋愛関係を構築すること。	・寂しさを埋めるかのように他の男性とも関係をもってしまう。	1
崩壊後	元交際相手の執着	元交際相手からのストーカー行為や脅迫	・交際解消後，相手とトラブルになり，脅迫を受けたりして困っているとの相談。	6
	元交際相手への執着	関係崩壊後に交際相手の喪失を受け入れることができない	・同じゼミで顔を合わせるのが辛い。	7
	搾取的な恋愛関係解消後の心理的混乱	搾取的な恋愛関係で体験したことについての気持ちの整理がつかない状態	・性行為を強要される関係を終わらせたことについての相談。	1
その他	性的依存	性的関係への過度な依存	・すぐに相手のことを好きになって性的関係を結んでしまい別れるを繰り返す。	1
	交際脅迫被害	交際することを脅迫されること	・バイト先の社員に告白され，断ったところ，その後もしつこく言い寄られ，「つきあってくれなければ，それを理由に仕事を辞める」というようなことを言われた。	1
	搾取的恋愛関係	交際相手の欲求充足が優先される恋愛関係	・自分ではお付き合いしていると思っているが，相手はそうではないようなので，こちらが会いたいと連絡しても無視するが，向こうが会いたくなったら連絡してくる。都合よく利用されているような気がするが聞けないし，自分からももう会わないとも言えない，との話。	1
	過去の性被害の影響	過去の性被害の影響により，恋愛関係に適応できない状態	・以前。性的な被害にあったことがきっかけとなり，恋愛関係が深まることに抵抗がある。	1

交際相手からの束縛や侮蔑的行為を受けることによる恐怖や心理的負担を示す「交際相手からの支配」，交際相手への自己開示への恐怖感を示す「交際相手への接近恐怖」，交際相手に過度に適応もしくは依存し，独立性が保てない状態を示す「交際相手への過剰適応と依存」，及び「学生生活への支障」の５つのカテゴリーが生成された。そして，「交際相手からの愛情表現不足」に４事例，「交際相手からの支配」に 10 事例，「交際相手への接近恐怖」に４事例，「交際相手への過剰適応と依存」に３事例，「学生生活への支障」に３事例が振り分けられた。

④恋愛関係崩壊時

交際相手が離別を受け入れずにストーカー行為や脅迫行為を行うことを示す「交際相手の執着」，交際相手との離別を受け入れられないことを示す「交際相手への執着」，及び強迫的に交際相手を変えて恋愛関係構築を繰り返す「強迫的な恋愛関係構築反復」，及び寂しさを埋めることを目的に恋愛関係を構築することを示す「寂しさを埋めるための恋愛関係構築」の３つのカテゴリーが生成された。そして，「交際相手の執着」に４事例，「交際相手への執着」に５事例，「強迫的な恋愛関係構築反復」に１事例，「寂しさを埋めるための恋愛関係構築」に１事例が振り分けられた。

⑤恋愛関係崩壊後

元交際相手からのストーカー行為や脅迫を示す「元交際相手の執着」，関係崩壊後に交際相手の喪失を受け入れることができないことを示す「元交際相手への執着」，及び交際相手から利用される恋愛関係を解消したことに関する気持ちの整理がつかない状態を示す「搾取的な恋愛関係解消後の心理的混乱」の３つのカテゴリーが生成された。そして，「元交際相手の執着」に６事例，「元交際相手への執着」に７事例，「搾取的な恋愛関係解消後の心理的混乱」に１事例が振り分けられた。

⑥その他

性的な関係への過度な依存を示す「性的依存」，交際することを脅迫されることを示す「交際脅迫被害」，及び交際相手の欲求充足が優先される恋愛関係を示す「搾取的恋愛関係」，過去の性被害の影響により，恋愛関係に適応できない状態を示す「過去の性被害の影響」の４つのカテゴリーが生成された。

（６）恋愛相談に関する意見及び感想

恋愛相談に関する意見及び感想の自由記述について KJ 法（川喜田，1970）を用いて分類した。結果を表９に示した。カテゴリーの妥当性を確認するために，学生相談に従事している臨床心理士と公認心理師両方の資格をもつカウンセラー２名に，定義をつけたカテゴリー表を渡して，各意見･感想がどのカテゴリーに分類されるか判定してもらった結果，89.3％と高い一致率が得られた。なお，不一致項目については，上記の評価者らに説明をして理解を得ることができたので，筆者が分類したカテゴリーを採用した。

その結果，カテゴリーとして，現象分析に焦点を当てた，「恋愛問題の原因」，「恋愛問題

の影響や効果」，介入に焦点を当てた，「恋愛相談における介入上の配慮点」，「複雑な恋愛問題への介入困難」，そして，印象に焦点を当てた「恋愛相談から見える最近の学生の傾向」の５つのカテゴリーが生み出された。

このうち，「恋愛における介入上の配慮点」，「複雑な恋愛問題への介入困難」，及び「恋愛相談に見える最近の学生の傾向」という３つのカテゴリーにはカウンセラー以外の学生相談従事者による記述は分類されなかった。

表９　恋愛相談に関する意見及び感想カテゴリー表

カテゴリー		例	数
カテゴリー名	定義		
恋愛問題の原因	家族との関係不全や発達障害など恋愛問題の発生する原因や背景に関する意見や感想	・発達障害傾向にある学生が相手とのコミュニケーションの取り方でトラブル（恋愛問題）が起きるケースが多くなったように感じる。 ・人間関係の基本的体験になる家族関係と，コミュニケーションが苦手な，適切な距離感が難しい特性のある学生が多いと感じた。	8
恋愛問題の影響や効果	恋愛問題がもたらす心理的影響や効果に関する意見や感想	・恋愛は青年期にとって，全神経を奪われる程の大きな力をもっており，こじれた場合に極端な経緯を辿り，人生を大きく揺るがす危険を孕んでいると実感している。 ・対人関係の凝縮したものだと思われるので，その経験を通して成長することがあることを感じる。	5
恋愛相談における介入上の配慮点	恋愛相談に介入する際に特に気をつけていること	・一見軽い恋愛の問題と思われるような主訴で来談したケースでも，その背景に様々な問題が関係しうることもあるので，じっくり聴き，慎重に見立てる。 ・学生は「付き合う」「彼・彼女」「本気」「一緒に生活している」等の表現を使用しますが，クライエントにより使用している際の言葉の意味が異なっています。その為，カウンセラーとしては具体的にクライエントから教えてもらい確認するようにしている。	18
複雑な恋愛問題への介入困難	複雑な恋愛問題への介入の難しさ	・具体的なアドバイス（SST的なもの）を求められる時もあり，対応の難しさを感じる。 ・性別違和を抱える学生に対しての性的な部分に関する助言の難しさ（どういう風にパートナーを見つけたら良いか？等聞かれる時がある）。	12
恋愛相談に見られる最近の学生の傾向	恋愛相談に応じる際に感じる傾向や世代による差	・恋愛相談を異性の親に相談している学生に会うと，時代や感覚のズレを感じる。 ・恋愛を主訴とするケースは少なく，カウンセリングが進んでから恋愛のことを語る学生が多い。	14
その他		・対人関係に関する相談のうちの１つだと捉えて対応しているため，特に「恋愛絡みの相談だから」と意識することはありません。特別な意識なし。	1

第４項　考察

学生相談従事者の約８割が恋愛相談を受けた経験があると回答しており，多くの学生相談現場では当たり前のように恋愛相談に対応している実態が浮かび上がってきた。また，ジェンダー別でみると，女子学生のほうが男子学生よりも恋愛相談をする者が多かったことは，第１節の大学生調査の結果を合わせると，女子学生のほうが男子学生に比べて，恋愛問題が，自己の存在意義とつながりやすい傾向からも納得できる結果であると考えられた。

各恋愛関係進展度の恋愛相談事例分類では，恋愛関係成立前から恋愛関係崩壊後に至るすべての恋愛関係段階において記述例が存在したが，最も多いのは，恋愛関係継続時であり，全体の約４割を占めていた。これは，恋愛関係継続が，女子学生にとって最も自己の存在証明につながりやすいため，関係継続困難が女子学生の自己証明の危機につながりやすいことから相談にもつながりやすいと推察される。

恋愛関係継続時の恋愛相談事例内容では,「交際相手からの支配」に関する相談が圧倒的に多かった。この「交際相手からの支配」は，デート DV と呼ばれている。内閣府（2018）が実施したデート DV 被害の実態調査において，女性は 21.4%と約５人に１人の女性が被害を受けていることが明らかにされている。つまり,「交際相手からの支配」は，女性にとって身近な問題であると言える。こうしたことから，本研究において，恋愛関係継続時に関する恋愛相談をする女子学生の最も多い相談内容が「交際相手からの支配」となったと推察される。

恋愛関係継続時以外の恋愛関係進展度での特徴についても考察しておく。

まず，恋愛関係成立前の恋愛相談では,「恋愛関係成立問題」が圧倒的に多かった。谷口（2013）は，恋愛に消極的な青年を，恋愛を自ら回避する「恋愛回避型」，恋愛を回避しないが，恋愛に対して不安をもつ「恋愛苦手型」，そして，恋愛を回避しているし，不安ももつ「恋愛あきらめ型」と３つのタイプに分類している。本研究で示した「恋愛関係成立問題」をもつ女子学生は，恋愛を回避しないが，恋愛に対して不安をもっていることから，これら３つのタイプで言えば,「恋愛苦手型」と考えられる。谷口（2013）によれば,「恋愛苦手型」の者は, 自分に自信がもてず, 恋愛を自分の思い通りに成功させる自信がなく, 傷つきたくないという気持ちが強いため, 恋愛対象から何らかの評価されることを避けて, 恋愛対象との接触を控えるという特徴を示す。このように,「恋愛苦手型」に示された自信のないという特徴から考えると,「恋愛関係成立問題」をもつ女子学生に支援を行う場合, 女子学生が自分自身に対して自信をもつことを促す支援が有効であると考えられる。

次に，恋愛関係成立時の恋愛相談では，他の進展度と比べて圧倒的に事例の数が少なかった。これは，恋愛関係成立という段階が他の進展度に比べると短期的であることに加えて，栗林（2013）が，２者がすでに形成している親密な関係を恋愛関係へと昇格させるために告白を行なうと成功しやすいことを指摘しているように，恋愛関係成立時には，他の進展度と比べると，負の心理的影響が出にくいということによると考えられる。また，女子学生は，恋愛対象に告白するよりは，告白されることが多いため（石川，1994），告白による失恋によって深い心理的損傷を受けることも少ないことも推察される。

恋愛関係崩壊時では,「交際相手の執着」と「交際相手への執着」の事例が同程度の数で,

全事例の約８割と，恋愛関係崩壊時のほとんどを占めた。さらに，交際関係崩壊後でも，「元交際相手の執着」と「元交際相手への執着」の事例が同程度の数で，こちらも全事例の約９割と，恋愛関係崩壊後のほとんどを占めた。これは，恋愛関係崩壊による，交際相手との親密な関係の喪失の心理的損傷の大きさを物語っていると推察される。Holmes& Rahe(1967)の社会的再適応評価尺度（Social Readjustment Rating Scale）において，２番目に大きなストレスとして離婚を挙げていることからも，夫婦関係に似た親密な関係である恋愛関係の崩壊も心理的打撃は極めて大きいと考えられる。

その他に分類された事例の数は少ないものの，どれも見過ごせないが，日常的に見聞きする問題とは考えにくい恋愛問題ばかりである。こうした恋愛問題は，どんなに信頼していようとも，身近な他者に話しづらい内容であると思われる。しかし，相当の心理的な負担を感じる問題であると思われるので，学生相談がそうした問題でも相談できるところであるという認識を持たれることが重要であると考えられる。

さらに，本研究において，学生相談従事者らが，恋愛相談に応じる中で，恋愛相談の背景にある問題に着目することの重要性や，ストーカーやデート DV などの関係の問題性を慎重に扱うことや，恋愛だからといって軽視することへの警告を発していることと合わせると，学生相談で扱う恋愛相談においては，単なる恋愛の表面的対処を助言して解決する水準に留まらない，来談学生の人生そのものの課題にも焦点を当てることが求められることも予想された。一見，クライエントが深刻な心理的問題を示さない相談であっても，本調査での学生相談従事者が回答した意見及び感想にもあったように，慎重に状況を見立てて支援を行うことが重要であることが示唆される。

交際相手からの支配や暴力を受けているにも関わらず，不健全な関係性への親和性が高いことから来談しない学生も存在することが予想される。そうした学生は，不健全な関係性への親和性が高いという点で，違和感をもてる者よりも事態は深刻かもしれないと考えられる。また，関係性としては未熟で不健全であったとしても，学生生活に支障が出ていないと，心理的危機につながる可能性も低くなると考えられる。ここに示したような恋愛問題を抱えているにも関わらず学生相談に来談しない学生についての実態については，今後の調査の実施が待たれる。

以上，第２章では，多くの大学生の恋愛の発達と自己の発達との関連を検討し，女子学生は男子学生に比べると，恋愛の発達と自己の発達の関連性が強いことが見出された。また，学生相談において，恋愛相談への対応は日常的に行なわれており，女子学生は男子学生に比べると恋愛相談をする学生数が多く，それらの事例は深刻なものが数多いことも判明した。

そこで，次の第３章から，学生相談で恋愛相談をした女子学生の臨床事例を通して，恋愛の発達レベルを見立てるとともに，自己の状態に合わせて学生相談のカウンセラーがどのように支援を行うべきかについて検討する。具体的には，第３章において，恋愛関係成立前の恋愛問題を抱える女子学生の事例，続く第４章において，恋愛関係成立時の恋愛問題を抱える女子学生の事例，さらに第５章において，恋愛関係継続時の恋愛問題を抱える女子学生の事例を取り上げる。

第３章　性的虐待被害経験による男性恐怖を抱く女子学生との面接過程

養育者との間で適切な自己対象体験を得ることができない例として，深刻なトラウマ体験による心理的苦痛に対して養育者から適切な応答を得られないというものがある。第３章では，性的虐待の被害経験による心理的苦痛を養育者に適切に応答してもらえないことによって,養育者との間で適切な自己対象体験を得ることができず,自己の発達が停止し,男性恐怖を呈した女子学生への学生相談における支援のあり方について検討する。

第１節　問題と目的

第１項　性的虐待被害経験

第１章で触れたように，自己は適切な自己対象体験を経て発達する。反対に自己対象体験が不足していたり，体験した自己対象体験が不適切であると，自己の発達は停止する。性的虐待の被害は，自己の安全を脅かす体験であることから，不適切な自己対象体験の１つと言える。

性的虐待は子ども虐待のなかでも侵入性が高く，最も対応が困難な問題であることが知られている（杉山, 2008）。青年期以降に自己評価の低下，情動統制困難，恋愛問題などの影響が残ることがあり（Arias & Johnson, 2013; 岡本・山本, 2013），学生の中には性的被虐待経験による心理的影響から学生生活への適応に困難をきたす者がいると予想される。

ただし，こうした外傷体験による心理的影響が外傷化するのは，その心理的影響の強さではなく，それを支える適切な応答が得られないことによると Stolorow（2007）は述べている。子どもの情動に対し，養育者が安定した応答を示さなければ，その情動はそれまでの心理的構造にとって脅威となり，解離ないしは拒否される（Stolorow et al., 1987)。強烈な怒りや恐怖は性的被虐待経験のようなトラウマ体験をした者に生じやすく受容されにくい情動である（宮地, 2013）。性的虐待を受けた子どもは，自分自身のことを家族の裏切り者と認識しやすく，家族に被害を率直に訴えることが難しい（岡本・山本, 2013）。さらに，心の準備ができていないために子どもから被害の事実を告げられた養育者が動揺してしまうことがあり（佐藤, 2013），拒否的な態度をとることもある（野坂, 2013）。

これらのことから，普段は十分に適切な応答ができる養育者であったとしても，性的虐待被害体験に伴う情動体験には適切な応答をすることが困難になることが考えられる。また，性的虐待被害を受けた子どもも，養育者に遠慮して被害体験に伴う情動処理の援助を求めることを十分にしないことも考えられる。性的虐待をした者が，同じ家族内の者であれば，これらの傾向は一層強くなると考えられる。こうしたことから，性的虐待被害体験にまつわる自己対象体験が不足したり不適切になることで，子どもの自己の発達が停止することが起こりうる。

したがって，養育者との間で適切な自己対象体験を得ている学生でも，性的虐待被害経験があると，その被害経験による心理的影響や，その影響に対する養育者の共感不全によって自己の発達が停止することが予想される。

第２項　卒業期の課題

大学生は学年の移行に伴い学生生活の領域ごとに異なった課題に直面する。大学卒業までの１年間にあたる卒業期は，学生生活の終了，社会生活への移行が課題となる（鶴田, 2005, 2008b）。この時期の主な具体的課題は卒業論文作成と卒業後の進路決定である。これらに加え, 卒業という節目を前にして今まで未解決であった課題を整理し, 内面的な「もう１つの卒業論文」を書くような作業をする学生がいる（鶴田, 2001, 2008b）。学生が卒業期に入って不適応となるのは，これまで未解決だった問題が卒業期の課題の負担により表出しやすくなるためと考えられる。そしてこの未解決な問題の表出が学生に「もう１つの卒業論文」への取り組みを促すことが予想される。

従来の卒業期における学生相談の要点に関する研究では，学生が抱える未解決の問題を根本的に解決することよりも学生生活への適応を通した学生自身の心理的健康や心理的成長の促進を目指すことが重要だと主張されている（山口, 2001; 三谷, 2008; 野口, 2008）。山口（2001）は，卒業期に来談した過食で悩む女子学生の事例において，葛藤を明確化して自律性を脅かすのではなく，学生生活の課題達成過程を情緒的に支えることで少しずつ内面的な問題への取り組みを可能にすることを勧めている。また野口（2008）は，3 年次から来談した統合失調症の女子学生への卒業期の支援において，共感的に接しつつ現実的な検討を促すこと，卒業論文作成や就職活動などの現実的課題をやり遂げる過程において支持的に関わることが重要であると強調している。

前述のように，卒業期における学生相談の要点について検討した研究がいくつか存在するが，筆者が知る限り性的虐待被害経験をもつ学生を対象としたものは皆無である。

性的虐待被害経験の影響が見られる学生とは, 性的虐待被害経験そのものによる影響と, その経験による心理的苦痛に適切に対応してもらえなかった影響の２つの影響を受けている学生であると考える必要がある。これらの不適切な自己対象体験によって停止した自己は，適切な自己対象体験を得ることにより，再び発達し始めることになる。

第３項　本研究の目的

そこで本研究では，性的虐待被害経験による心理的影響を苦に卒業期に初来談した女子学生への面接過程の分析を通して，学生による自身の怒りの受容と学生の凝集的な自己の獲得に貢献する，すなわち自己の発達再開に貢献するカウンセラーの応答とはどのようなものかについて検討することを目的とする。

なお，本研究で検討した学生は，恋愛関係進展度で言えば，恋愛関係成立前に相当する段階にいる学生である。また，本学生は，性的虐待被害経験による長期的影響を示していたが，卒業期以前まで学生生活にある程度適応していたことから，性的虐待被害経験をもつ学生の中でも病態水準が比較的軽い学生にあたると考えられる。

第２節　事例の概要

クライエントから事例公表の同意を得ているが，事例記述については，プライバシーに配慮して趣意を損なわぬ程度に若干の変更を加えている。

第１項　クライエント

A さん，大学 4 年生 20 代前半。１人暮らし。パステルカラーのカットソーとひざ丈のフレアスカートといった女性らしい身なりをしているが，全体的にルーズな着こなしでけだるい雰囲気をかもし出していた。話し方はおっとりして，面接室のソファに腰をかけている間,か弱げに甘えた態度を示し,カウンセラーとの目線の高低差もあると思われるが,上目使いでカウンセラーを見るのが印象的であった。

第２項　主訴

男性から告白されると気持ち悪くなることと子どもの頃の経験との関係が気になった。

第３項　家族構成

父親（50 代，会社員），母親（50 代，パート事務職員），長兄（20 代後半，会社員，１人暮らし），次兄（20 代半ば，会社員，１人暮らし）

第４項　来談経緯

男性から告白されると気持ち悪くなることを友人に相談したところ，学生相談室に行くことを勧められ，X 年 6 月に来談した。

第５項　面接構造

在籍学生の学生生活支援の一環として，大学内に設置されている学生相談室にて面接を実施した。個別相談の利用は予約制となっており，在籍学生及び保護者であれば誰でも無料で利用可能である。夏休みなどの休暇期間も通常どおりに面接を実施する体制をとっている。なお，A に対しては，週 1 回 50 分のカウンセリングを継続実施し，休暇期間中も面接を実施した。

第３節　面接経過

面接過程を 3 期に分けて報告する。「　」は A，＜　＞は筆者（以下，Co），『　』はその他の人物の発言である。

第１項　第Ⅰ期　＃1～＃5（X 年 6 月～７月）性的虐待被害経験の告白

A は,「男性から告白されたら気持ち悪いと感じることが，子どもの頃の体験からくるのではないかと感じ，そのことについて話してみたいと思った」と顔をやや強張らせつつも微笑みを絶やさず来談動機を説明した（#1）。Co が子どもの頃の体験に関する説明を求めると，次のような性的虐待被害経験を語った。就学前から小学校中学年までの間，自宅に A と次兄しかいないときに，ふだん家族全員が一緒に寝ている寝室で，次兄が A の胸部や陰部を手で触り，A も次兄のペニスを手で触らされていた。次兄はペニスの挿入も求めたが，A が拒否したので挿入はされなかった。母親に止めに入ってほしくて一度だけ「下のお兄ちゃんが胸を触ってくる」と訴えたが，母親は A と次兄を一緒に呼び出して『そんなこと（A の胸を触ること）をやってはいけません』と一度注意をしただけで終わった。そ

の後 1，2 年ぐらいの間，性的虐待が続いた。当時 A はやっとの思いで母親に被害を告白したと思われた。しかし母親から A の心の傷つきに共感してもらえていない，A が母親から大切に扱われていないと感じて相当落胆したのではないかと Co は考え，＜そんな反応だったのですね＞と応答すると，A は泣きそうな表情で「今でも時々夜寝ているときに天井を見上げていると下の兄からされたことがふと頭に浮かび気持ちが悪くなって寝つきにくいことがある」と Co をじっと見つめて訴えた。

Co は，初回にも関わらず，A が性的虐待被害経験というかなり深刻な経験について話したので，大学の友人以外にもこの被害経験について話して，受け入れてもらった経験があるのではないかと感じた。そこで，＜お母さん以外の人に下のお兄さんからされたことを打ち明けたことはありますか＞と尋ねると，「高校 1 年のとき友人に泣きながら話すと，次兄のしたことについて真剣に怒ってくれた」と話した。母親からは思うような応答を受けることはできなかったが，母親以外に A の性的虐待被害経験のつらさを理解してくれた人が複数存在したことに Co は少し安心した（#1）。

4 年次の 6 月であったので，A の卒業の意思と卒業後の進路について Co が確認すると，「今年度で卒業して就職することを希望しているが，卒業後の進路については何も決まっていない，何をしたいのかもわからない」とのことであった。そして，#1 の終盤に「異性からの告白が気持ち悪いことより，自分の心理状態が安定しないことのほうが悩みである」と言った。Co は A の心理状態の不安定さは，性的虐待被害経験に関連する心理的影響の 1 つであると考えた。そこで，前述のとおり，A が X＋1 年 3 月末での卒業を希望したことから，性的虐待被害経験による心理的影響としての情緒的不安定さの解消と，卒業論文作成および進路決定によって，A の自己の発達を促すことを目標に継続面接を行うことにした。

#2 では「2 年生のときに軽いうつ病になって精神科で治療を受けたことがある。効果がないので通院を止め，母親の気に入っている“赤毛のアン”を読んで治った」と話した。さらに，母親が幼少の頃，母方祖母から厳しくしつけられ，よくガミガミと怒られていたと母親から聞いていたこと，A が中学 3 年から高校 1 年であった 2 年間，母方祖母と同居しており，その間に A も母方祖母から口うるさく怒られていたことを話した。A は Co にこの話をすることで，母親が A の鏡映自己対象欲求を満たしてくれないのは，母方祖母との間で母親が鏡映自己対象欲求を満たせなかったからであることを伝えようとしているように感じた。さらに，「父は母のことを感情の浮き沈みが激しいと言うのですが，私は母が機嫌の良いところしか知りません」と言ったことから，Co は，A が母親との間で鏡映自己対象欲求を満たせないことを補うために，母親に理想化自己対象欲求を向けていると理解した。母親との間で鏡映自己対象欲求が満たされないことへの不満は，母親の仕事について触れ，職場仲間と夜飲みに行くことが多く，休みの日には職場仲間とアウトドアに一緒に出かけて楽しんでいることを呆れた様子で A が語ったことからも感じた。また，父親が幼少期からずっと単身赴任であること，長兄に対してのみ怒鳴るなど厳しいしつけを行っていたのを目撃していたことを話した。そこから，父親は母親では満たせない鏡映自己対象欲求を満たしてくれる存在ではないことが窺えた。

#3 では「人の家を訪問するとか，A の家に人を招くのは苦手」，#4 では「実家に帰った

とき，家族と一緒の寝室では下の兄からされたことを思い出して落ち着かず眠れないので別の部屋で寝ている」と話した。これは，A にとって家が他者によって自己の安全を脅かされる場所になっていることを物語っている発言であると Co は考えた。次兄については「やさしい性格で，性的虐待の最中も A を気遣ってくれた。その影響でやさしい男性が苦手なので，この先恋愛や結婚することができるのか不安である（#5)」と次兄に性的な領域の安全を脅かされたことによる恐怖が，A の恋愛関係体験への恐怖を生み出していることが語られた。

卒業期の進路については「卒業後は就職しようと思っているが，特にしたい仕事もない（#1)」や,「最近まで研究職に就きたいと思って就職活動をしていたが，学部卒では無理だとわかって諦めた（#2)」と沈んだ表情で話した。これらの発言から，A の自己は年齢相応に発達していないため，進路についても現実的に検討できず，不明瞭なままになっていると考えられた。その後,「子どもの頃に母親から料理を教えてもらうのが好きだったことを思い出した。今も料理をするのが好きだから（#3)」,「飲食店で働きたい（#4)」と目を輝かせて話した。この発言から A にとっての母親の存在の大きさを強く実感すると同時に，母親への太古的な鏡映自己対象欲求が存在するために，自己の発達が停止して，年齢のわりには幼い発想を持つことしかできない状態にあるように思われた。

このように，#1 から#5 にかけて Co は現在もみられる性的虐待被害経験による心理的影響と思われる心理的苦痛に共感的応答を続け，A の自己の発達の再開を待った。

第２項　第Ⅱ期　＃6～＃18（X 年 7 月～12 月）性的虐待被害経験による影響の軽減と指導教員等への怒りの表出

（１）性的虐待被害経験による影響の軽減と指導教員への怒りの表出（#6～#11）

#4 の時と異なり，#6 においては帰省した時に落ち着いて寝室で寝ることができたとの報告があり，性的虐待被害経験による影響の低下が見られた。そうした変化と並行して#6 からは指導教員への不満が語られ始めた。指導教員が数回続けて約束を忘れたり(#6)，よく指導教員の長話に付き合わされ(#8)，自慢話ばかり聞かされる(#9)と強い怒りを示した。A 以外のゼミ生はそのような指導教員の行動にそこまで怒りを示さず，受け入れているとのことであった(#9)。指導教員が A の太古的な理想化自己対象欲求を満たしてくれないことに A が不満を感じていると Co は考えた。

#6 から#9 にかけて A は，指導教員に対する不満について，怒りを露わにして話し続けた。A の自己は激しい怒りを心の中で緩和できるほどの凝集性を備えていないのではないかと推測した。そこで，Co は A の怒りの強さに圧倒されつつも，A が指導教員に対する怒りを表出するたびに，＜それは怒りたくなりますね＞と共感的応答の姿勢を崩さないように努めて,A の自己を支えた。すると A は決まって大きくうなずきながら表情を和らげ，今後の卒業研究計画について熱心に語った。すると#10 と#11 では指導教員のことを一切話題にしなかった。これは，A の自己の凝集性が高まったことで怒りを心の中で緩和させる機能が高まった証であると考えられた。さらに#10 では，ゼミの先輩から短期退職者が多いという理由で志望の飲食会社 D への就職を反対されたことを契機に,「飲食店への興

味が薄れ，母親と同じ仕事に就きたいと思うようになった」と進路について話題にした。また#11 では「自分の仕事をする姿が想像できない」と就職意欲自体の低さを打ち明けた。このように A が指導教員への怒りの表出のあとに進路選択という現実的な課題について話すようになったことから，Co が A の表出した怒りに粘り強く共感的に応答し続けたことで，A の自己の凝集性が高まり，現実的な課題に取り組みやすくなったのではないかと Co は考えた。

（２）他学生への嫉妬の表出（#12～#13）

#12 は指導教員のための催し（以下，催し）を予定している時期であった。「最近，同期のゼミ生 E が催しの準備にやる気を出し，熱心に作業をしているので腹が立つ。これまで同期の中では自分が一番熱心に準備をしていたので,自分の居場所を取られた感じがする」と苛立って話した。Co には，指導教員との間で太古的自己対象体験を得ているので，それを他のゼミ生に妨害されるかもしれないという不安を感じているように思われた。その不安は，#13 における「別のゼミ生 F が催しで披露する出し物を 1 日でマスターしたので，指導教員から一番良い評価をもらうのではないかと思うとイライラする」との発言にも表れていた。そこで Co は A のゼミ生に対する嫉妬に対して，＜あっという間にうまくなられてしまうとくやしいですよね＞と応答した。すると,「本当にくやしいです」と苦々しい表情を示した。Co はその表情を静かに見ていたところ，A は生き生きとした表情に変えて，間近に迫っている卒業論文の中間報告の準備について熱心に説明した。嫉妬する自分を Co から共感的に応答されたことで，自己の発達が促され，卒業論文の中間報告準備という現実的な課題に目を向けることができたと考えられた。

（３）指導教員への信頼の回復及び身体的不調の表出（#13～#18）

この時期,「指導教員の論文を読んで指導教員の偉大さを再確認できた(#13)」等，指導教員を肯定的に評価する発言が見られた。その言い方に大げさな印象を受けたので，A の指導教員に対する理想化自己対象欲求が高まっていると理解した。

#14 では卒業後の進路に触れ,「就職相談室に相談に行ったところ，身分が不安定で収入も少ないという理由で母親と同じ仕事に就くことに反対されたが，同じ仕事に就きたいという気持ちは変わらない」と言ったことから母親に対する鏡映自己対象欲求も高いと考えた。それに加えて，Co は，#2 での母親の仕事に関する A の発言のこともあり，A は母親が A よりも職場に関心を寄せていると思って自己対象欲求が満たされない悲しみを感じているのではないかと推察した。こうした推察のもと, Co は前述の A の発言を傾聴した。

#15 で A は催しの準備を引き受けすぎる自分に呆れていたが，催しが終わった#16 では「出し物が成功し，指導教員も『よくできていた』ととても喜んでくれた」と喜んだ。その発言から，A の自己対象欲求が満たされたのだと Co は思った。さらに#17 では「D へのいらだちは，私自身の劣等感によるものだったと気づいた」と，他のゼミ生と比べて指導教員に認められていないという A の劣等感が他のゼミ生への怒りを生じさせていたことを洞察した。こうした洞察ができたのは，自己対象欲求が満たされたことにより，自己の凝集性が高まったことによると思われた。

一方，A は「腰が痛い(#16)」，「体が動かない(#17)」，「胸が痛い(#17)」等，#16 から#17 にかけて次々と身体的不調を訴えた。Co はこれを前述の劣等感への気づきにより，太古的自己対象欲求の喪失への無意識の抵抗であると推測した。こうした推測のもと，Co は A の身体的不調にまつわる心理的苦痛に共感的に応答し続けた。#17 では遠慮ぎみに身体的不調のつらさを電話で母親に訴えたが，深刻に受けとめてもらえなかったと嘆いた。このパターンは，まさに A が性的虐待被害経験による心理的苦痛を母親に訴えたときと同じであると Co は思った。そこで，Co は A が母親に大切に扱われていないと考えて失望していると考えつつ，＜それは残念でしたね＞と応答すると，A は表情を明るくして「はい」と嬉しそうに返答した。続いて「体調の悪さを指導教員に訴えると，研究室での仕事を免除してくれた」と嬉しそうに話した。この#16 と#17 に見られた展開から，A が適切に応答してくれない母親への怒りを受け容れることが可能なほど自己が発達したと考えられた。また Co の継続的な共感的応答により，以前と比べて指導教員との間での A の自己対象体験が成熟し，A は指導教員との間でより良好な関係をもてるようになったと思われた。その後の#18 では「腰と胸の痛みはかなりましになっています」と身体的不調の改善を報告した。新たな自己対象体験により，自己の発達が促されたと理解できた。以上の変化から，Co は A の示した身体的不調は，太古的自己対象欲求を成熟させる不安と，無意識の抵抗の現れであり，その不安を乗り越えて自己対象欲求を成熟させるのに，Co の共感的応答が有効であったと推察できた。

第 3 項　第Ⅲ期　#19～#29（X 年 12 月～X＋1 年 3 月）卒業期の課題達成

#19 から#23 にかけて年末年始に実家で次兄に会うことが話題となった。#19 に「毎年正月に家族そろって初詣に参ることが恒例である。きょうだいの中で最も信頼できる上の兄がもうすぐ結婚するので，正月に家族全員集まるのは今回が最後になるから参加したい。でもこれまでと違い下の兄に会うのが怖い」と話した。前年までは次兄と対面しても今回ほどの恐怖を感じていなかったとのことから，カウンセリングにより性的虐待被害経験の心理的影響の 1 つである「感情の回避」（American psychiatric association, 2013）が改善されて恐怖を感じることができるようになったと考えられた。「いつものように晩はきょうだいそろって同じ部屋に寝ることになると思う。今回に限って一緒に寝ることを拒否すると怪しまれるだろうけど，かといって下の兄と一緒に寝たくない」と次兄と同じ部屋で寝ることへの強い恐怖を訴えたので，Co は A がそのように感じることはもっともだと思い，＜子どものころ下のお兄さんからされたことを思い出してしまうので，下のお兄さんに会って同じ部屋で寝ることに恐怖を感じるのではないですか＞と確認すると A は大きくうなずきながら即座に肯定した。その後も「できるだけ下の兄とは顔を合わせたくないです(#22)」と訴えるなど，次兄への恐怖が高まっている様子が見受けられた。Co は A の強い恐怖を感じ取り，十分な共感的応答が求められる場面であり，ここで共感的応答を十分行うことは，A が Co との間で新たな自己対象体験を獲得する好機であると考えた。しかし，Co は A に何と言葉をかけてよいかわからず，＜困りましたね，どうしましょうね＞と繰り返し，A が次兄との再会を無事に終えることを願い続けるしかなかった。結局 A は何とか正月に帰省し，「初詣は上の兄と一緒だった。下の兄がそばにいても取り乱すこと

なく無事に過ごせた」と嬉しそうに語った(#23)。この発言から，上の兄が A の希望に沿って応対したことで，A の鏡映自己対象欲求が満たされたと考えられた。Co が＜良かったですね。よく乗り切りましたね＞と労うと，A は笑顔で大きくうなずいた。

この時期，卒業研究の大詰めを迎えており，A は「自分の卒論がおろそかになるのが怖いので(#20)，研究室の仕事の手伝いは減らそうと思います(#21)」と卒業研究を現実的な方法でやり遂げる意欲を示したことから，Co は以前よりも A の自己が発達し，凝集性が実年齢で求められる水準に近づいていると感じた。しかし，その一方，#21 に指導教員への怒りが再び表出され，A は指導時間を無断でキャンセルされたことに激怒した。また#22 では「体調不良を理由に研究室の仕事を断ったとき，指導教員から『そのような状態では今年度の卒論提出は無理かもしれませんね』と言われた」と悔しさをにじませた。この怒りの強さは#6 から#9 の時と変わらないように Co には感じた。これは，A の自己の凝集性が高まっているものの，卒業期の課題が大きな心理的負担となり，自己が弱まっていると考えた。このような考えのもと，Co は，A の怒りに圧倒されることなく，A の示す怒りをしっかりと受けとめた。#23 では指導教員から思うように指導してもらえないことを，毎日のように切々と電話で母親に訴えていると言い，「Co もいつも指導が夜中なのはおかしいと言っていたと母親に言うと，母親が『それは立派なアカハラだ』と言ってくれた」と嬉しそうに語った。#17 の時と異なり，A が遠慮なくつらさを母親に訴えることができたことで，母親との間で適切な自己対象体験を得ることができたと考えられた。「周りは寝る間を惜しんで頑張っているが，私には無理。指導教員には常識的な範囲で研究したいと言おうと思う」といった主体的な発言が見られ，#24 では「指導教員からなかなか指導を受けられないので院生から助言をもらった」と A なりの現実的対処を積極的に行っている様子が示された。卒業論文提出期限直前の#25 では，「指導教員から『卒論がよくできています。提出まで頑張りましょう』と言われた。しっかり最後まで指導をしてくれる気でいるとわかって嬉しくなった。ここまでよくやってこられたと思う」としみじみと話した。これに対して Co も同感であることを伝えると満足げな表情を見せた。#26 で卒業論文を無事に提出できたとの報告があり，#27 では，ゼミ仲間とともに指導教員宅を訪問し，最後まで楽しく過ごせたとの報告があった。

卒業論文提出後の#26 から，A は就職活動を再開した。いくつかの会社の説明会に参加する一方，専門学校の入学説明会に参加するなど(#26)，焦りからか，一貫性に欠ける活動を続けていたが，A が気に入っている文具メーカーである G 社の採用試験を受け始めて順調に最終面接まで進むことができた(#26～#28)。就職活動中の#28 では，美容院で洗髪してもらう際に，不安を感じつつもはじめて男性スタッフにしてもらうことに挑戦したら，どうしようもなく眠くなってしまったことを話した。＜子どものころに下のお兄さんからされたことの影響で，男性スタッフに恐怖を感じて眠くなったのかもしれませんね＞と言うと，納得した様子で「こんな状態では将来結婚とか望めないのではないかと思う」と不安をにじませた。それは，性的虐待被害経験による影響にこれからも苦しめられるのではないかという不安とともに，その影響から自分自身の人生や生活を守りたいという気持ちが現れているように Co には感じられた。

次の#29 には G 社から内定通知があったと嬉しそうに報告した。「両親も喜んでくれた。

母親は『花形じゃん』とはしゃいでいた。指導教員にも報告した」と明るい声で話した。Aの自己対象である母親や指導教員に評価されたことが，Aの自己を安定させていると思われた。引っ越し等の準備で時間がないことから#29で終結となった。Coから#1でAが話していた自室で天井を見上げていると気分が悪くなるという症状の現在の有無を確認すると，現在はないとのことであった。そして，#29の最後にはCoは，Aが卒業後に利用できる相談機関に関する情報提供を行った。

第４節　考察

第１項　面接過程におけるクライエントの変化

来談当初，Aは侵入症状（#1）や恐怖症状(#4)などの性的虐待被害経験による心理的影響を訴えていた。また，被害当時，母親に被害を受けていることを報告したにも関わらず，母親からAの求める対応を受けることができなかったことも話された。これらの被害体験と母親による共感不全からの心理的影響に，卒業研究や就職活動遂行という卒業期の課題が加わり，卒業期の課題遂行困難の水準にまでAの自己の凝集性が弱まっていたことが卒業期に入ってからの来談につながったと考えられる。学生相談に来談するまでAが性的虐待被害経験関連の影響を抱えつつ学生生活に何とか適応していたのは，母親が性的虐待被害経験にまつわる心理的苦痛以外のAの情動に対しては適切な応答をしていたことで，母親との間で，一定の自己対象体験を獲得できていたからであると推測される。さらに，高校及び大学の友人に被害経験に伴う心理的苦痛を受けとめてもらい，友人らとの間で適切な自己対象体験を得ていたことも来談前までの適応につながったと考えられる。

初回面接において A が性的虐待被害経験をほとんど躊躇せずにカウンセラーに話すことができたのも，母親や友人らとの間で適切な自己対象体験を得ていたからであると推察される。つまりAは性的虐待被害経験とそれに対する母親の共感不全による心理的影響に卒業期の課題の負担が加わることで自己の凝集性を弱らせたものの，性的虐待被害経験の告白以外における母親の適切な応答と性的被虐待経験告白に対する友人からの適切な応答を経験していたおかげで適切な自己対象体験を得ていたため，初回からカウンセラーとの間で肯定的な二者関係を構築できる程度には自己の凝集性を維持できていたと考えられる。

#1 において A は性的虐待被害経験による心理的影響の軽減よりも卒業期の課題達成をカウンセリングの目標として求めた。このようにAが現実的な判断を下すことができたことも，Aの心理状態が深刻な水準にはなく，傷ついた自己の水準であることの表れと考えられる。Aが卒業期の課題達成を求めつつも，性的虐待被害経験の影響にまつわる苦悩を訴えたことは，同時に影響の改善も求めていると判断できた。カウンセラーは，Aにとって自己の発達を促し自己の凝集性を高めることが重要であり，そのためには，性的虐待被害経験による影響の軽減と卒業期の課題達成を行なうことが必要であると考えた。そこでカウンセラーはAの希望も尊重した上で，卒業期の課題達成を第１の目標としながら，性的虐待被害経験による心理的影響の解決も考慮するという２つの課題を想定して対応した。

Aは性的虐待被害経験による心理的影響と卒業期の課題の負担によって自己の凝集性が弱っていたため，他のゼミ生が許容範囲とした指導教員の無責任な行動に耐えられない状態にあったと考えられる。そこで，このAの示した性的虐待被害経験による心理的影響へ

の対処として，カウンセラーは共感的応答を通して，A の自己の凝集性を高めて，卒業期の課題を達成できる水準にまで心理的影響を改善させることを目指した。

カウンセラーの共感的応答を受けた A は，性的虐待被害経験による心理的影響の軽減を示すとともに(#6)，指導教員への激しい怒りを表出した（#6～#9）。これは性的虐待被害経験による心理的苦痛に対する母親の共感不全により（#1），情動が高まりすぎるといった情動を統制することの困難さを抱えていたことと，自己の凝集性の弱体化の現れと考えられた。そこでカウンセラーは，面接の中で A の表出する指導教員やそれに伴う他のゼミ生への怒りをそのまま受けとめ，共感的応答をし続けた。怒りは，自分自身を表現し，自分自身であろうとする努力の表れであり，自身が十分受け容れることができれば，その怒りに現実的に対処できるようになる（Jersild, 1955）。A は#9 までに指導教員への怒りをカウンセラーから共感的に応答されたおかげで A 自身もその怒りを受け容れることができ，自己の凝集性が高まって，#10 と#11 のように卒業期の課題に主体的に取り組むことができるようになった可能性がある。同様の変化は，#12 及び#13 におけるゼミ生への怒りの表出と#14 での進路選択の話題にも見られた。さらにカウンセラーが A の示した身体的不調にまつわる心理的苦悩にも共感的に応答することで(＃16 及び#17)，A は身体的不調の背景にあったと思われる太古的自己対象欲求を手放す恐怖を受け容れることができたと思われる。

A は，このカウンセラーとの間における自己対象体験後，遠慮がちに心理的苦痛を母親に訴えることを試み(#17)，指導教員に率直に身体的不調を訴えて適切に応答してもらう体験をする(#17)ことで，さらに恐怖を受け容れ，自己対象欲求を成熟させたことで，身体的不調を消失させたと考えられる(#18)。このように，A は自己対象欲求を成熟させて，自己の凝集性を高めたことにより，#23 ではついに指導教員への怒りを母親に率直に訴えるという行動を起こすことができた。その結果，A は母親から適切な応答を得ることができた。以上のように，A が母親や指導教員に対して率直に心理的苦痛を話すと適切な応答を得られたことによって，A の置かれている環境は適切な応答性を有していることが判明し，適切な応答性があることによって，A が卒業期に入るまで適応できていたことも推察された。

さらに#21 では次兄との再会に対する予期不安と次兄への怒りの再燃に伴い，指導教員への怒りを再燃させたと思われる。しかし，A は自己の凝集性を備えていたことと，カウンセラーによる共感的応答によってカウンセラーとの間で適切な自己対象体験を得ていたことで，それらの怒りに呑まれることなく卒業研究を積極的に遂行し続けることができた。これらの体験を通して，A はさらに次兄や指導教員に対する怒りを受け容れて自己の凝集性を高めることができ，その結果卒業論文を完成させて(#26)，卒業後の進路を明確にした上で進路を決定することができたと考えられる(#29)。

また，この卒業期の課題達成と並行して，天井を見ていると性的虐待被害経験を思い出して気持ち悪くなるという侵入症状（#1）が#29 で消失したことが語られ，性的虐待被害経験現場である寝室では怖くて寝られないといった恐怖症状(#4)が，#6 で改善された。さらに，#19 から#22 にかけて A が強い予期不安を訴えていた次兄との再会も何とかこなせた(#23)との報告から，自己の凝集性の獲得により，性的虐待被害経験による心理的影響についても一定の軽減が生じたと考えられる。

第２項　カウンセラーの共感的応答の意義と卒業期での支援における留意点

本事例の検討を通して，カウンセラーが A の示す指導教員への怒りに対する共感的応答を一貫して行ったことと，A がその怒りを受け容れることや卒業期の課題を達成することができたこととは関連があると考えられた。また，カウンセラーが一貫して安定的に共感的応答を行い続けたことは，A が次兄への恐怖を自覚し，その恐怖に現実的に対処できたこと，恐怖症状や回避症状などの性的虐待被害経験による心理的影響を軽減できたこととも関連があると推察された。したがって，本事例においてカウンセラーが A に共感的に応答し続けたことは，性的虐待被害経験による心理的影響の軽減にも有効であったと考えられる。つまり，カウンセラーによる共感的応答を受けた A は，カウンセラーとの間で自己対象体験を獲得できたと思われる。この自己対象体験の獲得により，性的虐待被害経験による心理的影響が軽減されたと思われる。さらに，この自己対象体験の獲得により，A は停止していた自己の発達を再開させて，自己の凝集性を高めることができたことで，卒業期の課題を達成することができたと推察される。

自己心理学の共感的応答は，さらに間主観的理論における共感的応答へと発展した(Lichtenberg et.al.,2010; Stolorow et.al., 1987)。カウンセラーの共感的応答は，A が面接の中で示した次兄への恐怖や怒り，母親への不満，及び指導教員への怒りにだけ向けられていたものではない。表明された情動の背景にある様々な情動，例えば，#14 のように，A が母親と同じ職業に就きたい気持ちの背景には A の母親が A の望むような関心を向けてくれない悲しみがあることも汲み取るなど，顕在化されていない情動への共感も含んでいた。また，カウンセラーは，共感した情動をすべて言語化するのではなく，先に例として挙げた#14 のように，傾聴という姿勢のみで共感した内容を伝達するという方法も取り入れていた。このように，共感的応答は，表明された情動を理解することや，共感した情動を言語化して伝達することに留まらず，顕在化していない情動にも思いを馳せて理解すること，さらには，必要に応じて非言語的手法によって共感した内容を伝達することまで含む必要がある。これは，非言語的プロセスを唯一の言語とする母親と乳児の相互交流が生み出す効果と似ている（Beebe & Lachmann, 2002）。このような複雑な様式で構成された共感的応答だからこそ，治療効果を生み出すと考えられる。

A のように性的虐待被害経験による心理的影響により卒業期に入ってから学生生活への適応困難に陥る程度の深刻さを抱える学生の場合には，本事例のように卒業期の課題達成という現実適応を優先した共感的応答による介入が有効であると考えられる。しかし卒業期以前に適応困難を呈するなど性的虐待被害経験による心理的影響がより深刻な学生に対して，本事例で用いた共感的応答による介入が有効であるかについてはさらなる検討が必要である。いずれにせよ，学生相談に従事するカウンセラーは性的虐待被害経験自体の深刻度に囚われず，現在の学生の自己の凝集性の程度と適応度を適切に見極めるとともに，学生生活サイクルの時期を考慮した上で，目の前の学生にとって有効な支援方法を選択することが求められるであろう。

なお，性的虐待被害経験による心理的影響には，情動統制の困難以外にも，自己評価の低下や恋愛を含む対人関係上の問題などが一般的に見られると指摘されており（Herman, 1992; 穂積, 1994, 1999, 2004; Courtois, 2010），A もそれらの影響を抱えている可能性が

ある。例えば，今後 A の人生で新たに問題となる局面，特に「この先恋愛や結婚することができるのか不安である（#5）」と A が訴えているような恋愛での課題が重要となる局面における影響はその１つと考えられる。今後，A にとってこのような恋愛への影響の軽減に時間を要することが課題となるであろう。そうした課題への取り組みに際し，A が本事例の中で体験した性的虐待被害経験による心理的影響の軽減に至るプロセスを活かすことが期待される。

第５節　おわりに

繰り返しになるが，卒業期の学生相談において，学生が卒業を望んでおりかつ実現可能性があると判断される場合には，卒業期の学生相談では基本的に卒業期の課題達成を目指すことが肝要である（山口, 2001; 野口, 2008）。したがって，本事例において卒業を希望していた A に対し，カウンセラーが卒業可能と判断して卒業期の課題達成を目指して支援を行ったことは妥当であったと考えられる。

学生の中には，A のように性的虐待被害経験により卒業期の課題達成に困難を感じ，悩み苦しむ学生が存在すると予想される。こうした学生には専門的支援が必要になることが多い。しかし，学外相談機関は学生にとって敷居が高い上（福田, 2007），学外の相談機関も充実しているとはかぎらない。そうした現状から，性的虐待被害経験をもつ学生の適応と成長のために学生相談に期待される役割は大きい。したがって学生相談に従事するカウンセラーは，一人でも多くの性的虐待被害経験をもつ学生が無事に卒業期の課題達成をできるように，学生相談の要点を十分認識した上で支援を行うことが求められる。

第４章　「自己のための恋愛」を繰り返す女子学生との面接過程

第１節　問題と目的

第１項　養育者からの支配による不適切な自己対象体験

第３章では，来談学生自身の性的虐待被害経験による影響と，それに対する自己対象体験の不足によって，自己の発達が阻害された女子学生への学生相談における支援のあり方について検討した。

養育者との間で適切な自己対象体験ができないパターンとしては，養育者が子どもに対して太古的自己対象欲求を向けて支配する場合がある。例えば，養育者が太古的な理想化自己対象欲求を向けて，子どもに養育者の期待に沿う人生や生活をすることを強いるなどがある。こうした支配的な養育者による関わりは，子どもに不適切な自己対象体験を形成させるとともに，子ども自身の自己対象欲求が満たされないため，子どもの自己の発達が阻害されて，自己の凝集性を弱らせることにつながりやすい。

第２項　中間期の特徴と課題

学部２年から３年の時期を，鶴田（2001）が提唱した学生生活サイクルでは,「中間期」と呼ぶ。中間期は，学生生活への初期の適応がひと段落し，生活上の変化が比較的ゆるやかな時期であり，将来に向けての選択が次第に近づいてくる時期でもある（鶴田，2010）。その中で学生は時間をかけて自分を見つめることができ，学部１年生の１年間で作り上げた適応を再構築するような体験をすることが多い。対人関係の領域では，対人関係の深まりと拡がりが課題となる（鶴田，2010）。したがって，中間期の学生に対する学生相談では，学生が様々な体験の深まりと拡がりを促進させることにより，自分を見つめて適応の再構築を手助けすることが求められると言える。

第３項　本研究の目的

本研究の目的は，交際相手から別れを告げられたことを契機に来談した女子学生との約３年間にわたる面接過程を通して,「自己のための恋愛」を示す女子学生がいかに凝集的な自己を獲得するか，という支援のあり方について検討することである。

具体的には，カウンセラーが学生の太古的自己対象欲求が満たされないことによる不全感に共感的な応答したことが，学生の自己対象欲求の成熟による自己の凝集化の獲得といった自己の発達をどのように促したか，また,「自己のための恋愛」から「アイデンティティのための恋愛」への発達をどのように促したかについて検討することを目的とした。

第２節　事例の概要

クライエントから事例公表の同意を得ているが，事例記述については，プライバシーに配慮して趣意を損なわぬ程度に事例記述に若干の変更を加えている。

第１項　クライエント

B，大学１年生，18 歳，女性。

第２項　主訴

交際相手から一方的に別れを告げられて，心理的に混乱している。

第３項　臨床像

足を組んで余裕のある態度にも見えるが，そわそわと落ち着きがなく，頻繁に髪を掻き揚げながら斜に構えて話すため，落ち着きのない印象を受ける。笑い声は面接室に響きわたるほど大きく，緊張感が高いように感じた。

第４項　家族構成

母親(40 代,パート職員)，姉(20 代,会社員)，及び B の３人家族である。B が小学校低学年時に，父親(40 代，会社員)による母親へのドメスティック・バイオレンスが原因で，母親が B と姉を連れて家を出て以来，父親とは別居している。母親には別居以前から交際相手が存在する。

第５項　生育歴

幼少期より両親の仲が悪く，父親から母親への身体的暴力が度々あった。B は，母親や姉との関係が悪く,「家の手伝いをしない」,「家に帰ってくるのが遅い」など，事あるごとに母親と姉の両方から責められて，窮屈な思いをしている。

大学では授業に欠かさず出席し, 成績もほぼすべての科目で「優」の成績を修めていた。しかし，入学後にできた友人らとは放課後や休みの日に一緒に過ごすことはなく，その場限りの浅い付き合いに留めており，できるだけ明るく接することで，悩んでいることを友人らに気づかれないように警戒しながら接触していた。一方，ソーシャル・ネットワーキング・サービス（以下，SNS とする）上で知り合った学外の同世代の友人らには，悩みを相談するなど積極的に交流していた。

第６項　恋愛歴

B が初めて男性と交際したのは中学生時であった。以降，数人の男性と交際した経験をもち，交際相手は，通っている学校で知り合った同年代の男性であった。これまでの交際では，すべて男性から交際を申し込まれて，恋愛感情をもたないまま交際を開始し，交際中も恋愛感情が芽生えることなく交際を継続してきた。交際中に別の男性から交際を申し込まれると，それをきっかけに B が交際相手に別れを告げて，関係を終了させて，次の交際を始めるというパターンを繰り返していた。

第７項　見立て

B は，幼少期から自己対象欲求を適切に満たすための共感的応答を受ける体験が不足していたと推察される。そのため，自己対象欲求の発達が阻害されて，自己の凝集性の低さを抱えていると考えられた。そうした自己の凝集性の低さを，２次的構造である学業面での優秀さや友人関係の使い分けによって補うことで，学生生活に適応できていると推察された。

B にとって今回交際していた相手から一方的に別れを告げられた体験は，A の自己の凝集性を脅かすものであったことから，B の恋愛は「自己のための恋愛」であったと考えられた。しかし，B の太古的自己対象欲求が満たされないことによる不全感を共感してもらう体験を積み重ねると，B の自己が凝集化され，「アイデンティティのための恋愛」を享受できるようになると推察された。以上のことから，カウンセリングにおいて，B の主訴に沿った形で，カウンセラーが B に共感的応答をする，特に恋愛関係における太古的自己対象欲求が満たされないことによる不全感に共感するといった自己心理学的介入を行なうことが適切であると判断した。

第８項　面接構造

在籍学生の学生生活支援の一環として，大学内に設置されている学生相談室にて面接を実施した。個別相談の利用は予約制となっており，在籍学生及び保護者であれば誰でも無料で利用可能である。夏休みなどの休暇期間も通常どおりに面接を実施する体制をとっている。なお，B に対しては，週 1 回 50 分のカウンセリングを継続実施し，休暇期間中も面接を実施した。

第３節　面接経過

面接経過を３期に分けて報告する。「　」は B，＜　＞は筆者（以下，Co），『　』はその他の人物の発言である。

第１項　第１期：空回りの交際を繰り返す時期（X 年 12 月～X＋１年 10 月：#１～#34）

#１において，「幼馴染の男性 H から『自由になりたい。もう好きじゃない』と交際１週間後に振られたことで気持ちが混乱して死にたい気分になり，食欲も落ちた」と悲痛な表情で訴えた。何もかも嫌になり，何事にも意欲が低下したとのことであった。H は中学生のときからの友人であり，２ヶ月前に１年ぶりに再会したときに告白された後，何度も告白され続けた。当時，B は別の男性と交際していたが，その男性の浮気が発覚したので別れたいと思っていたこともあり，交際相手に別れを告げて，特に H のことを好きではなかったが，H の申し入れを受け入れた。B は H から振られた原因として，H に言われたわけではないが，H に好意がなかったにも関わらず，H が B に好意を抱いていることに慢心して，交際後に四六時中一緒に過ごすことを求めて，一緒にいるときにはずっと身体を密着させるなどして甘えすぎたことにあると考えていることを明かした。

ちなみに，B は，これまでの交際相手に対して，一緒に過ごすことを自分から求めたり，身体を密着させたりしたことがないとのことであった。さらに，今まで数人の男性と交際したことがあるが，すべて男性から交際を申し込まれて，恋愛感情がないまま交際をしていた。そして，交際中に別の男性から交際を申し込まれると，その男性と交際するために，それまで交際していた相手に別れを告げてきた。こうしたことから，これまで交際相手から別れを告げられた経験がなかったので，H から別れを告げられたことに心理的打撃が大きかったとのことであった。

Co は，好きでもない相手と交際することや，交際相手に急速に親密になろうとするあり

方の背景に何か重大な心理的課題を抱えているのだろうと推測した。そこで，解決の糸口を見つけたいと思い，＜もう少し交際相手と心理的境界をもてるようにしたほうがいいかもしれませんね＞と軽く指摘すると，「そうですかね」と不自然に大笑いし，全く同意していないようであった。Co は，この反応について，B が自らの未達成の課題を指摘されたことに怒りを感じていることと，自分自身に問題はないと思いたいという B の太古的自己対象欲求のあらわれであると考えた。そこで，Co は B の自己を弱らせることのないように配慮をする必要性を感じたので，B の主訴の解決に焦点を合わせて継続面接を行うことを提案したところ，B は即座に了解した。

その後，「H に未練があったが(#２)」，「もうどうでもよくなった(#３)，彼氏をつくりたい(#３)」と態度を一変させて表情も次第に明るくさせた。あまりの気持ちの変わりように Co は戸惑い，＜え，そうなの？＞と驚くも，B は Co の反応を全く気にしていない様子であった。#４にて Co が交際相手に求める条件を尋ねたところ，「自分の話を聞いてくれる人。見た目も大事」と即答した。この反応から，Co は B の自己対象欲求の未熟さを感じた。さらに，「交際すると別れがあるので怖い」と交際相手を失うことで自分自身が揺らいでしまう恐怖を滲ませた。また，B は交際以外の人間関係についても触れ，「大学では本音を話し合うような密な人間関係がないのでつまらない」と不満そうにした。Co が入学前までの友人関係の状況について尋ねると，「小学校でいじめを受けたあと，集団に入らず１人で過ごすようになった。大学では一応４人グループに入っているけど，仲はあまり良くない」と表情を歪ませた。この発言から，このまま面接を継続すれば，主訴の解決だけに留まらず，主訴の背景にある心理的課題を扱うことができるかもしれないという期待が Co の頭をよぎった。しかし，#５では大学入学してから自分自身の心理的成長を感じられないことへの不満や同性の友人への不信感を話すも，「もう大丈夫」と継続面接の終了を求めた(#５)。Co は主訴の背景にある心理的課題を扱うことが B の自己と恋愛の発達を促すことにつながると考えたことから，そうした課題を扱うことなく面接を終えるのを残念に思った。しかし B の意思を尊重することにした。そして，＜何かあればいつでも相談に来てくださいね＞と伝えて，B の申し出を了承した。

７ヶ月後，B は SNS で知り合って２ヶ月交際した社会人男性 I から突然別れを告げられて，前回と同じぐらい抑うつ的になったので相談したいとのことで再来談する(#６)。Co は，B が H のときと似たような交際をしてうまくいかずに抑うつ的になって困っているのではないかと心配していたため，B が再来談したことで安心した。B によれば，SNS 上に別の女性と２人で食事したことについての I の書き込みを見つけ，そのことを B に事前報告しなかったことについて I を責めたところ，『縛られるのは嫌だから別れよう』と言われて振られたとのことであった。B は「納得できない」と苛立ちをあらわにした。Co が＜B としては当然と思っていた指摘をしたのに，別れを切り出されたので納得できないですよね＞と共感すると，大きくうなずいた。

Co は交際相手に依存せざるを得ないほど凝集性の弱い自己を強固なものにするという課題に粘り強く付き合っていくことが B にとって良いのではないかと考えた。そこで，Co が面接の再開を提案すると，B は「よろしくお願いします」と機嫌よく頭を下げた。

以降，Co は，B の太古的自己対象欲求が満たされない不全感に共感することで，自己の

凝集性を強化できるように対応し続けた。例えば，#7において，BがIから振られたことについて,「隠し事をした理由を聞いただけで振られるのはおかしい」といかにも不満そうに話した。それに対し，Coは，IがBの望んでいることと少しでも異なることを行なうのを許さないBには，Iから別れを告げられることは全く納得できないだろうと理解した上で，＜おかしいですよね＞とBの気持ちに寄り添って応答した。また，この時期のBは，#1でCoがBの心理的課題を指摘したときのように,少しでもBの感じ方にCoが共感していない言動をすると，不自然に大笑いをする反応を示し，一貫して同意しか求めない態度を示していたので，CoはBの自己対象欲求が太古的なものであると判断した。

#10にて，Bは，バイト先の社員数名が共同で起業をするために退職することを，残留する社員から教えてもらったことについて話した。Bは，退職者の中で特にBが信頼を置いて色々と相談していたJ（40代男性）から，退職することを事前に教えてもらえなかったことに大きなショックを受けていた。

また,「Bの夢であった職種Pに就くことを，人気が高いので就きにくいという理由で母親から反対されたので，仕方がないから諦めた」と落ち込んだ様子で話し,「家族がストレス。つらい」と涙を流した。そして，母親と姉から，帰りが遅くならないようにとか，家の手伝いをもっとするようになど注意をされて，生活態度を改めるように毎日のように責められることから,「母と姉が嫌いなので，卒業後に家を離れたい」と語った。

Bは3年生に進級して30代女性の指導教員のゼミに所属した（#12)。「指導教員から相当ダメな子だと思われている気がする」と語ったので，Coがその根拠を尋ねた。すると，Bは次のように語った。ゼミの途中であったが帰路のバスに間に合わないので，指導教員に挨拶をして帰ろうとしていた。ところが，まさに挨拶をしようとした瞬間，指導教員から先に『失礼しますというものですよ』と怒られてしまったため，挨拶もできない学生だと否定的に評価されていると思って落ち込んだとのことであった。それ以外で特に否定的評価を受けているわけではなかったことから，Coは，指導教員からの些細な注意だけで自己否定を強めるBの様子から，Bの自己の凝集性の低さを感じた。

「Q県に進学した出身高校が同じ男性の先輩Kから遊ぼうと言われているがどうすればいいか」とCoに尋ねる(#13)。Coが尋ねた理由を確認すると，ある友人が『男を次々変えている』と別の友人を非難していたので，自分も同じように思われているのではないかと心配とのことであった。指導教員のときと同様の悲観的思考であるが，自分自身に目を向けることができるほどBの自己の凝集性が高まりつつあると思いつつ，＜なるほどね＞と言うと，BはCoに自分自身の気持ちを理解してもらったことに満足しているかのように，深くうなずいた。

続いてBは自分から両親に関して次のような話をした(#14)。Bが幼稚園児だったときに，父親は母親に暴力を振るうとともに，母親に常に家にいることも強制していた。その状況の中で，母親は父親以外の男性と交際し始めた。当時，母親は度々，Bと一緒に喫茶店に行っては携帯電話で交際相手と電話をしており，それがとても嫌だったとのことである。また，Bがこの電話の相手が母親の交際相手だとわかったのは，小学校高学年のときであったと語った。

Bが小学校低学年の時に母親はBと姉を連れて家を出て父親と別居した。父親と別居し

てからは，食事中でも交際相手から電話がかかってきたら，交際相手が怒るのを恐れて母親は電話に出る。現在も母親は同じ男性と交際を続けている。「母は自由に夜中でも出歩いているくせに，B が夜中出歩くことを禁止してくる。勝手すぎる」と泣き，「大学卒業したら母親から離れるのが夢」と話した。この母親との間の体験は，これまでも B が話していた交際相手や指導教員にまつわる傷つき体験の痛みと比べのものにならないほど，激しい心の痛みであることが Co に伝わってきた。そこで Co は，B の自己の凝集性の弱さは，母親の共感不全による太古的自己対象欲求の満たされなさが原因であるのではないかと推察した上で，B の心の痛みを受けとめて＜そうなんですね＞と共感的に応答した。すると，B は安心した表情を示した。

#15 での B は「母に職種 P を諦めたことをいつ言おうか迷っている」と語った。さらに，「できれば就職と同時に家を出たいが，母は B にそばにいてほしそうにしている。家を出たいと母に言えば，もめそう。考えただけで憂うつ」と嘆いた。Co は，B にとって母親の意向が非常に重要な判断基準であることを感じつつ＜憂うつですね＞と応答した。

#16 にて，B が休暇期間ぐらいは羽目を外してもいいだろうと判断して，#16 の前日に小遣いを多めに使った後，母親に報告すると，母親から叱られたことをくやしそうに訴えた（日常的に母親が B の小遣いの使い道を細かく管理していた）。そして「父のところに行きたい」と語った。B は父親に年に数回会っており，母親と比べると B の話に耳を傾けてくれて，成績が優秀であることも評価してくれているとのことであった。しかし Co は，父親が母親に DV をしていたと聞いていたので，父親との関係が安全なのか気になり，＜お父さんは B に対して暴力を振るわなかったのですか？＞と尋ねると，B は「母や姉と一緒にいるときに父が皿や扇風機を投げつけてきたことはあるけど，手を挙げられたことはない」と平然と言った。Co は，B が自己を安定させるために，父親のことを美化する必要があるのだろうと思うと同時に，このままでは他者と安全な関係を築くのは難しいのではないかと不安になった。そこで，Co との関係が，B にとって安全な関係の体験の 1 つとなり，その体験をもとに生活においても他者と安全な関係を構築できるようになることを願いつつ，＜お母さんとお父さんにどのように頼るか，難しいですね＞と B の心理的葛藤に共感しながら応答すると，B は静かにうなずいた。

B が「職種 P に未練が少し残っているけど，母親に止められただけではなく，自分でも職種 P に就くための準備をすることに負担を感じるようになってきたので，もう目指す気はなくなった」と話した(#18)。そこで，以前から B が少し興味を示していた職種 R への就職を検討することを Co が提案すると(#18)，すぐに職種 R の就職対策講座を申し込み，受講し始めた(#19)。Co は B が主体的に自分自身の進路を検討するようになったことに安心する一方，Co が提案した職種 R への変更をすぐに F が選んだことから，F の Co への依存が強まっているように感じ，それは B が Co に対して自己対象転移を向けているあらわれであると理解した。

最近，母親と姉の仲が悪化していること，そのことで母親が姉を頼ることを諦めて，B が卒業後に家を出ることを引き止めて経済的に B に頼ろうとするのではないかと思い，心配していることを話した(#20)。「母に職種 R に変更したことを報告すると『あっそう』とそっけなかった」と残念そうにする。Co にも B の残念な気持ちと淋しさがひしひしと伝

わってきた。B は母親から卒業後も一緒に暮らそうと言われて困っていたが(#21)，B が思い切って母親に卒業後に一人暮らしすることを望んでいることを話したところ，同意を得ることができたと嬉しそうに話した(#23)。それを聴き，Co は，B の自分自身の生活を大切にしようとする意識が強まっていると感じた。

＃22 では SNS で知り合った男性 L に好意をもったと話した。B が他の女性と交流していることに嫉妬していることを L に伝えると『嫉妬してくれて嬉しい』と言われ(＃23)，『B を特別な存在と思っている』とも言われて嬉しかったと話した(#27)。しかし，その後，L と何度かデートしたのちに，他の女性への嫉妬を再び L に伝えると，『もう会うのをやめようと思っていた』と別れを告げられたとのことであった。ただこれまでのような話し合いのないままの別れ方と違い，別れを告げられたときに B と話し合うことができた。その話し合いのときに，L から，L 自身の目標実現のための時間の確保を優先したいので B の望みどおりに一緒に過ごす時間を取れないことを謝られた。B は L に B の淋しさを理解してもらえたと感じたので，納得して別れを受け入れることができたと満足した様子であった（#33)。

次の＃34 には気持ちを切り替えて失恋に伴う落胆は全く見せず，改めて職種 R を目指す強い覚悟を示した。

Co は B がこれまで自己の立て直しのために次の恋愛へと進んでいたありかたから，自己の人生設計という生産的な方向へと進むようになったのは，自己のまとまりが強固になりつつある証拠と捉えた。そこで，B が職種 R に就くために努力していることを嬉々として話したのに対し，Co は B が自分自身を誇らしく思っている気持ちに共感しながら，＜頑張っているね＞と応答した。

第２項　第２期：手ごたえのある恋愛関係を体験する時期（X＋１年９月～X＋３年６月:#35～＃68）

高校の同級生の男性 M が今の交際相手と別れて B と交際したいと言ってきたので，しばらく迷った結果(#35)，交際し始めた(#37)。これまでであれば交際開始時の B の表情はいつも明るかったが，今回は浮かない表情を見せているので，Co は不思議に思いつつ黙っていると，「時々理由もなく死にたい気分になる」とつぶやいた。これまでならば，B が死にたい気分になったと言うのは恋愛関係が破綻した時だったので，今回のように交際開始時に B が死にたい気分になることに Co は違和感を覚えた。＜死にたい気分になる原因として思いつくことは何ですか？＞と尋ねたところ，B は，母親からの小言が多くなり，言い合うことが増えて，気分が沈んでいることを挙げた。Co は，B の自己の凝集性が高まったことで，母親に受け止めてもらえないことによる抑うつ感が恋愛によって紛らわせなくなっているのだろうと推測した。続いて B は「(心理的に）健康になるための方法を知りたい」と Co に答えを示すことを数回繰り返し求めた。それに対し Co は，B が自己の凝集性を高めたいのではないかと考え，＜B の希望を大切にして現在の生活を送るように努めると良いのではないでしょうか＞とゆっくりした口調で提案すると，「効果があるかも」と B は目を輝かせて言った(#40,#41)。また，「もっと自信をもてるようになりたい」と言い(#42)，B の努力が実り，職種 R に就く可能性が高まっているにも関わらず(#43)，職種 R

に就ける自信の無さから他の職種への就職活動も並行させた(#44,#45)。そんな中，職種 R の就職準備講座で知り合った女子学生 1 人と悩みを相談し合うほど親密になり，「やっと良い人間関係がつくれた」と喜んだ(#45)。Co も，カウンセリングでの Co との関係の体験によって B の自己の凝集性が強固になったことで，同性の他者との有効な友人関係を形成できるようになったと思い，＜良かったですね＞と共感した。一方，職種 R の準備に力が入らなくなったと嘆いた。その理由として，第一志望大学の入学試験時に，予想以上に受験者が多かったこともあって不合格となったことへの不満が未だにあることを語った。そこで Co が，受験者が多かったことが B の不合格の要因になっていたかは定かではないが，その可能性はないとは言えないと考え，職種 R を目指す人数が年によって極端に増減がないという近年の動向を踏まえて，＜大学受験とは違って，予想をはるかに超えた人数の人が職種 R に挑戦することは通常ないと思うのですが＞と指摘すると，B はすぐに「そうかもしれない」と納得した(#46)。

就職活動にまつわる話題と並行して，B は交際していた M と大喧嘩をして，死にたい気分になったと嘆き(#44)，「M を煽って，わざと M に B を振らせた」と自暴自棄的な行動に及んだことを告白した(#47)。Co は B が恋愛関係における統制力を高めている点では自己の凝集性が強固になっている証だと思う反面，自暴自棄的に関係を破壊してしまう自己のもろさも依然残っていると判断し，引き続き，B の情動の背景を理解しながら共感することで良好な治療関係を維持して B の自己を支え続ける必要性を強く感じた。

#48 と#49 では，他のゼミ生にやさしい指導教員が B にだけ厳しいことに落胆するとともに，B に対して相変わらず口うるさく帰宅時間が遅いことや家事を手伝わないことについて注意してくる母親への怒りを示した。

また，新たに好意を寄せた SNS 上で知り合った男性 N の SNS 上の書き込みを覗いたところ，N が他の女性にも言い寄っていることがわかり，そのような（気の多い）男性に魅力を感じる B 自身に嫌気が差し，「本気で死にたくなった。寂しさをなくしたい，自分ひとりで何でもできるようになりたい」と嘆き，死にたくなる気持ちは他者から見捨てられる寂しさから生じていることを初めて語った。Co は＜寂しいですよね＞と B が感じている寂しさに共感した上で，その寂しさを抱える力をもってほしいと願いながら，＜寂しさを全くなくすことは難しいでしょう。淋しいときに自分で自分を慰める方法をもっておくとよいと思います。また，卒業して就職すれば，その分自信が高まるので，少し人に頼りたくなる気持ちも減るかと思います＞と自立への希望をもち，行動することを勧めると「そうですよね」と B の表情が明るくなった(#50)。

そんな中，バイト先の元同僚の男性 J から久々に連絡があり，何度か遊びに誘われて会っているうちに，『女性として魅力的』と言われたと喜ぶ。B は J からの誘いを，B の高い仕事能力を見込まれての J の会社への就職の勧誘であると理解していた。「B が夜中は無理だと伝えているにも関わらず，夜中に 2 人きりで会いたいと毎日のようにメールをしてくる。引き抜きを考えているにしても焦りすぎだと思う」と暢気に語った。Co は，J が夜中に 2 人きりで会いたいと要望しているのはデートの誘いであると考えたので，B の鈍感さに苛立ちつつ，＜それは引き抜きではなく，口説かれているのではないでしょうか＞と厳しい口調で指摘した。すると B はびっくりした表情をして驚き，「J は最近再婚したばか

りだし,B と同じ年齢の娘がいるのでそんなことは考えにくい」と笑って即座に否定した。Co は先ほどの口調は厳しすぎたと反省し，今度は B を過度に不安にさせないように配慮しながら，＜そうですか。でも十分気をつけてくださいね＞とやんわり警告した(#51)。B は J と高校生のころから交流があり，その当時から J の教養の豊かさと知性の高さに強い憧れを抱いており，J に恋愛感情を持ち続けていたことを語る(#52)。その後，B は J から好意を向けられていることを認め，週に 1 回の頻度で，B は J と深夜に 2 人で食事をし，「高校生の時は好意を示しても無視されていたのに,今さらなぜ興味をもたれるのか不明」と憤慨しつつ嬉しそうにしていた(#53)。「J から『愛人になってほしい』と言われた。意味がわからなくて悩んでいる」と悪い気がしないといった雰囲気で暢気に言うので，Co は怒りを抑えながら淡々と＜それは肉体関係を持とうということだと思います＞と指摘した。すると B は，ハッとした表情をしたが，「J は高血圧なのでセックスできないと言っている」と憮然とした態度で強く反論した。Co は苛立ちを滲ませつつ＜J は肉体関係のないプラトニックな関係を求めているということですね＞と釘を刺すと「そんな感じ」とあっけらかんとしていた。その一方で,「愛人ということは二番手ということなので，それがくやしい」と話した(#54)。Co は，B が J を美化することで太古的自己対象欲求を満たそうとしているとわかったが, J を美化することで J に恋焦がれる気持ちになっていることに Co は少し共感しづらさを感じていた。そこで，Co は可能な範囲で，B の恋愛感情に共感するように努め続けた。

B は，J が二度結婚していることが理解できないと言いつつ,「私は結婚するつもりはない」と断言した(#55)。J からいつものように口説かれたので，B が「本気になったらつらくなるのがわかっているのでセーブしている」と J に告げると『俺もだ』と言われたと惚気た(#56)。J は『本気で B を気に入っている』と言うが，そうではない気がすると警戒心を示した(#57)。Co は，J との時間は B にとって大切な時間であろうと思ったので，B に冷静になるように諭したい気持ちを何とか抑えて，B が J との交際に関して楽しそうに話すことに可能な限り共感して耳を傾け続けた。しかし，ほどなくして「J からの連絡が減った。気持ちが冷めたのかな」と不安を示すようになった(#59)。Co は，J が B への関心をなくしているので，B が J にもて遊ばれる危険性は減ったと考えて安心した。しかし，それと同時に，J との接触が減って，B が淋しく感じていることを思うと，胸が痛んだ。

これまで B は J に会うたびに卒業研究の相談に乗ってもらっていた。そこで，B が J に卒業論文のテーマを指導教員に許可してもらった喜びをメールで報告すると,『よかったね』と返信が来たが, それ以外の連絡がないとのことで,「J の気持ちが冷めたんだと思う」と落ち込んだ(#61)。それに対し，Co はいたたまれない気持ちになり，＜冷めたのかな･･･＞と言いながら，B の寂しさに共感した。以前の B であれば，交際相手との関係が悪化すると，すぐに「死にたい気分になった」と訴えていたが，今回はそうではなく,「淋しい。連絡がほしい」と暗い表情で繰り返し自らの望みを主張した。この発言から，Co は B が以前よりも淋しさを抱える力が育ってきているので，望みを主張できるようになったのではないかと考えて,「連絡あるといいね」と共感的に応答した。しかし，結局その後も J から連絡がなく(#62)，待つことに疲れたので B からメールで別れることを伝えようかと思った矢先(#63)，J から連絡があり久々に会ったとのことであった(#64)。「J に B 以外にも

交際相手がいるか尋ねたら,『B 以外の交際相手はいない』とはっきり言われたけど，安心できない」と話した。その後，J からの誘いを受けて会う約束をしては，直前に用事が入ったとの理由で J からキャンセルされることが数回繰り返されたことから(＃65-67)，B は J との交際継続への希望を失くし,「もう J の連絡を待たなくなった」と寂しそうに話した(#68)。なお，J との交際中，B は就職活動に力を入れず,「このまま（卒業後も）バイトでもいいかも」(#65)と将来に対して投げやりな姿勢が見られたが，J からの連絡が途絶えるようになってからは就職活動や卒業論文作成に再び精を出すようになった(#68)。Co は B が J を失ったことによる寂しさを抱えることができたこと，また自暴自棄な行動を起こさずに，就職活動を再開させるといった建設的な方向に動き出したことから，ずいぶん B の自己の凝集性が高まったものだと感心した。

第３項　第３期:互いを認め合う恋愛が芽生える時期（X＋３年６月～X＋４年３月:#69-＃91）

SNS で知り合った１歳下の男性 O が色白で知的（#69）と，まさに B の好みのタイプで気になっており,「O からも会いたいと言われているが，会えば嫌われるのではないかと不安に思っている」と話した(#70)。メールのやりとりで O の希望に合わせてばかりになり不満だと言うので，＜B の希望を今までよりも１割増やして伝えてみるように意識してみてはどうですか？＞と提案すると,「そうしてみる」と受け入れた。そして早速実行し，O と一緒にしたい活動を提案したら賛同してもらえたと喜んだ(#71)。

その後，B は O の SNS 上の女性の交友人数がかなり多いことから，相手にされるわけがないと思い，しばらく O に連絡せずにいた。しかし O と親しくなりたいという気持ちを諦められず，勇気を出して O にメールを送った。すると，すぐに O から返事がきたことで，O に嫌われていないとわかって安心したと嬉しそうに話した(#74)。

初めて O と会う約束をして(#75)，会った後，SNS 上で B から O に「友達になれたかな？」と確認したら『B のことは良い人だと思っている』とはぐらかされたと落胆した(#77)。しかしその後,「O からスカイプで『本当に楽しかったですか？』と何度も訊かれた上,『O も死にたい気持ちになることがある』と素の姿を見せてくれたので，以前よりも O との距離が縮まったと感じた。嬉しい」と表情を明るくさせた(#78)。Co はこれまでの B のように性急に恋愛対象と親密になろうとするのではなく，相手の気持ちを尊重しつつ関係を深めていこうとしている B の姿をほほえましく思いながら，＜O との距離が縮まって良かったですね＞と O に想いを少しずつ受け入れてもらっている B の嬉しさを感じながら，聴いていた。

しかし，すべて順調というわけではないようで，#80 では，今でも「わけもなく，急に死にたいという気持ちになる」と言った。続けて「でも，前みたいに何かあればすぐに死ねばいいんだと思えなくなっているのがショック」と語った。これらの発言から，Co は B の思い通りにいかない現実に直面することによって自己が揺らぐことはあっても，今までのように自己の凝集性が危うくなることはなくなっていると感じた。さらに，このように自己の凝集性が高まったおかげで，B は O との関係を丁寧に深めることができているのではないかと考えた。その上で，＜死ねばいいと思えなくなったのは，それはそれでつらい

ですよね＞と共感すると，B は大きくうなずいた。

そして，B は O とデートしたことを喜んだ後（#81），最近，死にたい気持ちが収まっていることを報告した(#82)。また，O から一緒に趣味の活動を始めようと誘われ，「O に認められた。嬉しい」と話した(#84)。

#86 にて，職種 R の最終面接で手ごたえがあったことに安心した。その後，SNS 上で新たに知り合った同年代の女性２人と頻繁に交流するようになるとともに，「O が卒論の完成を楽しみにしてくれているので頑張ろうという気になっている」と喜んだ(#87)。

#88 において，職種 R の内定を得たことを母親に報告したところ，『自分がいろいろと進路について条件を出したので，B を我慢させていたのではないかと心配していた』と言われたことを他人事のように報告した。Co がこの母親の発言に対する感想を尋ねると，B は「進路選択にほとんど影響なかった」とあっさり回答した。

その後，O とのデートの報告を楽しそうにする(#89)も，面接への動機づけが低下し，無断キャンセルを１回した後しばらく来談しなかった。Co から予約日の１週間後に連絡を１度入れてみたが，反応はなかった。#89 では Co との関係がなくてもやっていけるほど B の自己の凝集性も強固になってきているように感じていたので，来談が途絶えたこともその現われではないかと考えていた。すると２か月経ってから突然来談し，卒業論文を提出した報告とともに，指導教員に対する不満を訴えた(#90)。「もっと早く（相談室に）来たかった。卒論に追われて来れなかった」と興奮気味に訴えた。卒業論文で扱う題材に理解を示さない指導教員に対して納得ができず，指導教員に心を閉ざして他人行儀な振る舞いを続けていると，指導教員から『愛想がない』とか『感情的になって教員と学生の関係を踏み外さないように』とか言われて嫌気が差して，適当に「はい，はい」と返事をしたら，『“はい，はい” ではわからない！』ときつく怒られたことを嘆いた。また，B が卒業論文を提出した後でゼミの先輩の修士論文作成を手伝うために研究室に行くと，指導教員から『やる気がないなら帰って』とあしらわれたとのことであった。B はその指導教員の応対に怒りを感じ，その出来事の後はゼミに顔を出していないことを興奮して話した。ゼミを休み始めてしばらく経ったときに，これまで悪い態度を採ってきたことを反省したので，同じゼミの仲間にせかされたのをきっかけに謝罪するメールを指導教員に送ったが，返信メールで『メールもいらない』と関わることを拒否されたとのことであった。「このまま指導教員に会わずに卒業してもいいが，指導教員のすべてが嫌いなわけじゃないので，どうすればいいかわからない。友人に手紙をたくそうかと考えている。ただ今回のことでは全く死にたいとは思わなかった」と話した(#90)。この指導教員との間で起こった出来事から，Co は B には自己対象欲求のさらなる成熟が必要であると感じた。と同時に，指導教員から非共感的な対応を受けたとしても，今の B であれば，自己の凝集性をさほど失うことはないと判断し，B の判断に委ねることにした。

最終回(#91)では，B は卒業式終了後に指導教員に関係の修復を申し出たが，『B の態度が悪いので，指導するのを途中から諦めました。あなたにはまだ怒っています』と言われ，「結局，関係を修復できなかった。悲しい」と嘆いた(#91)。それに対し，Co は＜残念でしたね＞と B の悲しみに共感した。

その後，B は卒業半年後に Co を訪ねてきた。「職場で同僚の先輩たちからかわいがって

もらって，O とも仲良くしている。今が一番幸せ」と明るい表情で語った。

第４節　考察

第１項　B の自己と恋愛関係における変化

B は，学生相談室に来談する以前において，学業で優秀な成績を修めることや友人関係の使い分けといった２次的構造を形成できていたことにより,学生生活に適応できていた。しかし，交際開始から１週間という短期間で H から別れを告げられたことが，B の自己の凝集性を脅かし，学生相談室での支援を要したと考えられる。

B は，それまでの交際経験では，交際を申し込んできた相手に対して恋愛感情をさほど抱かないまま交際を始めていた。恋愛歴に記したように，交際中に別の者から交際を申し込まれると，交際相手に別れを告げて，新たな交際を始めるというパターンを繰り返していた。H との交際以前に交際していた交際相手らは，B の自己対象欲求を満たすには不十分であったため，このような恋愛関係のパターンを繰り返していたと考えられる。しかし H に対しては H が B の一部であるかのような関係を H との間で形成することを求めたことから，H には太古的自己対象機能を求めたと推察される。よって H から振られたことは B の自己の大きな揺らぎを生み出したと考えられる。B の生育歴からは，大学入学以前から自己の凝集性の低さがあったと推察される。それに加えて，希望していた大学に進学できなかったことでさらに自己の凝集性が低下したので，自己の凝集性獲得の必要性が高まったと考えられる。そこで B は，以前からの自己対象であった H に対し，太古的自己対象機能を求めたと推察される。つまり，B の H との恋愛関係は,太古的な自己対象欲求を満たして凝集的な自己を獲得しようとする「自己のための恋愛」であったと推察される。こうして太古的自己対象機能として求めた H を失い，自己が断片化した B は，凝集的な自己の獲得を求めて学生相談室に来談したと考えられる。

面接を開始して次第に B は自己の凝集性を高めた。そして５回目の面接において，B はある程度，自己が凝集化されたことに満足し，面接の終了を求め，Co も受け入れた。しかし，中断７ヶ月後，#６にあるように，次に交際した I により太古的自己対象欲求が満たされなくなったことで再び自己の凝集性が不安定となり，来談した。B は I に対して H と同じように太古的自己対象機能を求めていた。しかし，I との間では２ヶ月と，H との交際期間よりも長い期間，関係を継続させることができた。これは，H との交際時よりも B の自己が凝集化していたことを示していると考えられる。

また，B は#５までと異なり，B の発達欲求の阻害され始めた幼少期のことも語るようになった。具体的には幼少期から現在にわたって体験してきた母親による B の気持ちを軽視した対応にまつわる淋しさや悲しみを語るようになった（#10，#14，及び#16）。この変化は，現在の自己の凝集性の低さのおおもとの原因である，母親との間での太古的自己対象欲求の不全感を扱うことができるほど自己の凝集性が高まったことの表れであると考えられた。

その後，B は母親からの自立を求める発言をするようになった(#18 及び#23)。これは，B の自己対象欲求の成熟の兆しであると考えられる。

第１期の終盤の#33 において，K と別れる過程において，B の主張を押し付けるのでは

なく，K の言い分も聞く姿勢を示した。これは，B の自己対象欲求が，交際相手を自分自身と別個の存在として認識できるほど成熟したことの表れと考えられる。

第２期の#37 において，B は，自身の心理的健康への関心を高めるようになった。M との交際が成就したにも関わらず，B の死にたい気分が収まらなかったことから考えると，この心理的健康への関心の高まりは，B が自己の凝集性の実現を交際相手に求めるのではなく，自らの力で自己の凝集性を獲得できるようになることを求め始めた証と考えられる。また，#37 から B は，母親による共感不全が自分自身の心理的健康さを獲得することができない大きな原因の１つであるとの洞察を示した。これは根本的な自分自身の課題に向き合うことができるほどに自己の凝集性が強固となったことの表れと推察される。

さらに，交際相手の M に対しては，#47 で語ったように，衝動性の統制困難さを示しつつも，自己の揺らぎの兆候を示すことはなかったことや，N に恋愛感情を持ったことで，恋愛対象に太古的鏡映自己対象機能を求めることへの嫌悪感とともに自立欲求を示した。これはさらに自己の凝集性が高まったことの表れと考えられた。

その後，B は高校生の時から憧れていた J から交際を申し込まれた（#51）。B は J との交際を開始するも，性関係は拒否した（#54）。また，J との交際は，約４ヶ月間続き，B が交際相手に恋愛感情を抱く交際をするようになってから，最も長い交際期間となった。J に求めていたものも太古的自己対象機能であったが，J による共感的応答のおかげで交際は順調に続いたと推察される。しかし最終的に J が B との連絡を絶ち，B は太古的自己対象欲求を満たせなくなった。ところが B は自己の断片化を起こすことなく，就職活動や卒業論文作成に力を注いだ（#68）。これは，B が J との交際と別離を経て太古的自己対象欲求を成熟させることができ，就職活動や卒業論文作成という現実的課題達成につなぐことができたことの表れと考えることができる。

第３期になると，新たに O という B の求めていた条件を満たす同年代の男性に好意を寄せて親しくなった（#70）。B は，これまでの交際のように，早急に一心同体的な親密さを求めるのではなく，O の気持ちに配慮しつつ，丁寧に信頼関係を構築する形をとった。また，趣味や価値観など，人格的な面での魅力を感じ，それを親密になるかどうかを判断する重要点と見なす姿勢を示した。これは，B が自己の凝集性を獲得できたことで O を B とは別個の存在と認識できたこと，そして O の反応によって自己規定をしようとする，「アイデンティティのための恋愛」を享受していることの表れと捉えことができる。

以上に示したとおり，B は恋愛問題の解決を主訴として継続的なカウンセリングを受けることにより，自己対象欲求を成熟させて自己の凝集性を獲得することできた。それと並行して，恋愛関係も「自己のための恋愛」の享受から「アイデンティティのための恋愛」を享受できる段階にまで発達させることができた。

第２項　B の自己対象欲求の変化

第１期における B の H や I に関する発言から，H や I に求めていたのは，別個の存在である者同士の関係ではなく，他者と融合した関係であった。これは，１週間や２ヶ月といった短期間しか交際していない相手を失ったことによる B の自己の揺らぎの大きさからも窺える。また，他の女性と食事に行ったことの事前報告がなかったことで I を強く責め

る行為は，I に B の気持ちを最優先に考えて，偉大で完全である存在として承認してほしい気持ちの表れと推察される。これらのことから，B が H や I に向けていたのは，太古的鏡映自己対象欲求に相当していたと考えられる。

また，B は，H や I との恋愛関係にまつわる不全感を語ることと並行して，交際相手に気を取られていた母親から大切に扱われてこなかった淋しさや，現在の生活においても生活態度を注意され，志望職種への理解を得られないつらさなどを語っていた。これは，恋愛における不全感の背景に，鏡映自己対象欲求を母親から期待どおりに満たしてもらえないことへの不全感との関連性を示唆していたと考えられる。つまり，B が H や I との恋愛問題で心理的危機に陥った原因は，母親への太古的鏡映自己対象欲求の充足不全を根源とする太古的な鏡映自己対象欲求への固執であったと推察される。

また，第 1 期の終盤において，B は L と交際したのち，納得のいく形で別れることができた。B は H や I と同様に，L に対しても，自分一人だけに関心を向けてほしいといった，太古的な鏡映自己対象欲求の満足を求めていた。しかし，H や I との交際時とは異なり，別れ話をした時に L からの共感的応答を受けることができた。H や I に比べると，L の共感性が高かったと考えられるが，L の共感性を引き出せるほど B の自己対象欲求が成熟していたので，別れ話の際に B が L に共感される体験を得ることができたと考えられる。従って，B の自己対象欲求は，H や I との交際時に比べて L との交際時のほうがやや成熟していたと推察される。

以上のことから，第 1 期の B にとって重要な自己対象欲求は，太古的な鏡映自己対象欲求であったと考えられる。

続く第 2 期においては，B が高校生時から強い憧れを抱いていた年長の J からの熱烈な誘いを受けて，J との交際を開始させた。B は J から女性的魅力の高さを評価されるとともに，仕事能力の高さも評価されたことを喜び，さらには交際相手として J を独占できていることを喜んだ。また，J は，それまでの B の交際相手とは異なり，B に対して卒業研究に関する有益な助言をし，B の示す激しい嫉妬を寛容に受けとめる頼もしさを備えており，そうした態度に B も居心地の良さを示していた。こうしたことから，J は B にとって，太古的な鏡映自己対象であるとととともに，太古的な理想化自己対象として機能していたと推察される。そして，B は J との交際において太古的な鏡映自己対象欲求と理想化自己対象欲求の充足を経験したことにより，精神的な安定を見せていたと考えられる。以上のことから，第 2 期の B にとって重要な自己対象欲求は，太古的な鏡映自己対象欲求と理想化自己対象欲求であったと推察される。

その後の第 3 期では，同年代の B が求めていた条件を満たす O との交際を開始させる。B は，O から独立した存在として認められることと同時に，趣味や価値観を共有できることに喜びを見出していた。また，O と他の複数の女性との交流を気にしつつも，O の幸せを願うことができるようになり，O を B 自身とは別個の存在として尊重する姿勢を示すとともに，これまでの交際相手に対してのように，O を完全に独占することにこだわって嫉妬をむき出しにすることはなかった。

また，第 3 期において，B は，すでに第 2 期に成立させることができるようになっていた同性との親密な友人関係を，安定的に構築できるようになった。友人関係は恋愛関係よ

りも互いの精神的自立が要求される関係であることから，恋愛関係以上に，自己対象欲求の完全充足を求めても実現の可能性が低いと考えられる。従って，B が親密な同性との友人関係を安定的に構築できたことは，SNS 上で構築された関係という点で慎重に判断する必要はあるが，鏡映及び理想化自己対象欲求が成熟するとともに，双子自己対象欲求が高まったことを意味していたと推察される。これらのことから，第３期の B にとって重要な自己対象欲求は，ほどほどの満足で良いとする成熟した鏡映自己対象欲求と双子自己対象欲求であったと推察される。

以上に示したように，B は，第１期では，太古的な鏡映自己対象欲求，第２期では，太古的な鏡映自己対象欲求と理想化自己対象欲求，そして第３期では，成熟した鏡映自己対象欲求と双子自己対象欲求といったように，時間を経るごとに重要な自己対象欲求を変化させつつ，自己対象欲求を発達させていたことが窺える。

第３項　B とカウンセラーとの二者関係の変化と B の変化との関連

第１期において，#5 までの間にカウンセラーの太古的な鏡映自己対象欲求が完全に満たされないことによる B の不全感への共感の効果により，自己の凝集性が高まりを見せた。その凝集性の高まりは，自己対象欲求の十分な成熟によるものではなかった。#5 にて，B が自分自身や対人関係における停滞感を訴えて，発達欲求の再活性の兆しを示していたにも関わらず，カウンセリングへの動機づけの低下を示した。これは，B の主訴に沿った形でカウンセラーが面接を重ねていたことから，B がとりあえずの凝集性の獲得に満足したことによると考えられる。

しかし，２ヵ月後に B は再来談した。これは，#5 までの間で B の太古的な鏡映自己対象欲求が満たされない不全感にカウンセラーが共感したことで，幾分かはカウンセラーの共感的応答により鏡映自己対象欲求が満たされ，カウンセラーとの間で自己対象転移が生じていたことによると考えられる。この B の再来談に対し，カウンセラーは#5 までと同じように，B の太古的自己対象欲求が満たされない不全感への共感を続けた。

第１期の B は，カウンセラーに対して，自己対象転移を向け，母親による共感不全によって発達が阻害されていた太古的な鏡映自己対象欲求を満たすことを求めていたので，カウンセラーの指摘に対して強い無意識の抵抗を示していたと考えられる。そして，このカウンセラーと B の関係と並行するように，B は，「自己のための恋愛」を重ね，交際相手にも太古的な鏡映自己対象機能を求めていた。その中でも，あとの交際になるほど交際相手の視点を認識できるようになる，自己の凝集性の兆しを見せていた。

また，#10 や#14 のように，母親の共感不全により B の自己対象欲求が成熟せず，B の自己の凝集性が低い状態にあると理解した上で，B が母親との間で体験していた，自己対象欲求が満たされないことによる不全感にカウンセラーが共感し続けた結果，B は次第に自己の凝集性を高め，自己洞察（#37）や母親からの自立（#18，＃19，及び#23）を示すようになった。

そして第２期には，カウンセラーの指摘に対しても目立った無意識の抵抗を示さず，素直に受け入れる姿勢を見せるようになるといった鏡映自己対象欲求の成熟の兆しを見せた。すると，B は太古的な理想化自己対象であった J と交際を始めた。つまり，カウンセラー

と B の二者関係において，B にとっての自己対象機能を果たしていたカウンセラーが，共感的応答で B に関わったことにより，B の鏡映自己対象欲求が成熟し，自己の凝集性が高まったので，太古的な状態にあった理想化自己対象欲求の発達が再活性化されたと考えられる。その後，J と別れることで，B は太古的な鏡映自己対象欲求と理想化自己対象欲求が満たされないことによるこれまで最も深い不全感を体験することになった。しかし，この不全感を Co が丁寧に共感することで，B は自己対象欲求を成熟させて，野心をもって才能を発揮する方向に軸足を置き替え，卒業論文や就職活動に打ち込むことができるようになった。

そして第３期には，B の自己の凝集性が高まったことで，カウンセラーと B との間の自己対象転移が薄れ，B は O に対して成熟した鏡映自己対象機能と理想化自己対象機能を求める「アイデンティティのための恋愛」を展開させ始めることができたと推察される。

このように，B の自己対象となったカウンセラーが，B の太古的自己対象欲求の不全感に共感し続けたことにより，B の自己対象欲求を成熟させて，自己の凝集性を高めるとともに，B の恋愛関係の発達を促したと考えられる。

第４項　恋愛関係以外における B の凝集的自己

B の自己の凝集性が強固になったことは，以下に示す恋愛以外の場面にも効果をもたらしていたと考えられる。

まずは，学業面であるが，B は，自己の凝集性を強固にしたことで，卒業論文作成と就職活動において，恋愛での心理的危機を繰り返すたびに，気持ちを切り替えて，自分の意思に沿って作業を進めることができていた。その結果，最終的に卒業論文を無事に完成させて，希望どおりの会社への就職を決めることもできた。

さらに，同性との友人関係や母親との関係においても，B は，自己の凝集性を強固にしたことで肯定的な変化を見せた。来談当初の B は同性との友人関係が表面的であり，深い関係を作ることが困難な状況であったが，就職対策講座をきっかけに１人の女子学生と信頼関係を構築し（#45），最後は SNS 上で知り合った同年代の女性２人と信頼関係を形成することができるまでになった（#87）。

一方，母親との関係においても，最初は母親への不満や怒りに囚われていたが，就職内定を得た頃には，母親の影響を特段気にしなくなるといった変化を見せた。これは，自己の凝集性が強固となり，母親への自己対象欲求が成熟しつつあった証であると考えられる。

なお，指導教員との関係不和については，B が卒業間近で関係修復を目指して必死に努力をしたにも関わらず，解消されないままとなってしまった。B によれば，指導教員に対して，ふてくされた態度など，幼稚な言動を繰り返していたとのことであり，これらの言動が指導教員との関係悪化につながったと考えられる。こうしたことと合わせて，#48 と #49 にて，B が指導教員への不満と母親への不満を並行して語っていたことから考えると，B は，指導教員に母親を重ね合わせて，指導教員に太古的な自己対象欲求を満たしてもらうことを求めていたのではないかと推測される。そうした意味では，B が示した「自己のための恋愛」から「アイデンティティのための恋愛」への恋愛関係の発達は，自己の一定の発達を示唆していた。しかし，母親との関係における自己対象欲求が満たされないこと

によって疎外された部分の自己については，今後も取り組むべき課題として残されていると考えられる。

第５節　おわりに

B は恋愛問題の解決を主訴としたカウンセリングの中でカウンセラーとの間で自己対象転移を起こした。その自己対象転移の過程において，B は，太古的自己対象欲求が完全に満たされないことによる不全感をカウンセラーから共感的応答を受け続けることにより，太古的な自己対象欲求から，ほどほどの満足で良いとできる自己対象欲求に成熟させて自己の凝集性を獲得した。さらに B は，この自己の発達とともに，恋愛関係も「自己のための恋愛」から「アイデンティティのための恋愛」へと発達を遂げた。

大野（1999）が指摘しているように,「アイデンティティのための恋愛」を，その先の唯一無二の独自の存在として認め合う「愛」に発達させるためには，特定の他者と多くの時間をともに過ごすことが求められる。特定の他者と多くの時間をともに過ごすためには，自己の凝集性を一層高めることが求められる。今後，B が自己の凝集性を高めて,「アイデンティティのための恋愛」を「愛」に発展させていくことが期待される。

第５章　恋愛関係継続時の恋愛問題を抱える女子学生との面接過程

第３章では，恋愛関係成立前の恋愛問題で悩む女子学生の事例を取り上げた。この事例の女子学生は，家族による性的虐待という養育者として適切な応答をすることが極めて困難な出来事が生じたことで，養育者との間で限定的に適切な自己対象体験を得ることができなかったことで，男性への恐怖という恋愛問題を抱えていた。続く第４章では，恋愛関係成立時の恋愛問題で悩む女子学生の事例を取り上げた。この事例の女子学生は，養育者が支配的であったために養育者との間で適切な自己対象体験を得ることができなかったことで，継続的な恋愛関係を成立させることができないといった恋愛問題を抱えていた。

本章では，恋愛関係継続時の恋愛問題で悩む女子学生の事例を取り上げる。この事例の女子学生は，養育者から自己対象欲求の充足を求められすぎることにより，養育者との間で適切な自己対象体験を得ることができずに交際相手との関係性に悩むという恋愛問題を抱えるに至って来談した。

第１節 問題と目的

第１項　養育者の自己対象欲求の充足と子どもの自己の発達

第１章で述べたように，自己は自己対象欲求が満たされることにより発達する。人生早期において自己の発達は，養育者との間で適切な自己対象関係が構築されることで促される。従って，養育者は子どもの自己対象欲求を適切に満たす役割を果たすことが期待されている。それにもかかわらず，養育者が子どもの自己対象欲求を満たすよりも，自分自身の自己対象欲求を満たすことを優先してしまうことがある。本来であれば，養育者は，自身の養育者との間，さらには配偶者との間で自己対象欲求を満たすことで自己を安定させる必要があるが，何らかの事情で，自身の養育者や配偶者との間で自己対象欲求を満たすことが困難な場合,自己対象欲求充足を求める矛先が子どもに向かうことがある。例えば，著しい経済的困窮，災害や犯罪被害，養育者の病気罹患，離婚，障害をもつきょうだいがいる場合など，様々な状況にその危険性がある。本章で取り上げる事例の女子学生の場合は，養育者間において暴力，すなわち DV が生じていた。この DV も，養育者の自己対象欲求充足の矛先が子どもに向きやすい原因の１つになる危険性が高いと考えられる。

DV が生じている夫婦において，暴力を行使する側が暴力を受ける側を意のままに操るといった支配関係が見られる。暴力は支配手段の１つとして用いられる。暴力を行使する側は，相手が自分の期待どおりに行動することを当然とし，期待どおりに行動しない場合は,暴力でもって期待どおりに行動することを相手に強いる。つまり,暴力を受ける側は,暴力を行使する側の自己対象欲求の充足のための存在に位置づけられ，暴力を受ける側の自己対象欲求は配偶者によって満たされることがなく，自己対象欲求不全状態となる。そのため，夫婦の間に子どもがいる場合，暴力を受ける側の者は，自己の安定のために，子どもに自己対象欲求を満たしてもらおうとすることがよくあると考えられる。そして，子どもの自己対象欲求を満たすことよりも,自分自身の自己対象欲求を満たすことを優先し,適切な応答によって子どもの自己対象欲求を満たす役割を放棄することがあることが推察される。そうなると，子どもは養育者との間で自己対象欲求を満たすことができず，子ど

もの自己の発達が阻害されてしまうことにつながることが予想される。

また，DV の場合，養育者から自己対象欲求の充足を求められすぎることのみが，自己の発達の阻害につながるわけではない。特に，暴力を受ける側と同じジェンダーであると認識している子どもの場合，恋愛関係や夫婦関係を成立させる場合，暴力を受ける側の示す行動様式を取り入れることで，交際相手や配偶者に対して，自他融合的な関係性を形成し，その中で従属的な行動様式を基本としてしまう，つまり，主体性をもつことが困難となる危険性もあると推察される。暴力を受ける側が母親であり，その子どもが女子学生の場合，DV の影響で，男尊女卑的価値観に基づく自他融合的な恋愛関係を形成し，恋愛関係の中で主体性をもつことが困難となる危険性があると考えられる。山﨑（2012）は，女性の生き方が多様化した現代において女性へのカウンセリングを行う際，特定の価値観を押し付けず，クライエントが自らの意思で人生上の選択肢を選択するという「選択する主体」になる過程に寄り添う重要性を指摘している。そのため，このような女子学生にカウンセリングを行う場合，恋愛関係における主体性を育てることを意識した関わりが重要であると考えられる。

第２項　大学院学生期にある女子学生の恋愛問題

本章で取り上げた女子学生は，学部 2 年次に来談したものの，学部生の間は継続的に来談することがなく，自己の一時的な支えを求めて来談する程度であった。この女子学生が継続的に来談をするようになったのは，大学院進学以降のことであった。

大学院学生期は，学生が最終的に学生生活を終え，職業人として自己形成する時期である（鶴田, 2008a）。昨今の大学院進学者増加により学生の進学動機は研究のためだけでなく，キャリアアップ，進路決定の遷延などと多様化しており（鶴田, 2006），卒業期の課題が大学院進学後に持ち越される傾向がある（鶴田, 2010）。例えば大学院入学前から継続来談する女子大学院生では恋愛問題の相談が多くみられる（安福, 2001）。

大学院生の多くは青年期後期に属する。恋愛を探求することは青年期後期の中心課題の１つであり，この時期の青年の多くはその後の人生の伴侶決定に焦点をあてた深い親密性を示す（Arnett, 2000）。そして，互いに独立した存在であることを認め合う恋愛関係を形成できるようになることが期待される（伊福・徳田, 2008）。

第１章で述べたように，恋愛関係は，青年のアイデンティティ形成に影響を与える重要な関係性の 1 つである（大野，1999）。女子学生は関係性の中で自己の視点を発見し，これまで馴染んできた家族などの他者の視点と相互調整してアイデンティティ形成する傾向がある（杉村，2001）。そして，多くは第三者の助けを借りて視点間の相互調整に努める（杉村，1998）。自己心理学的観点から言い換えると，それは，第三者との間で適切な自己対象体験を得ることを意味する。

学生相談に来談する，恋愛問題を抱えて傷ついた自己をもつ女子学生も，第三者との間で適切な自己対象体験を得ることで発達を促すプロセスを求めていると考えられる。従って，学生相談においてカウンセラーは，来談学生が適切な自己対象体験を得るような第三者の役割を担うことが求められる。

以上のことから，大学院学生期の女子学生へのカウンセリングにおいて，学生相談のカ

ウンセラーは，クライエントが自己の視点と他者の視点とを相互調整をすることを助ける適切な自己対象として機能することが重要であると考えられる。

第３項　本研究の目的

恋愛問題を抱える女子大学院生への学生相談を行うカウンセラーには，学生が恋愛問題の解決を通して自己の視点を発見し，他者の視点との相互調整できること，すなわち自己の発達を促すことが求められる。そのため，共感的応答や，共感的応答に基づく助言によって学生の重要な自己対象欲求の充足が肝要であると考えられる。吉井（2005）は，異性問題を抱える 30 代女性との面接において，カウンセラーの共感的応答を通してクライエントの自己対象欲求を充足し，自己の発達とともに恋愛関係の発達が促進されたことを報告した。クライエントの年齢やカウンセラーの性別による影響を考慮する必要はあるが，恋愛問題を抱える女子大学院生への学生相談においても同様の効果を期待できると考えられる。

そこで，本研究では，恋愛問題を抱えた女子大学院生への学生相談において，共感的応答や共感的応答に基づく助言による自己対象欲求の充足がどのように学生の自己の発達と恋愛関係の発達を促進するのかについて検討することを目的とする。

第２節　事例の概要

クライエントから事例公表の同意を得ているが，事例記述については，プライバシーに配慮して趣意を損なわぬ程度に事例記述に若干の変更を加えている。

第１項　クライエント

C，大学 2 年生，20 歳。

第２項　主訴

友人である男性への未練と交際相手への不満があり悩んでいる。

第３項　臨床像

おしゃれに気を配り華やかな印象。気分がひどく沈んでいるとノーメイクで肌を荒らして来談し，服装もおざなりになるため，気分の良し悪しが分かりやすい。初対面のカウンセラーにさほど警戒していない様子で，甘えた話し方を示した。

第４項　家族構成

母方祖父母（ともに 70 代，無職），父親（40 代，自営業），母親(40 代，主婦)，C，長弟（高校 2 年），次弟（中学 1 年）の 7 人。C は大学入学時から 1 人暮らし。C の幼少期より，父親から母親に対し，怒鳴る，友人に会わせないなどの精神的暴力(DV)が続いている。

第５項　生育歴

C は中学生頃より母親から，父親の金遣いの荒さや束縛に関する愚痴を聞かされること

が多く，そのたびに母親を慰めて助言をしてきた。大学入学後もたびたび母親が C に電話をかけてきて父親の愚痴を言うことが続いていた。そのかわり C も母親に学生生活の悩みを聞いてもらっていた。ただ，C は母親が常に精神的余裕がないと感じていたので，悩みを思い存分話して頼ることをせず，母親が受けとめやすい程度に留めていた。面接の中で C は母親から頼られることにストレスを感じると言ったが，その口ぶりはどこか嬉しそうであった。C の対人関係の傾向として，誰とでもすぐに打ち解けるといった社交性の高さが見られる一方，警戒心の薄さからか，出会って早々に急速に関係が深くなる傾向がみられる。その傾向は特に男性に対して顕著であった。

第 6 項　見立て

生活歴から，C が母親の視点を自身の視点であるかのように捉え，母親を慰める役割を担うことで心理的安定を保っていることが推察された。一方，大学における修学や友人関係は良好であった。これらのことから，C の自己は傷ついた自己の水準にあると考えられた。

第 7 項　面接構造

在籍学生の学生生活支援の一環として，大学内に設置されている学生相談室にて面接を実施した。個別相談の利用は予約制となっており，在籍学生及び保護者であれば誰でも無料で利用可能である。夏休みなどの休暇期間も通常どおりに面接を実施する体制をとっている。なお，C に対しては，週 1 回 50 分のカウンセリングを継続実施し，休暇期間中も面接を実施した。ただし学部生期においては C による予約キャンセルが度重なるとともに中断期間が長くなり，２年生から 4 年生の間の学部生期の面接回数は 30 回にとどまった。大学院進学後はキャンセルすることがほとんどなくなった。

第 3 節　面接経過

面接経過を学部生期と大学院学生期の 2 期に分けて報告する。「　」は C，＜　＞は筆者（以下，Co），『　』はその他の人物の発言である。

第 1 項　学部生期：妥協的恋愛関係への不満(X 年 6 月～X＋3 年 2 月，#1-#30)

#1 において，C は，父親に似た自分勝手な同級生の男性 T に好意を抱き，C の片思いにより，正式な交際契約を結ばずに性的関係を結び，「友達以上恋人未満」の関係を約 1 年間続けてきたことと，T を嫉妬させるために最近告白してきた T の友人 S と交際を始めたことを話した。C は，「S や T との関係について考えたい」と要望したため，Co は C と継続面接の契約を交わした。

#2 では「以前ほど S と T を比較しなくなった」と浮かない様子で話した。その様子から C の本心からの発言ではないように Co には思えた。S と T を比較しないでほしいということが Co の期待であろうと R は感じ，その期待に合わせようとしていると Co は感じた。さらに，Co の期待に応じる役割を果たすことが，C にとって自己対象欲求の充足になるのではないかと Co は考えた。この状況は，C が母親との間で繰り広げている関係性と

同じであるように Co には思われた。しかし，C 自身も S と T を比較をせずに，S のことを大切に思うようになることを願っており，そうなると嬉しいと感じるのは事実であろうと Co は考え，＜それは良かったですね＞と応答した。すると#3 において C は，父親が母親を精神的に支えていない上に精神的暴力を与えていることへの怒りを表出した。Co はその怒りの激しさに圧倒されそうになったが，つらそうにする母親の姿とそれに伴う自身の中で生まれた怒りに C が圧倒されているのだろうと考え，＜お母さんがお父さんからひどい扱いを受けているのを見聞きするのはとてもつらいですよね＞とコメントすると「そうなんです」と同意した上で，目を輝かせて何度もうなずいた。その後の面接において，度々C はこの話題を繰り返し話した。その度に Co は上記の推論に基づいて C の怒りを受けとめた。一方，S との関係については，交友制限する S に不満を感じているにも関わらず，母親が S を C のことを大切にしているという理由で気に入っていることと，C 自身が別れて一人になって孤独感を感じるのではないかという恐怖から，別れることを躊躇していた（#26）。

大学卒業後の進路として，ある会社への就職が内定していたが，特にやりたい仕事ではなかったことと，母親から就職することを期待され，C 自身もとにかく就職しないといけないと思って選んだ会社だったことから,「気乗りしない」という理由で就職内定を辞退した。そして大学院への進学に進路変更したが，特段研究をしたいテーマがあるわけではなく，身分確保のためといった消極的理由で大学院進学を決めたことに漠然とした不安を示した（#30）。それを受けて，Co も C が大学院生活に適応できるのか少し不安になった。しかし，Co には，これまで，母親の期待に応えることを第一にしていた C が，そうした自身のあり方に疑問を感じ，踏みとどまって自分の世界を持つために模索を始めた証とも考えられた。また，C は学部の学業にもそれほど思い入れはなくとも順調に学業をこなしてきたので，大学院に進学しても自己探求しつつ研究活動をこなすことは可能ではないかと思えた。そこで，Co は今回の C の進路選択を尊重し，＜大学院で過ごす時間が自分自身を見つめ直す時間であると考えてもいいかもしれませんね＞と発言した。それを聞いていた C は真剣な表情で Co を見つめて数秒考え込んだ後，急に何かひらめいたように「そうですよね」と言って表情を和らげた。このとき，かすかに C は自分自身の心の変化に気づいていたと思われたが，それがどのような変化なのかは捉えていないように Co には思われた。

第２項　大学院学生期：妥協した交際から妥協のない交際へ(X＋3 年 4 月～X＋5 年 3 月，#31-#74)

（１）修士１年次：別れと新たな出会い(X＋3 年 4 月～X＋4 年 3 月，#31-#43)

C は#31 で 2 年半の間に不定期な性的関係をもっていた社会人男性 U の存在を Co に打ち明け，最近連絡を取れないことを嘆いた。また，他県に就職した S と遠距離恋愛になり，淋しさに耐えられないとも訴えた。Co は C が S との交流が減り，自己が不安定になることで生じた苦しみを，S の代わりに U に依存することで埋めようとしていることを求めているのだろうと考えつつ，＜U に惹かれるところがあるのですね＞と確認すると「不安なときによく話を聴いてくれた」としんみりとした様子で話した。この発言から，U は，C

にとって，単なる心の一時的な穴埋めとして機能していたわけではなく，鏡映自己対象として機能していたと考えられた。

その後，C はもともと興味のない大学院の授業内容が予想どおりつまらないと強い不満を示し（#33），4 月から過食がひどくなり，つまらない授業しかない日は特にひどくなると訴えた（#35）。「過食は U といった S 以外の男性とセックスするのと同じで，自暴自棄の行動なんです」と説明した。Co は#31 において C の自己の不安定化による苦しみに共感的応答したことが，この洞察につながったのではないかと推測しつつ，＜なるほど，そうだったんですね＞と返答すると，C は何度もうなずいた。

#36 では「前回に過食とセックスのことを話しても，Co から非難されなかったおかげで過食が止まりました」と嬉しそうに報告する。Co は C による急激な改善が見られたとの報告に戸惑ったが，C にとって受け入れがたく苦しい過食行動をしなくて済んだことは，かなり嬉しいことであろうと考え，＜良かったですね＞と心を込めて応答した。ただ，Co にはこの報告に対してしっくりと来なかったので少し黙っていた。すると，C は，最近になり，友人関係にある男性 V から性的関係をもつことを求められ，C も V に恋愛感情を抱いていたので，S に悪いと思いつつも性的関係をもったことを明かした。その話から，Co は，これまで C が面接の中で Co との間で自己対象欲求を満たすことに加えて，V という新たな対象との間で自己対象欲求を満たすことができるようになったおかげで過食行動が治まったのだと理解して，納得することができた。

C は V に惚れ込んでいるとのことであったが，V が過去において次々と複数の女性と性的関係をもってきた遍歴をもっているのを知っているので心から信頼できないと悩んでいた。さらに「姉のように頼って何でも相談してきた，母親の妹である叔母（40 代，独身）に V との付き合いについて相談すると，『そんな男は DV でもするかもしれないから別れなさい』と叱られ，母にも同様に反対された」と悲しそうに話した。叔母と母親がそこまで反対する理由は聞いていないので，わからないとのことであった。「今まで母や叔母が気に入る相手とだけ付き合うようにしてきたけど，今はそれでは不満を感じます。V と付き合うことを母や叔母にどう説明して理解をしてもらえばいいか困ってます」と訴えた。Co は，母親や叔母からの反対に伴う C の落胆や戸惑いを感じるとともに，C の自己が崩れないように，母親と叔母との間で新たな関係を構築する方向に C が動き出そうとしていると考えた。同時に，C がこれまで母親や叔母に向けていた自己対象欲求を Co に向けるようになってきたと感じた。Co はこれらの変化を C が自身の視点を発見し，母親らの視点との相互調整をしようとし始めるといった自己の発達の証と捉えた。そこで Co は C が自己の視点をさらに育てることを望みつつ，＜交際し始めたけれど長く続けるかどうかわからないと言ってみるのはどうでしょうか＞と提案すると「それがいいです。そうします」と安心した表情を見せた。

C は#36 で報告したように V と性的関係をもった後，V と本格的に交際を始めるために，S に別れを告げた（#37）。そして，S と別れたことを報告するために C が下宿にいた V を訪ねた。すると，V は C と連絡がつかないことから S と別れていないと思い込み，怒りのあまり部屋の壁を殴って穴を開けていたことがわかった。それを知った C は，叔母の『そんな男は DV でもするかもしれないから別れなさい』という発言を思い出して怖くなった。

そこで，叔母の判断が正しいのかどうか判断するために，V に対して，C にも暴力を振るうのではないかと尋ねた。すると，V は『人にはしない。どれだけ C を好きかわかってほしい』と言うので信じることにしたとのことであった。Co は C が V の言葉を真に受けてしまうのは，すでに V が C の理想化自己対象として機能している証であろうと考えたが，叔母ほどではないにせよ，V が C にとって安全な存在かどうか疑問を感じた。しかし，C の V を信じたい気持ちを尊重して黙っていた。すると，C は，V が身体障害者の妹の面倒をいずれ看ないといけないという重圧を抱えていることを涙ながらに C に打ち明けたことから「V を支えたいと思うようになった」と熱く語った。この発言から，Co は C が Co に自己対象欲求を満たしてほしいという切実な願いを感じ取り，Co はその機能を引き受けることで，C が自己の発達を促し，V との間での関係性を発達させることを支えることにした。

C が父親と似て支配的で暴力的な V に好意を寄せていることは，C が母親の視点を自己の視点と捉えているように Co には思われた。そのため，母親が父親との間で展開させている自他融合的な関係性を V との間で C が繰り広げる可能性があると考えた。そこで Co は C が V との間で自他分化的な関係性を展開し始めることを願いつつ，＜V はかなり淋しさに弱いようですね＞と伝えてみた。C は不思議そうな表情を示すだけに終わった。しかしその後，V が，次第に C にそばにいて欲しい時にいないと拗ねるといった反応を示すようになったことを受けて，「Co が前回言っていた意味がわかりました」と嬉しそうに言った（#38）。この#38 の C の発言は，V を冷静に観察していると考えられたことから，Co は将来 C が V との間で自他分化的な関係性を展開できる可能性を感じ，希望を感じた。

この#38 において，執拗に母親から S との結婚を勧められたときには全く興味や意欲を示さなかった C が，熱烈に求婚してくる V との結婚には強い意欲を示した。Co は，C も V も年齢相応の視点の確立ができていると思えなかったことから，2 人が結婚することには内心賛成できなかった。しかし，前述の C の発言と今回示した自らの意思で V との関係を検討する姿勢から，C の自己の発達の兆しを感じたので，＜C は以前にくらべて少し精神的に大人になられたように感じます＞と応答した。すると C は嬉しそうに大きくうなずきながら「S には甘えてばかりで何もしてあげていなかった。V に対しては甘えるだけではく，支えてあげたいという気持ちがある」と語った。

Co がこの調子で C が自己を発達させるとともに，V との関係を育てることを期待していた矢先，C は#39 で V との性交渉により性感染症感染に罹ったと語り，V に対する怒りを表出した。「V が C の体調を全く気遣ってくれない。V は幼稚。母に甘えている父と似ている。今の私は母そっくり」と興奮して話した。Co は C が自己を発達させるための支えとして期待していた V に不満を感じるとともに，思うように発達できない自分自身に苛立ちを覚えているのだと考え，＜頼りない V を支えているところがお母さんに似ているように感じるのですね＞と確認したところ「自分でも嫌になる」とこぼした。

#40 で未だに母親が V を嫌うことに落ち込む C に，＜お母さんから V を否定されるのはつらいですね＞と応答すると，はっとした表情で，「母のためではなく自分自身のための（交際）相手を見つけたい」ときっぱり言った。Co は C の意思を支えるべく＜そうですよね＞と肯定した。C は C 独自の世界をもとうと心の中でもがいているように見受けられ

た。

上記と同じ#40 にて「両親の関係に疑問を感じていたのに自分も V と同じようになってしまっている。嫌だと思うが，なぜか満たされる」と母親との心理的距離の取りにくさに苦しんでいると思われる発言をした。そこで Co は C の苦しみを受けとめて，＜なかなか難しい問題ですね＞と応答すると，「昔は恋愛相談をよくしていたが，最近は母に逐一恋愛相談をしなくなって自由になれた」と，母親と心理的距離を置くことが，自身の視点を確保し，心理的に安定につながっていることを強調した。

C の数か月に及ぶ短期留学を挟み，再開した面接で「いろいろありました」と話を切り出した（#41）。V は V の母親の地元の会社に就職してほしいという要望に従って，地元の会社に就職することになったとのことであった。「最近，V から『C は大学院を修了したら，就職せずに V と結婚すればいい』と言われます。でも，V の母親が V に過干渉なので，V が自分の意思で C との結婚に踏み切れるのか心配。大学院修了後はしばらく独身でいたいと考えています」と語った。Co は C が V を単なる心理的経済的な依存対象ではなく，対等に関係を築く伴侶としてふさわしいかを見極めようとしていると考え，その自立的姿勢を支えることを意識して，＜V が C としっかり向き合ってくれるといいですね＞と応答すると，C は大きくうなずいた。

#42 では C の勧めにより V が V の母親に対して，過干渉を止めてほしいと訴えたところ，V の母親は精神的にショックを受けて寝込んでしまったと V の父親から聞かされたことを不安そうに話した。Co は C が V の心理的自立を促せた喜びと V の母親への罪悪感との葛藤で苦しんでいると理解した。そこで，両方の感情を捉えて，＜それはショックな出来事ですね。でも C のおかげで V が V のお母さんに言いたかったことを言えたのは良かったですね＞と応答すると，大きくうなずき「そう思う。V の父親からも感謝されたんです」と顔をほころばせて話した。そして「V とは遠距離恋愛になったけど，S との時とは違って不安や淋しさが少ないです。1 人でいても安定していると思います」と言った。遠距離恋愛と V の就職を契機として，V との関係が崩壊するのではなく，V と自他分化した関係を継続できるほど自己が発達している実感を持てて嬉しいのであろうと Co は考え，＜V と会っていないときでも，1 人でいても不安にならなくなったのは良かったですね＞と応答した。C は何度も嬉しそうにうなずいた。

（2）修士 2 年次：関係性の深まり：(X＋4 年 4 月～X＋5 年 3 月，#44-#73 及びフォローアップ面接)

C は，母親が未だに V を批判して S との結婚を勧めてくることに困り果て，「V から結婚を前提に実家に招待されているけど，母親のこともあるので，どうすればいいかわからない」とこぼした（#44）。Co は C の代わりに答えを示すことで安心したがっているように感じた。しかし，C がこの局面を自らの力で乗り越えることがさらなる自己の成長につながると判断し，＜C がどうしたいかが大事だと思う＞と応答するに留めた。結局 C は母親に報告して母親の非難を受けたが，V の実家訪問を決行した（#47）。その報告を受けて，母親が V を過剰に悪く評価している可能性を Co が指摘すると「父親の嫌な面を V に見ているかもしれない」と言った。この発言から，C は母親の視点をかなり冷静に分析できる

力が備わってきていると感じた。

続いてCは，中学生の頃，母親が父親との離婚をほのめかして父親と母親のどちらについてくるかをC自身で決めるように迫られたことがあったことを話し，「簡単に選べないので酷だと思った」と泣きそうな表情で言う。「お母さんはよく『私はいい妻よね』とは言うが，『いい母よね』とは言わない」と憤慨する。この発言により，これまでCが母親との間で自己対象欲求が思うように満たされてこなかった不満をCoに伝えたいのだと考え，＜お母さんが，Cを大事に思ってくれていないのではないかと思って，とても悲しくなりますね＞と応答すると，Cは黙って涙を流した。

#48では，CがVと性的関係を結んだときに，Vが事前の断りをCにすることなく，気分が盛り下がるという理由で避妊しなかったことを知り，Vへの不信感と怒りを再燃させた。「VはVの母親のヒステリックさに慣れているから，どうせ私が怒っても何も感じないんです」とVへの怒りと諦めの気持ちを込めて話した。それは父親に対する母親の態度そのものであるようにCoには思えた。しかしCoはCがこの話をしたのは，CがVと向き合うことも願っているではないかを考え，＜淡々と伝えてみてはどうでしょう？＞と提案した。すると「それは堪えるかも」といたずらっぽく笑った。次の#49にて，CはCoの提案に従い，淡々と怒り伝えたところ，Vが反省を示すという効果があったと嬉しそうに報告した。

#49にて，Vが，避妊の非協力について謝罪しないことや，母親に1人暮らしの許可をとるための交渉をVの父親に任せていることを取り上げて，「Vは情けない」と憤った。そしてVとの子どもを産むが，1人で育てる決心をしてVに別れを告げる夢を報告した。これらのことから，CoはCの自己の成長にVがついてこないことをもどかしく思っているのだろうと考えた。ただ，Cは修士論文のための研究活動と就職活動に集中すべき時期を迎えていた。そこで，Cの学生生活への適応を考慮して，＜Vの頼りなさが気になるとは思いますが，自分のことに集中してVのことは少し横に置いておいてはどうでしょうか＞と提案すると，我に返ったような表情を見せて，「そうします」と答えた。その後の面接でもCoは，CがVへの怒りに囚われた発言をするたびに，怒りを受けとめつつもCに現実的課題への焦点づけを促した。

しかし，Cは研究活動と就職活動をこなす一方，避妊にまつわるVへの怒りが収まらず，Vを責め続けた。その結果，Vから別れを告げられてしまう（#50）。Cはショックのあまり着替えもできないほど情緒不安定となる（#51）。これらのCの反応は，CoがCの学生生活への適応に重きを置きすぎて，CのVに対する怒りに共感的応答をしそこねたことによって生じた反応であるとCoは考えた。つまり，これらのCの反応は，CoがCの自己対象欲求を満たす機能が十分果たせていない証拠であると考えた。そこで，Coは，Cの学生生活への適応の支えと，CのVに対する怒りへの共感的応答とのバランスを建て直すことに努めた。

Cは以前にVから熱烈に求婚されていたことを理由に，「なぜ別れると言われるのか，理解できません」とVへの強い執着心を示した。Cの悲痛な訴えに，感情統制がうまくできないCとVの交際継続はもはや不可能かとの悲観的な考えがCoの心の中で浮かんだ。しかしCのVとの交際継続の願いは，Cの本心であると感じ，また，Vが別れを切り出し

たのは,C に成長を求める気持ちからであると考え,＜V が結婚しようと言ってきたのは，思いつきではなく，考えがあってのことじゃないかなと思います。互いに心理的に不安定なところがあるので，焦らずにゆっくり関係を展開させていくといいと思います＞と言うと，C は納得したようにうなずいた。すると予告なく#52 に V と来室し，関係改善を目的に同席面接を求めた。Co はかなり驚いたが，2 人の相互理解を深めて関係性を展開させる機会にしてくれることを期待して，同席面接を了解した。C は「V に頼りすぎてしまう自分が嫌だ」と漏らし，V も『それほど支えられない』と嘆いた。結局，電話が長くなると C が話を聞いてくれない V に不満を募らせて口論になるので，2 人とも長電話しないように努力するとの結論で落ち着いた。

しかし,#53 では V が再び別れを切り出されて,再び関係を修復したことが報告された。「簡単に別れを切り出すので C を物のように軽く扱っているみたいで腹が立つ」と嘆いた。そこで物のように扱わないように要求したところ『まともなことを言ってくれてよかった。やり直そう』と言われて交際を続けているが，気持ちは晴れないとのこと。＜V が C を物のようにではなく，人として扱っていると実感するまでは気持ちが晴れないかもしれませんね＞と V のぞんざいな扱いへの不満に寄り添った。「V は学生のときは小学生のようだったのに，今は態度がトゲトゲして中学生のような感じがする」と V の変化に触れたので＜V も心理的に成長されつつあるのかも＞と言うと「わかる気がする」と納得した様子を示す。

C は，内定式に出席したときに社風に違和感をもち，内定先への就職に気が進まなくなったので，留年することを考えたが，現実的ではないと考え直した（#54)。「V から電話で『今は仕事が楽しいので，C に不安定になられては困る』と言われたが，自分のことしか考えていない人だと思った」と発言したが，動揺をした様子はなく，心理的余裕が見られた。この発言から Co は C の自己の発達が他者に過度に頼らずともやっていける水準にまで進んでいると感じた。#55 では，C がバイト先の従業員からセクハラ被害に伴う外出恐怖を V に訴えた時に心配して Co への相談を勧められたことを嬉しそうに話し，V との関係が安定している様子を垣間見せた。

なお，修士論文に関しては，期待するような指導を指導教員にしてもらえない不満を繰り返し漏らしつつも，自分なりに興味を見出し，積極的に研究を進めて修士論文を完成させた(#67)。

母親に修士論文作成のつらさを慰めてもらったことに安心して，V と喧嘩したつらさも慰めてもらおうと電話をしたら『人間は生まれるときも死ぬ時も 1 人。そんなことで会社勤めができるの？』と責められてつらかったとのこと（#70)。この母親が受けとめてくれないつらさを V に電話で話すと『お母さんが言いたかったのは，何事も最後は自分で決めろということではないか』と意外に大人っぽい返答をしたことに驚いたと言った。そして，C が大学院を修了したらすぐに同居しようと V から求められていたが，C はその求めに応じず,しばらくは 2 人の関係を安定させるため別々で生活する考えであることを明かした。

最終回の#73 にて V が貸したお金を返してくれないことを嘆き，お金を使い込む父親の後始末に母親が翻弄されていたことを話した。Co は，C が V との間で自他分化的な関係性を展開させていくことを願いながら，V 自身に実現可能な返済方法を考えてもらうこと

を提案したところ，早速Cは自分自身の希望する返済プランを検討していた。

大学院修了後のX＋5年4月にCの要望でフォローアップ面接を実施した。Cは，就職先の男性社員らといると過去のセクハラ被害が想起されてつらいと話した。そこでCoはCが信頼している人物として挙げた,人事課の男性職員に相談することを提案した。後日，その職員が親身になって対応してくれたおかげで気持ちが落ち着いたとの報告があった。また，Vとの交際も順調に継続しているとのことであった。

第4節　考察

第1項　大学院学生期におけるCの変化

Cは内定していた会社への就職を辞退し「進路決定の遷延」（鶴田,2006）のために大学院に進学した。どのような動機で進学したにせよ,多くの院生は学生生活の終点を前にし，自分らしさを問う作業をする（鶴田,2006）。それは，自己心理学で言うところの自己の凝集性を高めるプロセスを意味すると推察される。つまり，Cの場合，大学院に進学することで,恋愛問題の解決に取り組みつつ,自己の凝集性を高める作業を行ったと考えられる。

Cはさほど好意を感じていないが母親が気に入っているという理由でSと交際を続けていることに疑問を感じたことを契機に来談に至った。学部生期のCは，自身の視点に気づかず，その疑問の背景に焦点を当てるには至らなかった。しかし，自らの意思で大学院進学へと進路変更してカウンセリングの継続を希望し，自己の凝集性を高めることへの欲求の片鱗を示した。

Cは進学後しばらくして自ら好意を寄せるVとの交際を希望した。これは恋愛における自身の視点の発見と考えられる。その後，CはVとの交際への母親や叔母の猛反対を受けるが，母親らに理解を求めながら，Vとの交際開始を決断してSと別れた。このCの動きは，母親らと自身の視点の違いを認識した上で相互調整（山﨑，2012）を行う自己への発達の証であると推察される。交際当初，Cは父親に似た暴力的かつ依存的な面をもつVとの間で，母親が父親と展開していた自他融合的な関係性に近い関係性を繰り広げ始めた。しかし，母親と似ていることへの自己嫌悪を表明したり（#39），Vが Vの母親に自己主張するのを応援したり（#42），母親とは違う手段で避妊に非協力的なVに怒りを伝えたりした（#49）。つまり，自身の視点と，母親やVの視点とを相互調整できる自己としての成長を遂げ,Vとの間も自他分化的な関係性に変容させてVとの関係を安定化させた(#55)。

以上のことから，大学院学生期でCは，自身の視点と他者の視点と相互調整できる自己へと成長するとともに，Vとの恋愛関係も安定化させるに至ったと考えられる。

第2項　Cにとって重要だった自己対象欲求の種類

Cは，母親が父親から精神的暴力を受け続けて大切に扱われていないことを学部生期における面接で繰り返し嘆いた。これは，C自身が母親に求める鏡映自己対象欲求の充足不全の訴えと考えられる。そのことはカウンセラーが上記の推測のもとにCの訴えに共感的応答をし続けたところ，Cが自ら進路を大学院進学に変更したことからも確認できた。さらに，母親の強い勧めで恋愛感情をあまり抱いていないSとの交際を継続していたことからもCが母親からの鏡映自己対象欲求の充足を求めていたことが窺える。また，母親から

大切に思われていないと感じるエピソードの悲痛な語り（#47）や，修士論文作成のつらさを母親から共感されたことで，V への不満を母親から理解されることへの期待を高めたこと（#70）からも，C が母親からの鏡映自己対象欲求の充足を強く願っていたことが推察される。

これらのことから，C にとって最も重要な自己対象欲求は，鏡映自己対象欲求であったと考えられる。これは，母親は自身の自己対象欲求の充足を優先する傾向があり，そのせいで C の鏡映自己対象欲求充足の機会が乏しくなり，C は母親との間で適切な形で鏡映自己対象欲求を満たすことができなかったことが原因であったと推察される。

第３項　カウンセラーとの二者関係による効果

先の節で示したように，C は大学院進学前の学部生期から鏡映自己対象欲求の充足を最も求めていることが窺えた。そこで学部生期においてカウンセラーは，S との交際に対する葛藤を抱えるつらさ，また C にとってより深刻であった，母親が父親から精神的暴力を受けることを見聞きするつらさに丁寧に共感的応答をすることで C の鏡映自己対象欲求の充足を目指した。しかし，学部生期の間には C は S との交際を検討し直すほどの自身の視点発見には至らなかった。その一方で，進路面での自らの意思による変更は，カウンセラーの共感的応答による鏡映自己対象欲求の充足の成果としての自己の発達の兆しであったと考えられる。

大学院に入学してまもなく C は自ら好意を寄せた V と性的関係をもった。C 自身が#35 で述べていたように，それまでの C にとって性的関係は自暴自棄の行動の 1 つであった。しかし V との性的関係はそうならず，真剣に V と交際することを望んだ(#36)。これは，恋愛における自身の視点を獲得できた証と考えられる。また，この視点の獲得は，#31 や #35 においてカウンセラーが C の性的行動にまつわる不安に共感的応答をしたことで，C の鏡映自己対象欲求が充足された証である推察される。

C は，V との交際に関して，S の時と同様に母親や叔母に意見を求めたが，母親らから猛反対されて困惑した。それまでの C であれば，この時点で母親らの意見に従って V との交際を諦めていたと思われる。しかし，この時の C は，反対する母親らに理解を求めつつ交際することを希望し，母親らへの理解の求め方についての助言をカウンセラーに切望した。この C の選択は，カウンセラーを自己対象として機能する他者と捉え，その Co の助言により自己対象欲求を満たして，自身の視点と母親や叔母の視点を相互調整できる自己になろうとしていることを示していると推察された。そこでカウンセラーは#36 のように C の自己の発達を支えるべく A の心理的成長の促進を意識した助言を行った。その助言により C は自身の視点への自信を高めて，自身と母親らの視点の相互調整に努めつつ V との交際を開始させるに至ったと思われる。その後 C は V との間で性感染症問題や避妊問題など次々と危機を迎える。そのたびにカウンセラーの共感的応答や助言により C の自己対象欲求が満たされることで，C は自己の視点と母親や C の視点との相互調整に努め，次第に V との関係を安定化させていくことができたと考えられる。#52 では C と V がそろって 2 人の関係改善を目的に来談した。これは C の自己が発達するにつれて，V との恋愛関係がより成熟した形に発達し，そして，この恋愛関係の発達とともに，V の自己も発達

し，C との関係改善に向き合う意欲を高めるまでに成長した証と考えられる。そこで Co が C と V のそれぞれの意思を尊重した対応を取ったことがさらに C の鏡映自己対象欲求の充足となり，C がその後の 2 回の別れの危機において粘り強く自身の視点と V の視点との相互調整できる自己へと発達しつつ，V との恋愛関係をさらに安定化させていくことにつながったと考えられる。

#36 のように，カウンセラーは，C に対して助言を行なっている。学生相談は学生支援の一環であり，学生の人格的成長促進機能も期待されていることから（鈴木，2010），時には助言することも役立つと考えられる。ただし，助言は正確にクライエントを理解することではじめて有益なものとなる（玉瀬・上松，1996）。この正確にクライエントを理解することは，共感的理解を意味する（Kohut, 1984）。したがって，助言が共感的理解に基づく応答のある中で行なわれることが，来談学生の自己の発達にも効果的であると考えられる。

本事例では，カウンセラーが C に対して，共感的応答をするとともに助言を行なったことで，C は自己の凝集性を高めるといった変化を見せた。それは，カウンセラーが C にとって，鏡映自己対象であると同時に理想化自己対象として機能していたことの現れであると考えられる。つまり，C は，カウンセラーの共感的応答によって自分自身の存在価値を確認するとともに，カウンセラーの共感的応答と助言によって，敬意を感じているカウンセラーから認めてもらうことで理想化自己対象欲求も満たされていたと考えられる。Wolf（1988）は，母親が 9 歳になる息子に助言をした事例を取り上げて，共感的応答の伴う助言を受けると，自己対象欲求が充足されることを説明している。本事例においては，カウンセラーとの二者関係の中で，鏡映自己対象欲求と理想化自己対象欲求の両方を満たされることにより，C は阻害されていた自己の発達を再開させ，凝集的な自己を獲得するとともに，恋愛関係を発達させることができたと考えられる。

第 5 節　おわりに

以上のように，恋愛問題を抱えていた C は，カウンセリングの中でカウンセラーの共感的応答と助言により C にとって最も重要な鏡映自己対象欲求が充足することで，自己の凝集性を高め V との恋愛関係の安定化といった恋愛関係の発達を遂げたと考えられる。

なお，本事例のように C が修学適応を果たしながら自己の凝集性を高めることができたのは，C の病態水準が傷ついた自己のレベルであったことに拠るところも大きいと考えられる。従って，より深刻な病態水準の学生に対しての効果については，さらなる検討が必要である。

人が生涯にわたり凝集的な自己であるためには自己対象欲求の充足を必要とする（Kohut, 1984）。これからも C が自己対象欲求を充足させて自己の凝集性を高めつつ，V との関係など様々な人生の選択に向き合い続けることが期待される。

第６章　本研究の総括と今後の課題

本章では，第１節で各章のまとめを示し，第２節ではそれらから見えてきた総合的な考察を述べた後，第３節で研究の課題と今後の展望を述べる。

第１節　各章のまとめ

第１項　本研究の背景と目的

序章では，まず，大学教育に見られる変遷を概観するとともに，『学生支援の３階層モデル』を用いて，学生支援体制の中での学生相談の位置づけを説明した。さらに，学生相談事例や大学生全体を理解するための有用なモデルとして，鶴田（2001）の考案した「学生生活モデル」を紹介した。

次に，学生相談で扱われる対人関係の問題の中に恋愛問題があり，恋愛問題は学生の精神的健康や学生生活への不適応を引き起こす要因にもなりうることから，専門的支援を要することがあることを指摘した。

その後，多くの学生が青年であり，青年期にある彼らの恋愛の特徴は「アイデンティティのための恋愛」であることを説明した。アイデンティティとは自我機能の１つであり，自我が適切に機能するためには，自己の安定が必要である。そこで，その自己の安定と発達に注目した Kohut が提唱した自己心理学を紹介し，自己心理学における自己の発達と病理について説明した。

さらに，学生相談では，カウンセラーが来談学生にとっての適切な自己対象として機能すること，すなわち，来談学生に共感的応答をすることによって，来談学生とカウンセラーとの間で自己対象転移が構築・展開され，来談学生の阻害されていた自己の発達が再開され，精神的健康の回復と学生生活への適応が実現されることを目標とすることが重要であるといった，自己心理学的観点による学生相談の治療目標を示した。

次いで，自己の発達と病理に関する心理学的研究を概観し，適切な自己対象欲求の充足により自己が発達する一方，不適切な自己対象体験は自己の発達を阻害するといった自己心理学理論が支持される結果が得られていることを紹介した。

さらに，学生相談において継続的に支援を要する，自己の病理を抱えた学生の恋愛を「自己のための恋愛」と命名し，多くの学生が示す「アイデンティティのための恋愛」との違いを説明した。また，恋愛の発達と自己の発達との関連性にはジェンダー差が見られ，女子学生は，男子学生に比べると，恋愛の発達と自己の発達との関連性が強いことが様々な研究者らに指摘されていることを紹介した。

次に，国内外の恋愛に関する心理学的研究を概観し，青年の恋愛を扱った量的研究は存在するものの，青年の恋愛問題を主訴とした事例研究が皆無であることを指摘した。

そして，学生相談における恋愛相談における治療目標として，学生生活の適応を念頭に置いた，自己の発達再開と，恋愛の発達促進が重要であることを述べた。

そして最後に，本博士論文の目的として，学生の恋愛の発達と自己の発達の関連を検討しつつ，学生相談における恋愛相談の実態を把握し，恋愛問題の解決を求めて来談した女子学生への学生相談での支援のあり方を検討することを提示した。

第２項　女子学生の恋愛の特徴と学生相談における恋愛相談の実態

第２章では，大学生を対象とした，恋愛の発達と自己の発達との関連を調べる調査研究と，学生相談従事者を対象とした，学生相談における恋愛相談の実態調査をまとめた。

大学生を対象とした調査では，大学生 352 名を対象に，「自己構造の安定性尺度」，「恋愛様相尺度」，「養育者からの被受容感尺度」の３つの既成尺度と，恋愛の悩みと相談の関する質問への回答を求めた。交際経験をもつ 203 名の回答を分析した結果，男子学生は，恋愛の発達と自己の発達との間に関連が見られなかったが，女子学生では関連が見られた。また，恋愛で悩みをもった経験のある 199 名の回答のうち，約９割の者が，他者に相談した経験があり，その相談相手としてほとんどの者が同性の友人，約６割が異性の友人を選んでおり，友人を相談相手に選んでいる者が多かった。一方，相談相手に専門家を選んでいる者は皆無であった。

２つ目の学生相談従事者を対象とした研究では，108 名の学生相談従事者から回答を得ることができた。有効回答者 101 名のうち，約８割の者が恋愛相談を経験していた。また，恋愛相談者のジェンダーを見ると，女子学生が男子学生よりも多かった。女子学生の恋愛相談事例内容を分析したところ，恋愛関係進展度では，継続時における相談が多かった。この継続時の恋愛相談では，「交際相手からの支配」に関する相談が最も多く，約４割を占めた。また，学生相談従事者は，学生相談で支援する中で，恋愛問題を生み出す背景要因にも注意を払って支援をする必要があると感じている者が多かった。こうしたことから，学生相談において恋愛相談で支援をするための視点を整理して対応力を高める必要性の高さを伺うことができた。

第３項　性的虐待被害経験により男性恐怖を抱く女子学生との面接過程

第３章では，過去の性的虐待被害経験により男性恐怖を抱く女子学生との面接事例を取り上げて，恋愛関係成立前の恋愛問題を抱える女子学生に対する学生相談での支援のあり方について検討した。

カウンセラーが，性的虐待被害経験にまつわる恐怖や怒りと，指導教員に対する怒り，さらには，求めているように共感的に応答してくれない母親に対する不満に共感的応答をし続けた結果，学生は性的被害経験による恐怖症状や回避症状を軽減させ，指導教員とも良好な関係を築くことができるほど，自己を発達させることができた。また，自己の発達に伴い，卒業研究を遂行し，卒業論文を完成させることや，希望する会社を見つけて内定を取り付けるなどの卒業期の課題も達成することができた。

本事例の学生は，性的虐待被害経験という，普段は共感的な養育者でも共感することが困難な経験をしたことで，養育者との間での自己対象体験が不足していた。この自己対象体験の不足によって，自己の発達が阻害されたことによって，恋愛関係成立前の恋愛問題を抱えるに至ったと考えられた。そこで，カウンセラーが性的虐待被害経験による直接および間接の影響としての恐怖や怒りに共感的応答をし続けたことにより，学生は適切な自己対象体験を得ることができ，自己の発達の再開に至ったと考えられた。つまり，学生が新しい自己対象体験によって自己の発達を再開させるために，学生相談カウンセラーは共感的応答をし続けることが重要であることが見出された。

第４項　「自己のための恋愛」を繰り返す女子学生との面接過程

第４章では，恋愛関係を成立させるも継続できない女子学生との面接事例を取り上げ，恋愛関係成立時の恋愛問題を抱える女子学生に対する学生相談での支援のあり方について検討した。

カウンセラーが，恋愛関係の成立失敗や崩壊に伴う心理的苦痛や支配的な母親への怒りや不満に共感的に応答し続けた結果，学生は，恋愛対象となる者と時間をかけて信頼関係を形成することができる自己にまで発達した。また，自己の発達に伴い，学業に適応し，無事に卒業期の課題までこなすことができた。

本事例の学生は，支配的な養育者によって，幼少期より自己対象体験が不適切であったため，自己の発達が阻害されていたと考えられる。この自己の発達の阻害が，恋愛関係成立時の恋愛問題を抱えることに繋がっていたと推察された。そこで，カウンセラーは，恋愛関係成立失敗や崩壊に伴う心理的苦痛に共感的に応答し続けた。このカウンセラーによる共感的応答の積み重ねにより，学生は，支配的ではない，適切な自己対象体験をカウンセラーとの間で獲得することができて，自己の発達を再開させたと考えられる。つまり，学生が不適切な自己対象体験をカウンセラーとの新しい適切な自己対象体験によって塗り替えることにより，自己の発達を再開させるために，学生相談カウンセラーが継続的な共感的応答をしたことが効果的であったと考えられる。

第５項　恋愛関係継続時の恋愛問題を抱える女子学生との面接過程

第５章では，恋愛関係を継続するも，交際相手を自分自身とは別個の存在として認識することができない女子学生との面接事例を取り上げ，恋愛関係継続時の恋愛問題を抱える女子学生に対する学生相談での支援のあり方について検討した。

カウンセラーが，交際相手への不満や，学生に依存的な母親への不満に共感的に応答し続けた結果，学生は，母親の期待に合わせるのではなく，学生自身が選んだ交際相手と恋愛関係を構築し，安定的な関係の維持ができるまでの自己へと発達した。また，自己の発達に伴い，修士論文研究もやり遂げて，修士論文を完成させるとともに，就職先の内定を決め，大学院学生期の課題も達成することができた。

本事例の学生は，依存的な養育者との間で自己対象欲求の充足が不足していたために，自己の発達が阻害され，恋愛関係継続時の恋愛問題を抱えるに至ったと考えられる。そこで，カウンセラーが，交際相手への不満，母親から学生の恋愛体験への共感をしてもらえないつらさに共感的応答をし続けた。このカウンセラーによる継続的な共感的応答により，学生は，新たな適切な自己対象体験を得て，母親や交際相手と自分自身とを別個の存在と認識できるほどに自己の発達を再開させることができたと考えられる。つまり，学生が満たされていなかった自己対象欲求を適切に満たし，自己の発達を再開させるために，学生相談カウンセラーが継続的な共感的応答をしたことが効果的であったと考えられる。

第２節　総合的考察

本節では，第５章までの研究で得られた知見を総合的に考察し，学生相談における恋愛相談に対する支援のあり方について考察する。

第１項　恋愛相談の実態

第２章の調査研究結果で示したように，多くの学生は，友人といった身近な信頼のおける他者に恋愛相談をしており，専門家への相談はしていない状況が見られたが，学生相談従事者の多くが恋愛相談に対応した経験をもつことから，実際には，専門家への相談をしている学生がかなり存在していると考えられる。この調査結果の不一致が生じた原因としてはいくつか考えられる。まず，１つめとして，調査対象の学生の自己が比較的安定しているため,友人らによる支援によって解決できていたからであると考えられる。さらには，学生が恋愛に関する悩みを専門家に頼るほど深刻な問題と捉えていないことによるのかもしれない。また，学生相談機関が恋愛相談をできる機関として学生に認識されていないことによって生じたとも考えられる。しかし，第２章での学生相談従事者から寄せられた相談事例内容や，第３章から第５章にかけて検討した事例を見る限り，恋愛問題は決して軽い問題として扱えないことが伺えた。

第２項　学生生活への適応につながる恋愛相談

第３章で取り上げた事例のように，普段は共感的な養育者から共感されることが困難なほどの外傷経験をしたことにより，自己対象欲求の充足の不足が生じ，自己の発達が阻害されることがある。また，第４章で取り上げた事例のように，養育者が支配的であることによって,自己対象体験が不適切となり,自己の発達が阻害される場合もある。さらには，第５章で取り上げた事例のように，養育者が依存的であるために，全般的に自己対象欲求における充足の不足が生じることによって，自己の発達が阻害される場合もある。

いずれにせよ，学生相談カウンセラーは，恋愛問題の背景にある来談学生の自己の発達の阻害状態を把握しつつ，どのような新たな自己対象体験を獲得できれば自己の発達が再開されるのかを見立てて，共感的応答をし続けることが重要であることが見出された。

また，第３章は卒業期，第４章は中間期から卒業期，第５章は学部生期から大学院学生期にわたり学生相談を利用している。第１章で紹介した学生生活サイクルに照らして考えると，事例に登場した３名の女子学生は，学生生活の各段階の課題をこなしつつ，恋愛問題に取り組んでいたことになる。この学生生活の課題を達成するにも自己の安定と発達が求められる。実際，第３章から第５章の事例に登場した女子学生らは，恋愛の発達と自己の発達とともに，学生生活サイクルの各段階での課題を達成することができた。したがって，恋愛問題の解決につながる恋愛の発達と自己の発達は，学生生活の課題達成にも有益であると考えられる。

第３項　学生相談における恋愛相談への支援のあり方

大学生は，学生生活の開始とともに，修学場面にしろ，対人場面にしろ，それまでの生活と異なり，自分自身で決定しなければならない局面に多くさらされるようになると考えられる。そうした自己決定が求められる局面において，大学生は，自分自身が何者であるのか，どのように生きて生きたいのかという問いをもたざるを得ず，借り物ではない独自の答えを生み出す必要に迫られることが推察される。そうした自己を問う作業は，恋愛場面においても求められることが想像できる。したがって,彼らが恋愛問題を抱えることは,

自己の存在の揺らぎにつながる可能性が大きいことを意味すると考えられる。

近代以降，男尊女卑的な関係性が標準的な恋愛関係とされ，女性は男性の付属対象として扱われる傾向にあった（宮野，2016）。また，そうした不均衡な関係性の維持は，支配側にあった男性にとって，関係性を思うままに操ることができることから好都合であったと言える。現代においても，DV やデート DV の被害者として女性が多いことから（内閣府，2018），恋愛関係におけるジェンダー間での不均衡さが色濃く残っていると考えられる。しかし，支配 - 被支配的な関係性でなくても，不均衡な関係性は，その関係性を構築する両者にとって好都合なものであるかもしれない。例えば，依存的な立場に身を置くことによって，「相手が交際を求めてきたので応じただけである」と恋愛関係の選択責任から逃れることができるからである。

第２章で示したように，恋愛の悩み，特に恋愛関係継続時における悩みは，関係の不均衡から生じることが多い。したがって，恋愛問題の解決は，恋愛関係における対等性の獲得にもつながると考えられる。健全な恋愛では，互いの人格を尊重できる対等性を保証されることが重要である。そして，恋愛問題が生じたときには，「私はなぜこの人を選んだのか」「私はなぜこの人と交際を続けているのか」「私はなぜこの人との別れを選んだのか」を問い，自らの恋愛に責任をもつ主体となることが，恋愛問題を解決し，恋愛関係の対等性の獲得につながると考えられる。

以上のことから，学生相談で恋愛相談に応じる際には，恋愛問題が来談学生の自己の存在の揺らぎにつながる危険性をはらむという理解のもと，学生生活に適応させることを考慮しながら，学生の自己の発達により主体性が伸びるよう，共感的な応答を続けることが求められるだろう。

第４項　学生相談における恋愛相談研究の意義

本博士論文において，女子学生における恋愛の発達は自己の発達と連動し，恋愛の発達が，精神的健康，学生生活への適応，そして人格形成に大きな影響を与えることが示された。大学教育の中心は修学であることから，学生相談では修学問題が最も中心的な主訴に位置づけられる（吉良，2010）。しかし，本博士論文からは，学生にとって恋愛問題は，修学問題と同等に深刻な問題になる可能性があり，学生相談で来談学生が訴える恋愛問題は深刻なものが多く含まれていることが示唆された。

1970 年代に入るまで，恋愛に関する心理学研究は皆無であった。その理由として，古畑（1990）は，①愛に関する現象は，広範囲にわたるので研究の焦点を定めがたいこと，②愛に関する研究には社会的タブーなどによる倫理的制約が課されがちであること，③愛に関する研究をする者は，ソフト・サイエンティスト（軽い科学者）とのレッテルを貼られてしまい，研究費を得にくいことが長く続いたことの３点を挙げている。こうした理由によって，学生相談における恋愛相談研究も存在しなかったと考えられる。

第３項で述べたように，近代以降，男尊女卑的な関係性が標準的な恋愛関係とされ，現在においても女性が男性の付属対象として扱われる傾向が根強く残っている（宮野，2016）。こうしたことから，学生相談領域に限らないかもしれないが，先述した従来の指摘に加えて，恋愛関係における不均衡性を容認する社会的背景もあって恋愛相談が研究対象になり

にくかったと考えられる。

本博士論文において示されたように，恋愛問題の解決を求めて学生相談を利用したおかげで，自己を発達させるとともに，恋愛を発達させ，さらには学生生活への適応を遂げる学生が存在する。したがって，学生相談において恋愛相談研究は学生の精神的健康や人格的成長に貢献する意義深いものであると言える。

第３節　本研究の課題と今後の展望

第１項　本研究の課題

本研究では，第２章の第１節において，学生の恋愛の発達と自己の発達との関連を検討した。学生の自己対象体験として，主な養育者からの被受容感を取り上げた。しかし，主な養育者以外の養育者，養育者以外の家族，友人なども，学生が自己対象欲求を向ける対象になると考えられる。今回の調査ではそれらの対象との間での自己対象体験と自己の発達との関連は検討していない。

また，第２章第２節において，学生相談における恋愛相談の実態を把握した。回答した学生相談従事者の多くが恋愛相談に応じていること，また様々な恋愛関係進展度と相談内容の相談を受けていることが把握できた。しかし，恋愛相談をする学生の心理的健康度や適応度や，対応した学生相談従事者の支援の内容とその効果については確認しなかった。

続く第３章から第５章にかけて，恋愛関係成立前，恋愛関係成立時，及び恋愛関係継続時の恋愛問題を抱える女子学生の事例を取り上げて，学生相談カウンセラーの共感的応答の有効性を確認した。恋愛関係進展度には，今回の事例があてはまる段階以外にも，恋愛関係崩壊時や恋愛関係崩壊後が存在するが，それらの事例については検討していない。また，今回取り上げた事例はすべて，「傷ついた自己」のレベルの事例であり，より深刻な病理の自己を示す「崩壊した自己」の学生の事例を取り上げなかった。

さらに，本研究で取り上げた事例は，「自己のための恋愛」から「アイデンティティのための恋愛」への発達支援の事例であった。大野（1995）によれば，恋愛は，「アイデンティティのための恋愛」から「愛」に発達するが，本研究では「アイデンティティのための恋愛」から「愛」への発達を課題とする事例の検討はされなかった。

また，本博士論文の対象を女子学生に絞ったことから，女性以外のジェンダーをもつ学生についての検討はしていない。本博士論文は，恋愛問題に悩む女子学生を対象に研究をおこなったものである。しかし，学生の中には，男性にも女性にも性愛の感情をもたないエイセクシュアル／アセクシュアル（asexual）の者など（葛西，2019），恋愛に関心のない者も存在し，学生であれば恋愛に関心をもつわけではない。本博士論文は，あくまでも恋愛に関心があり，恋愛に悩む一部の学生を対象とする研究に過ぎず，すべての学生に恋愛に関心をもつことを推奨するものではないことを最後に書き添えておく。

第２項　本博士論文が大学教育の発展に果たす意義

第１章で示したように，大学の大衆化により，大学教育では，多様な学生の学生生活への適応と人格的成長が求められている。近年，内界への適応が低下しているかわりに外界に過剰に適応するといった過剰適応を示す学生が目立ち，彼らの多くは大学入学以前にお

いてまわりの期待に応える「いい子」として過ごしてきたことが指摘されている（藤元・吉良，2014)。また，最近の青年の傾向として，自分の存在意義に対する不安が強く，周囲から承認されることへの欲求が高まっているとの指摘もある（斎藤，2013)。さらに，時間をかけて主体的に自分自身の心理的課題に向き合うことを苦手とし，漠然とした苦しみを抱えつつ,行動化や身体化といった不適応を示す学生も増えているとの指摘もある(高石，2009)。これらの指摘を自己心理学的観点から捉えると，近年，自己の発達が未熟であり，自己の不安定さを抱える学生が増えていると言えるだろう。

大学は社会に出る前に教育を受ける最後の機会を与える場である。したがって，大学において，学生が，そのまま社会に出ても適応することができるように，自分らしく人生を歩むことができるための自己の発達と安定を獲得できるようになることが求められる。そこで，大学教育における専門的支援機関の１つである学生相談においても，学生の自己の発達と安定を促すことを目指した支援を行う支援機関として十分に機能を発揮することが重要である。本博士論文はそうした支援の指針の１つを恋愛相談への対応という領域に焦点を当てて示していると考えられる。

第３項　今後の展望

今後の展望としては次の６点が考えられる。

１つめは，主な養育者との間での自己対象体験以外の自己対象体験と自己の発達との関連を含めた，恋愛の発達と自己の発達との関連の検討である。

２つめは，学生相談において恋愛相談をする学生の心理的健康度や適応度の特徴，そして，対応する学生相談従事者の支援の仕方とその効果についての検討である。

３つめは，今回取り上げなかった，恋愛関係崩壊時や恋愛関係崩壊後の恋愛問題を抱える女子学生の事例についても同様の支援のあり方が効果的であるかどうかの検討である。

４つめは，より深刻な病理を示す「崩壊した自己」レベルの学生の恋愛相談に対する支援の仕方についての検討である。

５つめは,「アイデンティティティのための恋愛」から「愛」への発達の課題をもつ学生への学生相談での支援のあり方を検討することである。Frankl(1952)は，真実の愛は，相手がその他の者と代わりえない独自性と一回性であるという体験を通して，身体的あるいは心理的特性の奥にある相手の精神的本質と価値が指向されることを前提とすることから，一夫一婦的な態度になると主張している。これに対して，外見的魅力に惹かれる身体的な恋と，表面的な性格特性に惹かれる心理的な恋は，どちらも，対象の自分自身の都合の良い部分だけを取り上げて恋をしたり，実際以上に対象を美化して恋をしている状態であるため，相手の外面的な特徴の所有欲を基本とした取り換えの可能な非人格的な感情体験であると述べている。また，Kohut は，自己のための対象関係と，対象への愛は区別すべきであると指摘している（Miriam, 1987)。Kohut は，対象への愛とは，自分自身の目的をもった独立した人間としての他者，つまり，自己愛の補償とは無関係の他者を希求する気持ちであると定義している。この Frankl や Kohut の指摘に従えば，青年が示す「自己のための恋愛」や「アイデンティティための恋愛」は，相手の外面的な特徴の所有欲の色彩が含まれるとともに，自己の対象関係という特徴を示していることから，恋から真実の愛

に進化する過程の途中にあたると考えられる。

凝集性のない自己をもつ青年も，凝集性のある自己をもつ青年も，自分自身の独自性と一回性の追求を恋愛問題に向き合うことで，恋愛対象の独自性と一回性の体験を通して，恋愛対象の精神的本質と価値を指向する真実の愛を生きる人間へと成長するためにも，学生相談の役割は重要であると言える。そこで,「アイデンティティのための恋愛」から「愛」へと発達を遂げるための支援が学生相談で求められる場合に，本研究で見出したアプローチが通用するかどうかについても検討することが求められるであろう。

６つめは，女性以外のジェンダーをもつ学生の恋愛相談に対して，本研究で見出した対応のあり方が通用するかの検討である。

引用参考文献

相羽美幸（2011）大学生の恋愛における問題状況の特徴　青年心理学研究，23，19-35.

American psychiatric association(2013) *Diagnostic and statistical manual of mental disorders.*（高橋三郎・大野裕監訳（2014）DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル　医学書院）

青木佐奈枝 (2004) 行動化の多い境界性人格障害女性の面接過程-エンパワメント中心の支援の試み-　心理臨床学研究，21(6)，575-585.

Arias，B.J. & Johonson，C.V. （2013） Treatment of childhood sexual abuse survivors. *Journal of Child Sexual Abuse*，22，822-841.

Arnett, J. (2000) Emerging adulthood: a theory of development from the late teens through the twenties. *American Psychologist*, 55, 469-480.

浅野良輔・堀毛裕子・大坊郁夫（2010）人は失恋によって成長するのか - コーピングと心理的離脱が首尾一貫感覚に及ぼす影響 -　パーソナリティ研究，18(2)，129-139.

Banai, E., Mikulincer, M., & Shaver, P.R.（2005）”Selfobject” needs in Kohut’s self psychology: links with attachment, self-cohesion, affect regulation, and adjustment. *Psychoanalytic psychology*, 22(2), 224-260.

Beebe, B. & Lachmann, F. M. (2002) *Infant research and adult treatment: co-costructing interractions*. The analytic press, Inc., Publishers.（富樫公一監訳（2008）乳児研究と成人の精神分析　誠信書房）

Bruner, M. R., Kuryluk, A. D. & Whitton, S. W. (2015) Attention-deficit/hyperactivity disorder symptom levels and romantic relationship quality in college students. *Journal of American College Health*, 63(2), 98-108.

中央教育審議会（2007）資料 4 - 2　「学士課程教育の構築に向けて」答申（案）（2019 年 10 月 7 日閲覧）

Courtois，C.A. (2010) *Healing incest wound : adult survivors in therapy(second edition).* W.W.Norton & Company，New York.

Cousins, A. J. & Gangestad, S. W. (2007) Perceived threats of female infidelity, male proprietariness, and violence in college dating couples. *Violence and Victim*s, 22(6), 651-668.

Creasey, G. & Ladd, A. (2004) Negative mood regulation expectancies and conflict behaviors in late adolescent college student romantic relationships: The moderating role of generalized attachment representations. *Journal of Research on Adolescence*, 14(2), 235-255.

独立行政法人日本学生支援機構（2007）大学における学生相談体制の充実方策について－「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」－　独立行政法人日本学生支援機構.

Erikson, E. H. (1950) Childhood and society. New York: Norton.（仁科弥生（訳）（1977）幼児期と社会　みすず書房）

Erikson, E. H. (1959) *Identity and the life cycle. (Psychological Issues Vol.1. Monogragh1.)* New York: International University Press.（西平　直・中島由恵（訳）（2011）アイデンティティとライフサイクル　誠信書房）
藤元慎太郎・吉良安之（2014）青年期における過剰適応と自尊感情の研究　九州大学心理学研究，15，19–28.
福田真也（2007）大学教職員のための大学生のこころのケア・ガイドブック　金剛出版.
Frankl,V. E. (1952) *Aerzliche Seelsorge.* Verlag Deyticke Wien.（霜山徳爾（訳）（1985）死と愛 - 実存分析入門 -　みすず書房）
Fromm, E. (1956) *The art of loving*. New York: Harper & Brothers Publishers. （鈴木晶（訳）（1991）愛するということ　新訳版　紀伊国屋書店）
古畑和孝（1990）“愛”の特集号の編集にあたってー愛の心理学への序説ー　心理学評論，33（3），257-272.
Goldberg, A. (1980) Self psychology and the distincteness of psychotherapy, International *Journal of Psychoanalytic Psychotherapy,* 8, 57-70.
羽間京子（2002）治療的 Splitting について-非行少年の事例を通して-　心理臨床学研究，20(3)，209-220.
濱中義隆（2013）多様化する学生と大学教育　シリーズ大学２　大衆化する大学 - 学生の多様化をどうみるか　岩波書店，47-74.
原田和典（2005）親との自己対象体験と自己構造の関連性についての実証的研究　心理臨床学研究，23(4)，434-444.
原田和典（2006）青年期における自己対象関係による支えについての実証的研究 - 半構造化面接による人生のふりかえりから -　青年心理学研究，18，19-40.
Hendy, H. M., Can, S. H., Joseph, L. J., & Scherer, C. R. (2013) University students leaving relationships (USLR): scale development and gender differences in decisions to leave romantic relationships. *Measurement and Evaluation in Counseling and Development,* 46(3), 232-242.
Herman，J.L. (1992) *Trauma and Recovery*.　Basic Books.（中井久夫訳（1999）心的外傷と回復　みすず書房）
Holmes,T.H. & Rahe,R.H. (1967) The Social ReattuStrrlent　Rating　Scale. *Journal of Psychosomatic Research*, 11, 213-218.
穂積純（1994）甦える魂．高文研.
穂積純（1999）解き放たれる魂．高文研.
穂積純（2004）拡がりゆく魂．高文研.
伊福麻希・徳田智代（2008）青年に対する恋愛依存傾向尺度の再構成と信頼性・妥当性の検討　久留米大学心理学研究，7，61-67.
井ノ崎敦子・葛西真記子（2019）国内外における大学生の恋愛に関する心理学的研究の動向 ： 学生相談における恋愛問題解決支援のあり方の探求　鳴門教育大学学校教育研究紀要 33 号, 27-33.
井ノ崎敦子・葛西真記子（2020）大学生の恋愛の発達と自己の発達との関連 ： 自己心理学

的観点による分析と恋愛相談との関連　鳴門教育大学学校教育研究紀要 34 号, 1-8.
石川英夫（1994）大学生の恋愛観　東京経済大学人文自然科学論集，39，11-19.
岩壁茂（2010）　ケース・マトリックスを使った事例の比較　岩壁茂著　はじめて学ぶ臨床心理学の質的研究-方法とプロセス-　岩崎学術出版社，144-153.
岩田淳子（2010）対人関係に関する相談　日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会（編）学生相談ハンドブック　学苑社，77-80.
Jersild，A.T.（1955）*When teachers face themselves.* Teachers College Press, Teachers College.（船岡三郎訳　1975　自己を見つめる―不安の解決と共感　創元社.）
上地雄一郎・宮下一博（2005）コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成　パーソナリティ研究，14(1)，80-91.
上地雄一郎・宮下一博（2009）対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性，自己不一致，自尊感情の関連性　パーソナリティ研究，17(3)，280-291.
神谷真由美・岡本祐子（2012）青年期の自己愛的脆弱性と心理社会的課題の達成感覚との関連　心理臨床学研究，30(4)，571-576.
神谷真由美・岡本祐子（2014）青年期の自己愛的脆弱性と親との自己対象体験との関連　心理臨床学研究，31(6)，881-892.
葛西真記子（2019）用語解説　葛西真記子編著　LGBTQ＋の児童・生徒・学生への支援　誠信書房，201-203.
笠井さつき（2002）女性セラピストの妊娠が心理療法に及ぼす影響-3 事例の報告を中心として-　心理臨床学研究，20(5)，476-487.
片田珠美（2012）なぜ,「怒る」のをやめられないのか - 「怒り恐怖症」と受動的攻撃 - 光文社新書.
川喜田二郎（1970）続・発想法　中央公論新社.
河野和明・羽成隆司・伊藤君男（2015）恋愛対象者に対する接触回避　パーソナリティ研究，24(2)，95-101.
木村敏（1994）心の病理を考える　岩波書店.
吉良安之（2010）修学上の問題　日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会（編）学生相談ハンドブック，学苑社，71-74.
Kohut, H.（1977）*The restoration of the self.* International Universities Press. 本城秀次・笠原嘉監訳（1995）自己の修復　みすず書房）
Kohut, H.（1984）*How does analysis cure?*　The University of Chicago Press.（本城秀次・笠原嘉監訳（1995）自己の治癒　みすず書房）
髙坂康雅（2010）大学生及びその恋人のアイデンティティと“恋愛関係の影響”との関連　発達心理学研究，21(2)，182-191.
髙坂康雅（2011）青年期における恋愛様相モデルの構築　和光大学現代人間学部紀要，4，79-89.
髙坂康雅（2013a）青年期における“恋人を欲しいと思わない”理由と自我発達の関連　発達心理学研究，24(3)，284-294.

高坂康雅（2013b）大学生におけるアイデンティティと恋愛関係との因果関係の推定 ：恋人のいる大学生に対する 3 波パネル調査　発達心理学研究　24(1)，33-41.
髙坂康雅（2014）大学生の恋愛関係の継続／終了によるアイデンティティの変化　青年心理学研究，26，47-53.
髙坂康雅・小塩真司（2015）恋愛様相尺度の作成と信頼性・妥当性の検討　発達心理学研究，26，225-236.
高坂康雅（2016a）日本における心理学的恋愛研究の動向と展望　和光大学現代人間学部紀要，9，5-17.
髙坂康雅（2016b）恋愛心理学特論 - 恋愛する青年／しない青年の読み解き方　福村出版
Kuperberg, A., & Padgett, J. E. (2016). The role of culture in explaining college students' selection into hookups, dates, and long-term romantic relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, 33(9), 1070-1096.
栗林克匡（2013）出会い，告白　大坊郁夫・谷口泰富編　現代社会と応用心理学２　クローズアップ恋愛　福村出版，123-131.
Lascano, D. I. V., Galambos, N.L. & Hoglund, W. L. (2014) Canadian youths' trajectories of psychosocial competencies through university: Academic and romantic affairs matter. *International Journal of Behavioral Development*, 38(1), 11-22.
Levinger, G. (1980) Toward the analysis of close relatisionships. *Journal of Experimental Social Psychology,* 16, 510-544.
Lichtenberg, J. D., Lachmann, F. M. & Fosshage, J. L. (2010) *Psychoanalysis and Motivational Systems: A New Look.* New York: Routledge.
Lopez, F. G., Siffert, K. J., Thorne, B., Schoenecker, S., Castleberry, E., & Chaliman,R（2013）Probing the relationship between selfobject needs and adult attachment orientations. *Psychoanalytic Psychology*, 30(2), 247-263.
Mann Gabriela (2015) The selfobject function revisited: Reaching out beyond the individual. *International Journal of Psychoanalytic Self Psychology*, 10(3), 212-223.
Miriam, E (1987) *The Kohut seminars on self psychology and psychotherapy with adolescents and young adults*. W.W. Norton & Company （伊藤洸監訳（2017）コフート自己心理学セミナー１　金剛出版）
三谷洋美（2008）卒業期に「表現する」ことの意味―自傷行為に悩んだ援助職専門学校生の学生相談事例―　心理臨床学研究，26(3)，279-289.
宮地尚子　2013　トラウマ．岩波新書.
宮野真生子（2016）近代日本における「愛」の変容　藤山尚志・宮野真生子編　愛・性・家族の哲学①　愛－結婚は愛のあかし？－　ナカニシヤ出版，171–205.
水谷友吏子（2007）否定的母親像にとらわれていた女子学生が示した自立の意味 - 娘から成熟した女性への変容過程 -　学生相談研究，27，216-226.
仲嶺真（2015）大学生における街中での異性関係開始 - 男女間の相互作用に着目して -　応用心理学研究，41(1)，77-86.
Nehrig, N., Ho, S. S. M., & Wong, P. S. (2019) Its relationship to narcissism, attachment,

and childhood maltreatment. *Psychoanalytic Psychology,* 36(1), 53-63.
西平直喜（1981）友情・恋愛の探究　大日本図書.
野口康彦（2008）父親の自殺を経験した統合失調症の女子学生の卒業期における心理過程の一考察　学生相談研究，29(3)，218-227.
野坂祐子（2013）保護者に対する心理教育　藤森和美・野坂祐子編　子どもへの性暴力―その理解と支援―　誠信書房，87-101.
布柴靖枝（2012）青年期女子の自傷行為の意味の理解と支援 - 行動化を繰り返しつつ，自分らしさを模索していった女子学生の危機介入面接過程を通して -　学生相談研究，33，13-24.
岡本正子・山本恒雄（2013）性的虐待　精神科，23，517-528.
小此木啓吾（1977）フロイト精神分析入門　有斐閣新書.
大野久（1995）青年期の自己意識と生き方　落合良行・楠見孝（編）　講座　生涯発達心理学　第４巻　自己への問い直し - 青年期　金子書房，89-123.
大野久（1999）人を恋するということ　佐藤有耕（編）　高校生の心理：①広がる世界　大日本図書，63-75.
大野久（2010）青年期の恋愛の発達　大野　久（編）　シリーズ生涯発達心理学：4　エピソードでつかむ青年心理学　ミネルヴァ書房，77-105.
太田幸治（2009）就労希望の精神障害者に対する心理的援助としての訪問面接-面接過程の考察を中心に -　心理臨床学研究，26(6)，652-662.
Perliz Daniel (2016) Beyond Kohut: From empathy to affection. *International Journal of Psychoanalytic Self Psychology*, 11(3), 248-262.
Rodriguez, L. M., Overup, C. S., Wickham, R. E., Knee, C. R., & Amspoker, A. B. (2016) Communication with former romantic partners and current relationship outcomes among college students. *Personal Relationships*, 23, 409-424.
齋藤憲司(2010)学生相談の理念と歴史　日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会(編)　学生相談ハンドブック　学苑社，10-29 .
斎藤環（2013）承認をめぐる病　日本評論社.
佐藤史（2013）性的虐待の発見と子どもへの影響　藤森和美・野坂祐子編　子どもへの性暴力―その理解と支援―　誠信書房，31-43.
Sherrell, R. S., & Lambie, G. W. (2016) A qualitative investigation of college students' Facebook usage and romantic relationships: Implication for college counselors. *Journal of College Counseling,* 19, 138-153.
志堂寺和則（2008）共分散構造分析　日本食品科学工学会誌，55(12), 645-646.
Siebenbruner, J. (2013) Are college students replacing dating and romantic relationships with hooking up? *Research in Brief*, 54(4), 433-438.
Siegel, A. M. (1996) *Heinz Kohut and the psychology of the self*. Routledge.（岡秀樹訳 2016　コフートを読む　金剛出版）
Silva, E., Machado, B. C., Moreira, C. S., Ramalho, S., & Goncalves, S. (2017) Romantic relationships and nonsuicidal self-injury among college students: The mediating

role of emotion regulation. *Journal of Applied Development Psychology*, 50, 36-44.
Stolorow, R.D., Bernard, B., & Atwood, G. E. (1987) *Psychoanalytic treatment: An intersubjective approach. Hillsdale,* HJ: Analytic Press.（丸田俊彦訳（1995）間主観的アプローチーコフートの自己心理学を超えてー　岩崎学術出版社）
Stolorow, R. D. (2007) *Trauma and human existence: autobiographical, psychoanalytic, and philosophical reflections.* Taylor & Francis Group, LLC.（和田秀樹訳（2009）トラウマの精神分析―自伝的・哲学的省察―　岩崎学術出版社）
杉村和美（1998）青年期におけるアイデンティティの形成 ： 関係性の観点からのとらえ直し　発達心理学研究，9(1)，45-55.
杉村和美（2001）関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求：２年間の変化とその要因　発達心理学研究，12(2)，87-98.
杉山崇・坂本真士（2006）抑うつと対人関係要因の研究--被受容感・被拒絶感尺度の作成と抑うつ的自己認知過程の検討　健康心理学研究 19(2), 1-10.
杉山登志郎（2008）性的虐待のトラウマの特徴　トラウマティック・ストレス，4，5-14.
Summers, Frank (2014)　The bounds of empathy: Beyond the selfobject concept. *International Journal of Psychoanalytic Self Psychology,* 9(3), 222-236.
鈴木恵美子（2010）アトピー性皮膚炎治療を巡る親子の意識　岩壁茂著　はじめて学ぶ臨床心理学の質的研究-方法とプロセス-　岩崎学術出版社，212-221.
鈴木健一（2010）学生生活への適応　日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会（編）学生相談ハンドブック　学苑社，41-47 .
高石恭子（2009）現在学生のこころの育ちと高等教育に求められるこれからの学生支援. 京都大学高等教育研究，15，79–88.
玉瀬耕治・上松幸一（1996）カウンセリングにおける助言の受け入れ可能性の評定に関する研究　奈良教育大学紀要，45(1)，133-149.
谷口淳一（2013）恋愛しない・できない若者たち　大坊郁夫・谷口泰富編　現代社会と応用心理学２　クローズアップ恋愛　福村出版，82-91.
富樫公一（2000）自己喪失・自己断片化を伴う境界例の事例における交換日記の利用　心理臨床学研究，18（1），81-92.
富樫公一（2009）「覚悟」の自己心理学的考察－蒼古的自己愛空想からの脱錯覚過程 -　心理臨床学研究，27（4），432-443.
鶴田和美（2001）学生生活サイクルとは　鶴田和美編　学生のための心理相談―大学カウンセラーからのメッセージ―　培風館，2-11.
鶴田和美（2005）学生相談の経験にともなう事例研究の変化　心理臨床学研究，23，12-21.
鶴田和美（2006）大学院生への支援　臨床心理学，6(2)，217-220.
鶴田和美（2008a）大学院学生期の学生相談で使われる比喩　名古屋大学学生相談総合センター紀要，8，11-19.
鶴田和美（2008b）学生相談と学生支援／療学援助／学生生活サイクル　臨床心理学，8(4)，604-606.

鶴田和美（2010）学生生活サイクル　日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会（編）学生相談ハンドブック　学苑社，34-41 .
内田利広（2018）母と娘の心理臨床 - 家族の世代間伝達を超えて -　金子書房.
鵜飼昌男（2019）高大接続から見た大学の初年次教育のあり方について：入試が選抜機能を十分果たさない現状に対する提案　関西大学高等教育研究，10，37-46.
和田実（2000）大学生の恋愛関係崩壊時の対処行動と感情および関係崩壊後の行動的反応 - 性差と恋愛関係進展度からの検討 -　実験社会心理学研究，40(1)，38-49.
和合香織（2011）学生相談室の多面的利用についての考察 - 個別面接・グループワーク・ミーティングルームの利用を通して -　学生相談研究，32，60-71.
Wolf, E. S. (1988) *Treating the self: Elements of Clinical Self Psychology.* The Guilford Press.（安村直己・角田豊訳（2016）新装版　自己心理学入門-コフート理論の実践-金剛出版）
山口智子（2001）学生相談における時間的・空間的特性を活かした関わりの工夫―卒業期の傷つき体験の語りと自己の修復―　学生相談研究，22(1)，44-52.
山中亮（2014）青年期の故人との関係性の変容過程に関する一考察 - 恋人との死別を体験した女子学生との面接過程 -　心理臨床学研究，31(6)，999-1009.
山下親子（2011）学生相談独自の面接構造における発達促進的なかかわりの意義 - 境界例水準の人格構造を有した学生との 5 年間にわたる面接過程をもとに -　心理臨床学研究，29(2)，165-176.
山﨑篤（2012）生涯発達において“選択する主体を抱える”カウンセラーの態度　心理臨床学研究，30(2)，217-227.
安福純子（2001）大阪教育大学における学生相談に関する基礎的研究（第 2 報）- 女子大学院生の問題 -　大阪教育大学紀要第Ⅳ部門，49，267-276.
安村直己（2016）共感と自己愛の心理臨床 - コフート理論から現代自己心理学まで -　創元社.
吉井健治（2005）自己の傷つきの修復における自己対象体験 - 支配的な夫への服従から自己の傷つきをもった女性の事例 -　心理臨床学研究，23(2)，173-184.

資料・付録

資料１　予備調査質問紙「養育者との関係性に関する調査」・・・・・・・・・・・・・ii
資料２　本調査質問紙「大学生の対人関係に関するアンケート調査」・・・・・・・・iv
資料３　学生相談における恋愛相談に関する実態調査で使用した依頼書・・・・・ xi
資料４　学生相談における恋愛相談に関する実態調査で使用した承諾書・・・・・ xii
資料５　学生相談における恋愛相談に関する実態調査で使用した説明文書・・・・ xiii
資料６　本調査質問紙「学生相談における恋愛相談に関する実態調査」・・・・・・xv
資料７　表 10 恋愛関係成立前の事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ xviii
資料８　表 11 恋愛関係成立時の事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ xix
資料９　表 12 恋愛関係継続時の事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ xx
資料 10 表 13 恋愛関係崩壊時の事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ xxi
資料 11 表 14 恋愛関係崩壊後の事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ xxii
資料 12 表 15 その他の事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ xxiii

養育者との関係性に関する調査

兵庫教育大学大学院連合学校教育研究科
博士課程２年　井ノ崎　敦子

この調査は，貴方の養育者との関係性についてお伺いするものです。結果を統計的に処理いたしますので，公表時に個人が特定されることはありません。協力されなくても一切不利益を被ることはありません。同意いただける方は，以下の質問項目に回答し，2月28日（木）までに院生室内に設置した回収ボックスに投函していただけると有難く存じます。

１）あなたの年齢についてお答えください。

１ 20代　　２ 30代　　４ 40代　　５ 50代　　６ 60代以上

２）あなたの性別についてお答えください。

１ 男性　　２ 女性　　３ その他（具体的に　　）

３）生まれてから現在まで，主に養育してくれた人を以下の中から１人選んでください。

１ 母親　　２ 父親　　３ 祖母　　４祖父　　５その他（具体的に　　）

４）上記で選んだ主な養育者についてお尋ねします。次の文章について，普段のあなた自身にどの程度あてはまりますか？あてはまる番号に〇をつけて下さい。

		全く当てはまらない	やや当てはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	よくあてはまる
1	私は受け容れられている	1	2	3	4	5
2	私は信頼されている	1	2	3	4	5
3	私は理解されている	1	2	3	4	5
4	私が行くと喜ばれる	1	2	3	4	5

5	私は認められている	1	2	3	4	5
6	私は大切にされている	1	2	3	4	5
7	主な養育者は私に快く応えてくれる	1	2	3	4	5
8	私に優しくしてくれる	1	2	3	4	5

ご協力有難うございました。

大学生の対人関係に関するアンケート調査

この調査は，大学生の皆様が日ごろ対人関係で経験されていることをお伺いするためのものです。

本調査は無記名で行い，結果の処理は統計的に行いますので，個人や大学名等が特定されることはありません。また，回答用紙は厳重に保管し，研究終了から５年経過後には廃棄いたします。この調査に協力しないことで何ら不利益をこうむることはありません。

また，回答を始めた後，気分が悪くなった場合は，途中で回答をやめていただいて結構です。なお，本研究の結果については，2019 年 6 月下旬頃にフィードバックさせていただきます。

本調査についてご不明な点などございましたら，下記までお問い合わせください。

＜問い合わせ先＞
兵庫教育大学連合大学院　学校教育研究科
博士課程　井ノ崎　敦子

質問１．あなたの年齢，学年，性別について教えてください。

年齢　（　　）歳

学年　（　　）年

性別　　男性　・　女性　・　その他（具体的に　　）＊性別は○で囲んでください。

質問２．回答に正しい答えや間違った答えがあるわけではないので，質問項目に対して自分が当てはまるところに○をつけてください。質問項目の意味が分りにくいところは，あなた自身の判断で記入してください。
記入もれがないようにお願いします。

		全く当てはまらない	ほとんど当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらでもない	やや当てはまる	かなり当てはまる	たいへん当てはまる
1	自分のことよりも他人のことが気になる	1	2	3	4	5	6	7
2	傷ついたときには人恋しくなる	1	2	3	4	5	6	7
3	自分がどう感じているかよくわからないときがある	1	2	3	4	5	6	7
4	自分の周りには極めて特別な人物が多い	1	2	3	4	5	6	7
5	私の周りにいる人は常に私の欲求を満たしてくれる	1	2	3	4	5	6	7
6	自分を一つのまとまりとして感じない	1	2	3	4	5	6	7
7	自分の周りには意見の合う人が多い	1	2	3	4	5	6	7
8	どこかに私を認めてくれる人がいる	1	2	3	4	5	6	7
9	本当の自分を誰かに知っておいてもらわないと落ち着かない	1	2	3	4	5	6	7
10	今までの人生で熱中できたものはほとんどない	1	2	3	4	5	6	7
11	何をしても決して満たされない自分がいる	1	2	3	4	5	6	7
12	気分が沈みがちである	1	2	3	4	5	6	7

13	ちょっとでも馬鹿にされた気がすると決して我慢できない	1	2	3	4	5	6	7
14	少しでも他人から批判されたりすると気分が大きく落ち込んでしまう	1	2	3	4	5	6	7
15	世の中にはくだらない人が多すぎる	1	2	3	4	5	6	7
16	集中力が続かない	1	2	3	4	5	6	7
17	親しい人に自分の価値観に合わないところを見つけてしまうとがっかりする	1	2	3	4	5	6	7
18	世の中は敵意に満ちている	1	2	3	4	5	6	7
19	他人が思うように応じてくれないと不愉快である	1	2	3	4	5	6	7
20	人と親しくなると，その人なしではいられなくなる	1	2	3	4	5	6	7
21	自分に対して激しい嫌悪感を抱いてしまう	1	2	3	4	5	6	7
22	自分を認めてくれる人に頼ってしまう	1	2	3	4	5	6	7
23	自分には何かを成し遂げられる力がある	1	2	3	4	5	6	7
24	自分をぼんやりとしか感じられないときがある	1	2	3	4	5	6	7
25	世の中に対して不満を感じている	1	2	3	4	5	6	7
26	一瞬たりとも不幸でありたくない	1	2	3	4	5	6	7
27	気分が沈んでいるときには他人に助けてもらいたくなる	1	2	3	4	5	6	7
28	完璧に物事をこなせないならば，やらないほうがましだ	1	2	3	4	5	6	7
29	今の自分とは違う自分になりたい	1	2	3	4	5	6	7
30	自分は価値のない人間だと感じてしまうことがある	1	2	3	4	5	6	7
31	口に出して言わなくても相手に自分の気持ちをわかってもらいたい	1	2	3	4	5	6	7
32	自分が話したいときに話を聞いてくれる人がいる	1	2	3	4	5	6	7
33	他人からほめられていないと不安を感じてしまう	1	2	3	4	5	6	7

質問３．生まれてから現在まで，主に養育してくれた人を以下の中から１人選んでください。

１　母親　２　父親　３　祖母　４　祖父　５　その他（具体的に　　）

質問４．「質問３」で選んだ主な養育者についてお尋ねします。次の文章について，普段のあなた自身にどの程度あてはまりますか？あてはまる番号に〇をつけてください。

		全く当てはまらない	やや当てはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	よくあてはまる
1	私は受け容れられている	1	2	3	4	5
2	私は信頼されている	1	2	3	4	5
3	私は理解されている	1	2	3	4	5
4	私が行くと喜ばれる	1	2	3	4	5
5	私は認められている	1	2	3	4	5
6	私は大切にされている	1	2	3	4	5
7	私に快く応えてくれる	1	2	3	4	5
8	私に優しくしてくれる	1	2	3	4	5

質問５．あなたは，これまでに付き合った（交際）経験がありますか。あてはまる番号に〇をつけてください。

１．はい　　２．いいえ

質問５で「１．はい」に〇をつけた方　→　質問６と質問７に回答してください。
質問５で「２．いいえ」に〇をつけた方　→　質問７に回答してください。

質問６．両側に文章が並んでいます。あなたが恋人とつきあっている時の考えや行動は，左右どちらの文章によりあてはまっていますか？たとえば，右側の文章と比較して，左側の文章の方がわりとあてはまっていると思う場合には，２「わりと」に〇をつけてください。

		かなり	わりと	どちらかといえば	どちらかといえば	わりと	かなり	
1	恋人と他の異性／同性（恋愛対象）を比較すると，他の異性／同性（恋愛対象）の方が良く見え，がっかりすることがある	1	2	3	4	5	6	恋人の良いところは，他の異性／同性（恋愛対象）と比較するまでもなく，十分にわかっている
2	恋人が，私に気兼ねなく，やるべきことに専念できるように支えている	1	2	3	4	5	6	恋人には，何をしているときでも，私のことを気にかけてくれるよう求めている
3	恋人と過ごす時間を減らしたくないので，新しいことには取り組まないようにしている	1	2	3	4	5	6	恋人との関係を拠り所として，新しいことにも積極的に取り組もうとしている
4	私の理想とは関係なく，恋人はそのままで魅力的である	1	2	3	4	5	6	恋人を見ていると，自分の理想に合わないところをつい探してしまう
5	恋人が仕事や勉強などに熱心になっていると，私は放っておかれているようで不安になる	1	2	3	4	5	6	恋人が仕事や勉強に熱心になっているとき，私が放っておかれても，素直に応援できる
6	恋人がいるからこそ，仕事や勉強に集中して取り組むことができている	1	2	3	4	5	6	恋人のことばかり考えてしまい，仕事や勉強がおろそかになる
7	恋人の欠点をみつけると，私の理想から遠のいた気がして落ち込む	1	2	3	4	5	6	恋人の欠点をみつけても，恋人の新たな一面を発見したようで嬉しくなる

8	恋人が忙しくても，恋人が活動に集中できるように，さまざまな面でサポートしている	1	2	3	4	5	6	恋人が忙しいと，一緒にいられないので，悲しくなる
9	恋人とつきあっていると，仕事や勉強，他の人とのつきあいに対する関心や意欲が減る	1	2	3	4	5	6	仕事や勉強，他の人とのつきあいで苦労しても，恋人のことを思い出すと，頑張ろうという気になる
10	短所や欠点も含めて，恋人に十分満足している	1	2	3	4	5	6	恋人の長所や良い面には満足しているが，短所や欠点は見ないようにしている
11	私ともっと多くの時間を一緒に過ごすために，恋人には他の活動に時間や労力は費やさないでほしい	1	2	3	4	5	6	恋人が他の活動に熱心に取り組むために，自分の時間や労力は惜しまず協力している
12	恋人からの支えを得て，日々の生活を意欲的に過ごすことができている	1	2	3	4	5	6	生活の中心は恋人であり，恋人の要望や都合にあわせた生活を送っている
13	恋人よりも，もっと自分にふさわしい異性／同性（恋愛対象）がいるのではないかと思い，つい他の異性／同性（恋愛対象）を比較してしまう	1	2	3	4	5	6	恋人以上に自分にふさわしい異性／同性（恋愛対象）はどんなに探してもおらず，恋人の代わりになる異性／同性（恋愛対象）はいないと思う
14	恋人がさまざまな行動や人とのつきあいを今よりもできるように，積極的に協力している	1	2	3	4	5	6	私との時間を大切にしてもらうために，恋人にはさまざまな行動や人とのつきあいを今よりも減らしてほしい

質問７．下記のそれぞれの質問項目について，あなたの考えに最も近いものを選んでください。

（１）恋愛で悩んだことはありますか？あてはまる数字に〇をつけてください。

１．はい　　２．いいえ

↓　　↳「いいえ」を選んだ方は以上で終わりになります。お疲れ様でした。

（２）（１）で「１．はい」と回答した方にお尋ねします。

それは以下のうちのどのような内容でしたか？　あてはまるすべての項目の前の□にチェックを入れてください（複数回答可）。

□　異性／同性（恋愛対象）が怖い
□　恋愛を成就させることが難しい
□　恋愛を成就させたあと，交際を続けることが難しい
□　その他（具体的に：　　）

（３）（１）で「１．はい」と回答した方にお尋ねします。
恋愛で悩んだときに，誰かに相談したことがありますか。

１．はい　　２．いいえ

（４）（３）で「１．はい」と回答した方にお尋ねします。
誰に相談したことがありますか？相談したことのある相手をすべて選び，その前の□にチェックを入れて
ください（複数回答可）。

□　同性の友人
□　異性の友人
□　家族
□　先輩・後輩
□　先生
□　専門家（いずれかを選んでください：カウンセラー・その他（　　）
□　その他（具体的に：　　）

（５）（３）で「１．はい」と回答した方にお尋ねします。
相談するときは，どのようなことを求めますか？あてはまる項目すべての前の□にチェックを入れてください（複数回答可）。

□　気持ちを受けとめて，理解してほしい
□　アドバイスがほしい
□　解決のために一緒に行動してほしい
□　つらさを慰めてほしい
□　経験談を聞かせてほしい
□　専門的な立場からの意見を聞きたい
□　その他（具体的に：　　）

本調査で何かお気づきのことなどがありましたら，お書きください。

ご協力いただき，有難うございました。
2019 年　4 月　吉日

学生相談機関長　殿

徳島大学キャンパスライフ健康支援センター
講師　井ノ崎敦子

「学生相談における恋愛相談に関する実態調査」の研究協力について（依頼）

春暖の候，貴機関ますますご繁栄のこととおお慶び申し上げます。
私は徳島大学キャンパスライフ健康支援センターで専任カウンセラーをしている，井ノ崎敦子と申します。
このたび，学生相談に求められる学生の恋愛問題解決の専門的支援のあり方を把握するために全国調査を実施することにいたしました。
下記の内容をお読みいただき，研究に対するご承認を頂きます様，お願い申し上げます。
ご承諾を頂きました折りには，別紙承諾書にご署名いただき，**5 月 31 日（金）までに**同封の返信用封筒でご返送いただきますようお願い申し上げます。

記

１　研究テーマ
学生相談における恋愛相談に関する実態調査

２　研究責任者
徳島大学　キャンパスライフ健康支援センター
講師　井ノ崎　敦子

３　研究目的
学生の恋愛問題を解決する専門的支援機関として学生相談機関に求められる役割を把握することを目的としています。

４　研究方法
全国の 4 年制大学 786 校の学生相談機関で学生相談に従事する教職員 786 人を対象に，2019 年 4 月から 5 月にかけて郵送法によるアンケート調査を実施いたします。本アンケート調査は，学生相談における恋愛問題に対する対応経験に関してお伺いするものです。
全研究期間は，2019 年 4 月から 9 月までとしています。収集した情報・データは，研究終了後 3 年間，研究責任者が所属する徳島大学キャンパスライフ健康支援センター総合相談部門内の施錠可能なロッカーに保管し，保管期間終了後はシュレッダーにて廃棄します。

５　研究責任者連絡先
〒770-8502　徳島県徳島市南常三島町１－１
徳島大学キャンパスライフ健康支援センター総合相談部門

以上

研究協力承諾書

年　　月　　日

徳島大学キャンパスライフ健康支援センター
井ノ崎　敦子　殿

学生相談機関名

学生相談機関長　　印

下記の研究について，当施設で実施することを承諾します。

記

1　研究テーマ

学生相談における恋愛相談に関する実態調査

2　研究責任者

住　　所　　〒770-8502　徳島県徳島市南常三島町１－１
名称・職名　徳島大学キャンパスライフ健康支援センター　講師
氏　　名　　井ノ崎　敦子

学生相談に従事する教職員の方へ

「学生相談における恋愛相談に関する実態調査」についての説明文書

１．　臨床研究について

あなたに参加をお願いする研究は，「臨床研究」と呼ばれるもので，実際に相談業務に携わる教員が，臨床心理学的必要性や重要性を検討したうえで作成した研究計画に従って実態把握をすることを目的とした研究です。研究の名称及び当該研究の実施について研究機関の長の許可を得ております。

２．　本研究の意義，目的

本研究では，学生相談機関における恋愛相談の実態を把握し，恋愛問題を解決する専門的支援として求められている役割を明確にすることを目的としています。

３．　研究対象者として選定された理由、参加予定の本研究の対象と本学の対象例数

学生相談に従事する教職員が実際にどのような恋愛相談を受けているのかを把握するために，全国の 4 年制大学 786 校の学生相談機関で学生相談に従事する教職員を対象としています。

４．　研究方法

本研究では，相談機関長に依頼文にて研究協力を依頼し質問紙を送付しています。お送りした質問紙では，学生相談における恋愛問題に対する対応についてどのようなご経験をされているかについてお尋ねしています。質問項目は，恋愛問題を訴えた来談者数とその相談内容に関するもので構成されています。回答は強制ではありませんので，協力していただく方の意思で回答するかどうかお選びいただきたいと存じます。説明文にて同意をした場合は，同封の質問紙の同意確認欄へのチェックで同意の意思を示した上，回答後，返信用封筒にて **5 月 31 日（金）まで**に郵送していただきます。回答時間は約 20 分です。なお，研究期間は，2019 年 4 月から 2019 年 9 月としております。

５．　情報・データ等の保存及び使用方法並びに保存期間

収集した情報・データは，研究終了後 3 年間，研究責任者が所属する徳島大学キャンパスライフ健康支援センター総合相談部門内の施錠可能なロッカーに保管します。保管期間終了後はシュレッダーにて廃棄します。本研究以外には使用いたしません。

６．　本研究の倫理的配慮

同意取得に当たっては，研究責任者が作成した説明文書を用いて研究の内容等を説明し，同意を得させていただきます。無記名で提出していただくことから，提出後に撤回することはできませんので，ご了承ください。

本研究への参加は任意であり，本研究への参加に同意しないことをもって不利益な対応

を受けることはありません。

本研究の実施について研究機関の長の許可を受けています。研究に協力していただいた方が希望されれば,ご自身の個人情報保護や本研究の独創性の確保に支障がない範囲内で、本研究計画及び本研究の方法に関する資料を入手又は閲覧できます。本研究は、徳島大学臨床研究倫理審査委員会の承認を得て実施しております。

７．　本研究に参加することによって生じる負担並びに予測されるリスク及び利益

研究に参加することで調査対象者に支援当時の心理的苦痛が蘇るなど心身等の負担が生じることを鑑み，途中で回答をやめていただいて構いません。また，本研究に起因して，研究対象者に心理的な負担など何らかの健康被害が生じた場合には，心理的サポートを行ないます。

８．　個人情報の取扱い

研究対象者を研究対象者識別コードで特定する等，被験者のプライバシーを保護します。また，本研究の結果を公表する場合も同様に研究対象者のプライバシーを保護します。

９．　公表について

研究対象者を特定できないように対処した上で，本研究の成果が公表いたします。

１０．　研究対象者の費用負担の有無に関すること，謝礼について

本研究に参加することによる謝礼はございません。

１１．　本研究に係る資金源，起こり得る利害の衝突及び研究者等の関連組織との関わり

本研究における特別な研究資金はありません。本研究は，本院の研究費のみを使用して実施されます。本研究の利害関係については，徳島大学臨床研究利益相反審査委員会の審査を受け，承認を得ております。

１２．　本研究責任者及び研究者の氏名，職名並びに連絡先

【研究責任者】徳島大学キャンパスライフ健康支援センター　講師　井ノ崎敦子
【問い合わせ先】　〒770-8502　徳島県徳島市南常三島町１－１
徳島大学キャンパスライフ健康支援センター総合相談部門

学生相談における恋愛相談に関する実態調査　質問紙

【同意意思表示】調査協力に同意いただける方は，下の文章の前の□にチェックを入れてください。

□　私は，本調査に関する説明文書を読み，本調査に回答することに同意しま

回答者様の属性や職場のことについてお尋ねします。

問１　回答者様の性別をお答えください。

１　男性　　２　女性　　３　その他（　　）

問２　回答者様の年代をお答えください。

１　20 代　　２　30 代　　３　40 代　　４　50 代　　５　60 代以上

問３　回答者様のお立場をお答えください。

１　常勤カウンセラー　　２　非常勤カウンセラー

３　その他（　　）

問４　回答者様の所属の大学の種類をお答えください。

１　国立大学　　２　公立大学　　３　私立大学

問５　ご所属の大学の学生数をお答えください。

１　500 人未満　　２　500 人～1000 人未満　　３　1000 人～5000 人未満

４　5000 人～10000 人未満　　５　10000 人以上

現在勤務されている学生相談機関での恋愛問題についての相談状況についてお尋ねします。

問６　相談者から，恋愛に関する悩みについて語られたことがありますか？

１．はい　　２．いいえ　（どちらかを選んだ〇でかこんでください。）

問７　問６で「１．はい」を選ばれた方にお尋ねします。

（１）平成 30（2018）年度における，恋愛に関する悩みを主訴とした相談者の実人数をお答えください。

男性（　　）人　　女性（　　）人　　その他（　　）人

（２）平成 30（2018）年度における，別の主訴の相談の中で恋愛の悩みを訴えた相談者の実人数をお答えください。

男性（　　）人　　女性（　　）人　　その他（　　）人

問８　問７で回答いただいた相談者の恋愛相談が，主に恋愛関係のどの段階の相談であるかについて，下の表内にお答えください。また，差し支えない範囲で，印象に残った事例のそれぞれの相談内容の概要をお書きください。なお，ここでいう「恋愛関係」とは，「男女交際」や「付き合っている状態」を指します。

（１）相談者実数

	恋愛関係 成立前	恋愛関係 成立時	恋愛関係 継続時	恋愛関係 崩壊時	恋愛関係 崩壊後	その他
主訴が恋愛問題	（　　）人	（　　）人	（　　）人	（　　）人	（　　）人	（　　）人
主訴が恋愛問題以外	（　　）人	（　　）人	（　　）人	（　　）人	（　　）人	（　　）人

（２）相談内容

事例１　来談時の学年：（　　）年　　性別：（　　）

恋愛関係の段階：　成立前・成立時・継続時・崩壊時・崩壊後・その他（いずれかに○）

主訴　　：　恋愛問題　・　恋愛問題以外　（いずれかに○）

具体的な相談内容と支援

事例２　来談時の学年：（　　）年　　性別：（　　）

恋愛関係の段階：　成立前・成立時・継続時・崩壊時・崩壊後・その他（いずれかに○）

主訴　　：　恋愛問題　・　恋愛問題以外　（いずれかに○）

具体的な相談内容と支援

事例３　来談時の学年：(　　)年　　性別：(　　)

恋愛関係の段階：　成立前・成立時・継続時・崩壊時・崩壊後・その他（いずれかに○）

主訴　　：　恋愛問題　・　恋愛問題以外　（いずれかに○）

具体的な相談内容と支援

問９　恋愛の悩みの相談に応じるときに思うことを自由にお書きください。

ご協力いただき、有難うございました。

表 10　恋愛関係成立前の事例

肯定的	中立的	否定的
・恋愛の成立が講義意欲を高める。 ・恋愛観の話題や，いいと思っている異性がいるというごくごく軽い話題。	・「告白されたり，思ってもみない相手で戸惑っている」という相談に始まり，付き合い始めてから折にふれ相談あり。 ・男性を好きになるという状況がわからない。不眠になる。	・LGBTである女友達が好きになり，でもうまくいかない。 ・恋愛が講義の妨げになっている。 ・CIに恋愛経験がなく，気になる異性との心理的距離の接近に戸惑っている様子だった。 ・大学内に好きな子がいて，相手も自分のことが好きだとわかったが，大学内での評判が悪いので付き合うことに躊躇している。 ・男子学生からつきまとわれてメール等の対応に困っている。 ・同性に対して好意をもっていたが，相手から拒否され，気分の落ち込みがあった。 ・自分の容姿などに自信が持てないため，高校の時から，男性から告白されても断ってきた。将来も男性と交際したり結婚したりできないと訴える。 ・今まで何人かの男子学生とお付き合いしかけていたが，嫌な経験をしたことでトラウマ的になっており，現在声をかけている男性に対して臆病になっている。 ・地方から一緒に上京した高校の同級生に告白したが，ふられてしまった。さらに，「今まで付き合った人が持っていたものを君は持っていない」と言われたことで悩んでしまた。勉強も手につかなくなりそうで困っている。

表 11　恋愛関係成立時の事例

肯定的	中立的	否定的
		・お付き合いしている男性が精神的に不調となり関わり方を相談したい。 ・主訴は「ゼミで2人の男性と友人になり，内1人とつきあうことに。そのことをもう1人に報告したら，その人からも手紙で告白された。私はいくつか行動をミスった」不登校歴，通院服薬歴あり。双極性２Ⅱ型の診断あり。他に仲のよいゼミ生はなく，この２人とうまくいかなくなると友人がいなくなる･･･とのこと。

表 12　恋愛関係継続時の事例

肯定的	中立的	否定的
	・卒業後に彼氏と同棲すべきかについて一緒に考えたが，卒業後にどうなったか不明。 ・現在付き合っている彼がいるけど，前の彼との間で心が揺れている。 ・性に関する相談。 ・サークル活動の人間関係の悩みから，自分自身の恋愛関係の話になる。 ・交際相手とのつきあい方についての相談。 ・相手にどの程度気持ちを伝え，サポートしてもらうか，距離感のとり方を試行錯誤する。	・大学への通学が安定せず，遅刻・欠席が増えていることを主訴に来談。多方面でストレスが生じている様子がある。その中のひとつに遠距離恋愛の彼氏との関係性で気を遣いすぎている面がある。 ・SNSで知り合った30代後半，離婚歴あり，子持ちの彼との関係について。お互いに虐待を受けてきた境遇だが，彼は自分に自信がないのか，「元彼の方がよかったでしょう」と何度も言ってくる。どうやって話せば伝わるのか。「今のあなたが一番」と言い続けても，同じことの繰り返し。 ・付き合い始めた彼から「忙しくてあまり会えない」と言われ，メールの返信も遅かったり，来なかったりする。彼にはどう接したらいいでしょうか。 ・CIに交際歴があると知った恋人が「汚い！」と責めてくるようになったと相談。”汚い女を受け入れてやっているんだから，言うことを聞け”という。 ・交際中の男性の自殺企図，ストーカー被害。 ・細かいことが気になって仕方ない女子学生（自分が人から笑われている気がする，等）でしたが，本学に留学に来ていたアメリカ人の留学生とつき合うようになってから，細かいことで悩まなくなりました。彼とのLINEのやりとりをしていて，返事が来ない等，恋愛のことで相談に来るようになりました。 ・彼の束縛が強く，大学生活（授業や課題）に支障が出てきている，との主訴。周囲からは交際を反対する声が多く，「でも彼のことが好きで・・・」と，彼からの要求に応じる状況（授業や課題が出せなくても）が続く。 ・彼との関係，距離感について，彼の家族のこと，自身の性格，etc。 ・相手への不信感をどのように伝え，確認するか。 ・親密な異性，対人関係全般で本音を出せない，甘えられない，といった依存の課題に関する相談。 ・「つき合って2年ぐらいたつ彼から『お金を貸してほしい』と言われた」と言って相談に来ました。その理由は「学費が払えないから」。彼女は彼が好きで離れなくなかったため，小刻みにして計15万円もお金を貸してしまっていましたが，「返してくれない」と悩んでいました。 ・交際相手から見下されている等ぞんざいな扱われ方をしており，双方の都合が合わないときは相手が高圧的に出てくるためCIが折れている。それでもCIは相手に好意を持っており，相手もそれを見越して高圧的な態度をとっている印象。 ・主訴は重い内容で，つき合っている彼が自分のしんどい状況を分ってくれないという悩み。 ・いびきがうるさい。外国人との交際のための文化差について。 ・本人の行動を制限する彼とのつきあいについて。 ・遠距離恋愛中。彼が連絡をくれない，ケンカした，などの相談 ・現在付き合っている彼の束縛が嫌で別れたい。 ・主訴は「うまく感情をコントロールしたい」。PMSがひどく，婦人科受診中。身体的には落ち着いたが，気分の波（特に怒りっぽくなる）は改善せず。大学では教職を志したが「大変さの割に合わない」と感じてやめ，以来やりたいことがなく休みがち。親しい友人もいない。交際相手や母など，「期待を持つ相手」が思い通りにならないとイライラして物を投げるなど。もう少しマイルドな気持ちを伝えられるようになりたい。 ・内容主訴が不明瞭。自分が何を考えているのかわからない。母親にあわせてきた。束縛される恋愛が落ち着く。過去にいじめの対人トラウマあり。 ・交際中の男子学生から暴力を振るわれて，別れたいと思う一方，自分にも非があるように感じる。 ・恋愛関係がうまくいかないことから，学業に集中することが困難であるという訴え。 ・食行動異常に関する悩みを主訴に来談。一人暮らしの不安から恋人への強い依存性が見られた。 ・精神的な不調について（医療機関で統合失調症と診断，服薬もしている）→付き合っている彼との関係について。彼との関係が良いときは症状も安定している，など。 ・他大学所属の学生と恋愛関係が成立し，継続している。来談者は発達障害の診断を受けているため，大学にも配慮申請し，継続しt来談している。学業・生活面で支援が必要なことが多いため，両親から交際を反対されている。

表 13　恋愛関係崩壊時の事例

肯定的	中立的	否定的
	・別れる際の対応と情報提供	・別れたいがどう切り出すかという相談で始まったが，その後ストーカー行為となった。 ・彼氏との関係が崩壊し，なかなか気持ちの整理がつかない。 ・別れたはずの男子学生から「会いたい」という連絡が執拗に入り，断ると「名誉毀損だ」と言われた。 ・交際相手の思うような行動をしないと，「死にたい」と言われる。交際を続けたくない。 ・LGBTの問題を主訴として来談。つきあっていた女性から別れたいというLINEを受けとり，突然のことで訳がわからない，どうすればよいかと語られた。 ・「失恋をして，その傷つきを話す。そのうち，自分の求める像でないと気づき，自分に合わなかったと納得できる。そしてまた，新たに恋愛する」この一連の流れを繰り返す。 ・一方的に関係を切られたことで深く傷つく。 ・交際していた男性との関係を主訴に来談。寂しさを埋めるかのように他の男性とも関係を持ってしまう。 ・恋愛関係の崩壊時に暴言を吐かれる等があり，気持ちの整理がつかない。 ・親密な異性から別れを切り出され動揺。不安が募り勉強に手がつかない（精神疾患症状が出始めた）。 ・別れ話から彼氏がつきまとうようになり，恐くてどうしたらよいかわからない。

表 14　恋愛関係崩壊後の事例

肯定的	中立的	否定的
	・ネットで知り合った男性への思いやツイッターでのやりとりについて。 ・別のことでの相談であったが，それが落ち着いた頃に整理したいと話し始めた。	・家族との関係を主訴として来談。その中で自分がLGBTであることが語られた。半年ほどつきあっていた彼女から別れたい，友だちでいようといわれた。しかし自分としては友人では納得できない。姿を見ると苦しいので，できるだけ合うことを避けているとのこと（彼女も同学部）。 ・性行為を強要される関係を終わらせたことについての相談。 ・交際解消後，相手とトラブルになり，脅迫を受けたりして困っているとの相談。 ・同じゼミで顔を合わせるのが辛い。付き合いから別れに至るまでを話す。 ・つき合っていた彼に新しい彼女ができ，色々もめた結果，別れることになった。別れた後も授業で顔を合わすことがあり，顔を合わせると辛くなる。自分は別れたくなかった。 ・別れた彼氏がストーカー化している。 ・遠距離恋愛中。彼と意見が合わず，ギクシャクが続き，電話で言い合いになり，結局別れた。新しい彼氏ができたが，付き合う相手との距離感がつかめない。 ・過去の交際相手が依存性があり，別れるのが難しかった。別れたあともトラウマが残っている。 ・数週間前からやる気が出ない。学年が上がって授業課題が大変になったのと，少し前に彼と別れたことが原因だと思う。少し話しに来ることで気持ちを落ちつけて整理したい。 ・メンタル既往歴あり。食べれない眠れない体がだるいと訴えるも別れた直後だったことが判明。その後話をしていく中で，繰り返しODをしていることがわかる。 ・交際していた男性に別れを告げたが，その後ストーカーされた。警察に援助を求めた結果，繰り返しの警告後，逮捕された。1年ほど経過したが，未だに男性への恐怖心と自分自身を責める気持ちに苛まれる。 ・出席不良，連絡が取れなくなり，退学。理由として元彼のストーカー行為による精神的な不調が語られた。 ・交際相手の同級生から暴力があり，大学を休んでいる。 ・ストーカー行為に発展。PTSD発症。

表 15　その他の事例

肯定的	中立的	否定的
	・部活で知り合い，好きになった相手がいるが，好意を伝えることができない。伝えたとしても嫌われてしまうと思う。 ・男性を好きになるという状況がわからない。不眠になる	・すぐに相手のことを好きになって性的関係を結んでしまい別れるを繰り返す。 ・バイト先に社員に告白され，断ったところ，その後もしつこく言い寄られ，「つきあってくれなければ，それを理由に仕事を辞める」というようなことを言われた。 ・自分ではお付き合いしていると思っているが相手はそうではないようで，こちらが会いたいと連絡してもムシするが，向こうが会いたくなったら連絡してくる。都合よく利用されているような気がするが聞けないし，自分からもう会わないとも言えない，との話。 ・以前，性的な被害にあったことがきっかけとなり，恋愛関係が深まることに抵抗がある。

謝辞

本論文の作成にあたり,調査に協力くださった,学生相談機関に従事する教職員の方々,福山大学の赤澤淳子先生，愛知学院大学の下村淳子先生，四天王寺大学の上野淳子先生，大学生の皆様，また事例提供を承諾してくださった方々に厚くお礼申し上げます。

鳴門教育大学の葛西真記子先生には，いつも暖かく励ましていただき，粘り強くご指導いただきましたことを心より感謝いたします。

また，ご多忙の中，貴重なご助言を賜りました，兵庫教育大学の遠藤裕乃先生，鳴門教育大学の小倉正義先生，伊藤弘道先生，吉井健治先生，そして兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科の先生方に厚くお礼申し上げます。さらに，職場の同僚のみなさまにも大変お世話になりました。

最後に，身近で応援し続けてくれた家族に，心より感謝を伝えたいと思います。